五　簡單ナル有機化學實驗（二回）

備考

一　授業ニ當リテハ必スシモ本要目ノ順序ニ從フヲ要セス又無機化學實驗、有機化學實驗等ヲ分析實驗中ニ適宜按排シテ課スルヲ妨ケス

二　實驗ニ際シ器具機械類ノ正當ナル使用法ヲ會得セシムルニ注意スヘシ

三　分析事項ヲ課スルニ當リテハ反應ノ本質ヲ理解セシメ以テ機械的ニ操作スルノミナル弊ニ陷ラサラシムルコトヲ期スヘシ

昭和二年七月二十三日文部省令第十五號を以て大正十二年文部省令臨第一號授業日數、授業時數、教員及生徒定員に關し當分機宜の措置を爲し得る件が廢止せられたことは初等普通教育の款に於て述べた通である。

昭和二年十一月二日文部省令第十八號及文部省令第二十一號を以て左の如く高等學校規程中及中學校令施行規則中に改正が行はれた。

○文部省令第十八號

高等學校規程中左ノ通改正ス

第二十七條中「天長節祝日及一月一日」ヲ「天長節、明治節及一月一日」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○文部省令第二十一號

中學校令施行規則中左ノ通改正ス

第十九條中「天長節祝日及一月一日」ヲ「天長節、明治節及一月一日」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は昭和の御代になつてから天長節祝日が無くなつたのと新に明治節が祝日に加へられたが故である。

昭和二年十一月二十二日文部省令第二十六號を以て左の如く中學校令施行規則中に改正が行はれた。

中學校令施行規則中左ノ通改正ス

第十七條第二項中「試驗及」ヲ削ル

第三十四條第一項第五號ヲ左ノ如ク改メ同條第二項中「入學試驗ノ有無」ヲ削ル

五　入學考査、學業成績考査ニ關スル書類

第四十二條中「日本歷史」ヲ「國史」ニ、「試驗」ヲ「檢定」ニ改ム

第四十三條ノ二　削除

第四十四條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項入學者ノ學力ハ當該學年ノ程度ニ於テ之ヲ檢定スヘシ

第四十五條中第二項ヲ削ル
第四十六條中第三項ヲ削ル
第四十七條　各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ

附　則

本令ハ昭和三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十三條ノ二ノ規定ノ改正ニ關シテハ本令公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

從來入學者を選拔するには試驗に依るべきものとし又進級及卒業を認むるにも試驗に依ることを本則としたのであつたが、右は教育上弊害ありとして一切試驗を廢止し、入學に就ては入學志望者の從前の學業成績、進級卒業に就ては在學中の學業成績に依て考査を行ふこととし規程中より總て試驗の文字を除き去つたのである。而して削除された第四十三條の二は卽ち入學者の選拔は試驗に依るべきことを規定したもので、此改正は直に次の年度の入學選拔の場合より適用すべきものとして他の部分に先ち公布の日より之を施行することとしたのである。

同日文部省令第二十八號を以て左の如く高等學校規程中に改正が行はれた。

高等學校規程中左ノ通改正ス

第四十條第一項中「日本歷史」ヲ「國史」ニ、「試驗」ヲ「檢定」ニ改メ同條第二項ヲ削ル
第四十一條第二項及第四十六條第二項ヲ左ノ如ク改ム
前項入學者ノ學力ハ當該學年ノ程度ニ於テ之ヲ檢定スヘシ
第四十四條　當該高等學校尋常科ヲ修了シタル者以外ノ入學志願者ノ數高等科各科ニ入學セシムヘキ人員ニ超過ス

ルトキハ入學前ニ於ケル學業成績ト中學校第四學年修了ノ程度ニ依リ行フ試驗ノ成績トヲ併セ考査シテ入學者ヲ選拔スヘシ但シ試驗ハ之ヲ行ハサルコトヲ得
前項ノ考査ノ外必要アリト認ムルトキハ入學志願者ニ對シテ人物考査ヲ行フコトヲ得
第四十五條中「體格檢査」ヲ「身體檢査」ニ改ム
第四十七條中第二項ヲ削ル
第五十條　高等學校尋常科各學年ノ課程又ハ全學科ノ修了ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ但シ正當ノ事由アリテ試驗ニ缺席シタル者ニ對シテハ平素ノ學業成績ノミヲ考査シテ之ヲ定ムルコトヲ得
高等學校高等科各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業及試驗ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ
試驗ハ學校長ノ見込ニ依リ之ヲ行ハサルコトヲ得

附　則

本令ハ昭和三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十四條ノ規定改正ハ本令公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の改正も亦同時に公布せられた前揭中學校令施行規則の改正と同一の精神に出たもので、卽ち尋常科に在ては中學校と同樣入學者の選拔も進級及卒業の認定も一切試驗に依らず從來の學業成績に依て考査すべきものとし、高等科に在ては尋常科修了以外の入學者の選拔並に進級及卒業の認定には、從來の學業成績と試驗の成績とを考査して之を定むべきものとしたのである。尙ほ尋常科及高等科の入學者選拔に關する改正規定は、直に次の學年の入學者選拔の場合より適用すべきものとして他の部分に先ち公布の日より之を施行することとしたのである。

同日文部省は北海道廳、府縣に對する同省訓令第十九號を以て左の如く中學校令施行規則中改正の趣旨を明にした。

今般文部省令第二十六號ヲ以テ中學校令施行規則中ニ改正ヲ加ヘタリ左ニ其ノ要旨ヲ擧ケ且實施上注意スヘキ事項ノ大要ヲ示サン

現行制度ニ於テハ中學校第一學年入學志願者ノ數入學セシムヘキ人員ヲ超過スル場合ニハ試驗ニ依リテ入學者ヲ選拔スヘキコトヲ規定シ其ノ他ノ中等學校ニ於テモ多クハ學則等ヲ以テ同樣ノ規定ヲ設ケ多年ノ間入學者選拔試驗ヲ實施シ來リタレトモ之ニ伴フ弊害少カラス就中小學校卒業者ノ中等學校入學ノ場合ニ於テ最モ然リトス抑々小學校教育ハ兒童ニ對シ道德教育及國民教育ノ基礎ヲ授クルト共ニ其ノ身體ノ發達ニ深ク留意スヘキハ多言ヲ要セス然ルニ其ノ卒業ノ後中等學校ニ入學セントスル者ヲ觀ルニ小學校在學中ヨリ只管之カ準備ニ沒頭シ知ラス識ラスノ間ニ其ノ心身ノ發達ニ惡影響ヲ及ホスハ國民ノ將來ニ對シ洵ニ寒心ニ勝ヘサルナリ加之コレカ爲ニ國民教育精神ニ背戻シ小學校教育ノ本旨ヲ沒却スルニ至リテハ最モ深ク憂フヘキ所ナリ入學試驗ニ伴フ弊害前述ノ如シトセハ其ノ制度ニ對シ改正ヲ加フルハ刻下ノ急務ナリトス

今回ノ改正ハ中等學校ノ入學者ヲ選拔スルニ從來ノ如キ試驗ハ之ヲ行ハサルコトヲ以テ本體トシ中學校令施行規則第四十三條ノ二ヲ削除セリ而シテ之カ選拔ニ當リテハ主トシテ出身小學校ニ於ケル成績等ニ據リ更ニ人物考査竝身體檢査ヲ用ヒテ入學者ヲ決定スヘキモノトセリ尙其ノ實施ノ細目ニ至リテハ別ニ示ス所アルヘク各學校ニ於テハ之ニ基キ學則等ノ改正ヲ行ヒ實施上遺憾無キヲ期セシメラルヘシ尤モ其ノ示ス所ハ選拔方法ニ關スル準則ニシテ地方及學校ノ情況ニ依リ特別ノ必要アル場合ニ於テハ改正ノ本旨ニ反セサル限リ事情ヲ斟酌シ適當ナル選拔方法ヲ採ルヲ妨ケサルモノトス

又中等學校ニ於ケル教育ノ旨趣ヲ貫徹セシメントスルニハ生徒ヲシテ一意專心所定ノ課程ヲ學習セシメサルヘカラサルニモ拘ラス從來學期及學年ノ試驗ヲ實施スルカ爲ニ動モスレハ生徒ヲシテ一ニ試驗ノ爲ニ勉學セシムルカ如キ弊モ少シトセス依テ自今生徒ノ成績ハ平素ノ修學ニ重キヲ置キテ之ヲ考査シ又之ニ依リテ修了若ハ卒業ヲ定メ一層自學自習ノ氣風ヲ養成セシムル旨趣ヲ以テ中學校令施行規則第四十七條ヲ改正セリ

高等學校、專門學校、實業專門學校等ノ入學者選拔方法ニ關シテハ中等學校ト多少其ノ趣ヲ異ニス、其ノ志願者ノ年齡相當ニ長シタルコト、其ノ出身學校全國ニ亙ルコト、其ノ出身學校ノ種類等ノ必スシモ一致セサルコト等ノ事情ニ鑑ミ或程度マテ選拔試驗ヲ行フノ必要ヲ認ムルト共ニ志願者ノ出身學校ニ於ケル成績等ヲ重ンシ之ヲ選拔試驗ノ成績ト對照シ之ヲ以テ入學者選拔ノ基準トセリ又其ノ學期及學年ノ試驗ニ就キテモ中等學校ノ場合ト事情ヲ異ニスルヲ以テ一般ニ之ヲ禁止セサルコトトセリ

今回改正ノ旨趣右ニ述フルカ如キヲ以テ教育當事者タル者宜シク協心戮力シテ實效ヲ收メンコトヲ期スヘク而シテ之カ爲ニハ學校當事者ハ嚴正公平情實ニ捉ハルルコトナク監督ノ局ニアル者亦克ク此ノ旨趣ヲ諒シ學校當事者ヲシテ其ノ職責ヲ完ウセシムルニ於テ遺憾ナキヲ期セラルヘシ

同日中學校に於ける入學者選拔方法に關し文部次官より各地方長官に對し左記發普第三〇四號通牒を發した。

中等學校試驗制度改正ニ關スル件

今般學校ノ入學、進級及卒業ノ試驗制度ニ關シ文部省令ノ改正並文部省訓令ノ發布有之タルニ付テハ貴管內中等學校ニ於テ第一學年ノ入學志願者ノ員數カ募集人員ニ超過シタル場合ニ於テハ右訓令ノ趣旨ヲ體シ大體左記ノ要項ニ

依リ入學者ヲ選拔セシメラルル樣致度尤モ本件ハ其ノ準則ヲ示スモノニシテ必スシモ劃一ヲ强フルノ旨趣ニアラス學校又ハ地方ノ情況ニ依リ必要ナル場合ニ於テハ改正ノ精神ニ反セサル限リ適當ナル選拔方法ヲ採ラシメラルルモ差支無之義ニ付御了知有之度依命此段通牒ス

記

一、中等學校第一學年入學志願者ニ就テハ出身小學校長ヲシテ當該兒童ノ小學校ニ於ケル凡ソ最終二學年ノ學業成績、身體ノ狀況、特性、其ノ他必要ナル事項（上級學校進學ニ關スル志望ノ確否、性能ノ適否、小學校卒業後ニ於ケル學歷又ハ經歷及其ノ成績等）ニ付詳細ニ調査シ志願中等學校長ニ直接其ノ意見ヲ報告セシムルコト

前項ノ外中等學校長ヨリ要求アリタルトキハ出身小學校長ヲシテ必要ナル調査書ヲ提出セシムルコト

二、中等學校ニ於テハ大體左ノ要項ニ依リ入學者ノ決定ヲ爲スコト但シ實業學校ニ於テハ學校又ハ學科ノ種類ニ依リ特別ノ考慮ヲ爲スコト

イ、小學校長ノ報告ニ係ル事項ニ基キ募集員數以上適宜ノ員數ヲ考査選拔スルコト

ロ、前號ニ依リ選拔シタル者ニ付人物考查（常識、素質、性行等ノ考查）竝身體檢查ヲ爲スコト但シ人物考查ニ就テハ主トシテ平易ナル口頭試問ノ方法ヲ用ヒ且小學校長ノ報告ヲ參酌スルコト

ハ、前號ニ依リ考查選拔シタル者尙募集員數ヲ超過スルトキハ順次優良ト認ムヘキ者ヲ入學セシメ同一順位ニ在リテ優劣ヲ判定シ難キ者ニ付テハ抽籤ニ依リ入學者ヲ決定スルコト

三、都市等ニ在リテハ數多ノ學校間ニ於テ聯合シテ考查ヲ行ヒ入學志願者ノ志望順位ニ依リテ入學セシムル等所謂綜合制ヲ採ルヲ可トスルコト

同日高等學校に於ける試驗制度改正に關し、文部次官より各地方長官及各高等學校長に對し左記發專一四一號通牒が發せられた。

○發專一四一號　各地方長官宛

高等學校試驗制度改正ニ關スル件

今般高等學校尋常科ニ於ケル入學、進級及修了ノ試驗制度竝ニ高等科ニ於ケル入學者選拔ノ制度ニ關シ高等學校規程ノ改正有之タル處右ハ大體ニ於テ中等學校ニ於ケル入學、進級及卒業ニ關スル試驗制度ノ改正ト同一方針ニ基ケルモノナルニ付本日發布ニ係ル文部省訓令第十九號ノ旨趣ヲ遵守シ之カ實施ニ付テハ大要左記要項ニ依リ萬遺漏ナキヲ期セラレ度依命此段通牒ス

左　記

一、尋常科ノ入學者選拔方法ニ關シテハ本日付發普三〇四號文部次官通牒ニ準スルコト

二、官立高等學校ニ於ケル高等科入學者選拔方法要項ハ別冊ノ通ニシテ公私立高等學校ニ於テモ右要項ニ準スルコト（別冊略ス）

三、高等學校高等科入學者選拔方法改正ノ結果トシテ中等學校ニ於テ學業成績其ノ他調査書ノ作成ヲナスコトヲ要ス而シテ其ノ報告ノ遲速ハ高等學校ニ於ケル入學者ノ決定ヲナスニ重大ナル關係アルヲ以テ十分ニ之ヲ督勵シテ期日ノ確守ヲ期セシメラレタキコト

四、官立實業專門學校ニ於ケル入學者選拔方法ニ關シテモ別冊要項ノ通改正セラレタルヲ以テ中等學校ニ於ケル學

業成績其ノ他ノ調査書ノ提出ニ付テモ前項同様期日ノ確守ヲ期セシメラレタキコト

○發專一四一號　各高等學校長宛

高等學校試驗制度改正ニ關スル件

今般高等學校尋常科ニ於ケル入學、進級及修了ノ試驗制度竝高等科ニ於ケル入學者選拔ノ制度ニ關シ高等學校規程ノ改正有之タル處右ハ大體ニ於テ中等學校ニ於ケル入學、進級及卒業ニ關スル試驗制度ノ改正ト同一方針ニ基ケルモノナルニ付本日發布ニ係ル文部省訓令第十九號ノ旨趣ヲ遵守シ之カ實施ニ付テハ大要左記要項ニ依リ萬遺漏ナキヲ期セラレ度依命此段通牒ス

左記

一、尋常科ノ入學者選拔方法ニ關シテハ本日付發普三〇四號文部次官通牒ニ準スルコト（別紙添付略ス）

二、官立高等學校高等科入學者選拔方法要項別冊ノ通定メタルニ付本要項ニ依リ入學者ノ選拔ヲナスコト尚公私立高等學校ニ於テモ本要項ニ準スルコト

三、高等科ノ入學者選拔ニ付別紙ノ通地方長官宛通牒シ置キタルニ依リ其ノ旨了知セラレタキコト

別紙

高等學校高等科入學者選拔方法改正ノ結果トシテ中等學校ニ於テ學業成績其ノ他調査書ノ作成ヲナスコトヲ要スルヲ而シテ其ノ報告ノ遲速ハ高等學校ニ於ケル入學者ノ決定ヲナスニ重大ナル關係アルヲ以テ十分ニ之ヲ督勵シテ期日ノ確守ヲ期セシメラレタキコト

（別冊）

官立高等學校高等科入學者選拔方法要項

第一　入學者選拔ノ方法

一、入學者ヲ選拔スルニハ志願者ノ入學前ニ於ケル學業成績ト選拔試驗ノ成績トヲ併セ考査スルコト

二、志願者ノ入學前ニ於ケル學業成績ト選拔試驗ノ成績トハ對等ノ價値アルモノトシテ考査スルコト但シ昭和三年及昭和四年ニ於テハ右考査標準ニ相當斟酌ヲ加フルコト

三、以上ノ外入學志願者ニ對シ口頭試問ノ方法ニ依リ性行其ノ他ニ就キ考査ヲ行フヲ得ルコト但シ志願者ノ入學前ニ在學シタル學校長ノ調査書ヲ參酌スルコト

四、身體檢査ハ從前通リ之ヲ行フコト

第二　選拔試驗

一、各高等學校ハ同時ニ入學者選拔試驗ヲ施行スルヲ廢止スルコト

二、入學者選拔試驗ハ一回之ヲ行ヒ二班制度ヲ廢止スルコト

三、選拔試驗科目ハ三科目以內トシ各高等學校ニ於テ中學校第四學年以下ノ學年ノ必修科目中ヨリ之ヲ選定シ每年十二月十五日マテニ文部省ニ報告シ十二月二十日前後ノ官報ヲ以テ文部省ヨリ告示スルコト但シ昭和三年及昭和四年ニ於テハ選拔試驗科目ハ四科目マテ之ヲ課スルコトアルヘシ

四、選拔試驗問題ハ各高等學校ニ於テ之ヲ作成スルコト但シ暗記ニ偏スルモノヲ避ケ理解、判斷、推理ノ能力ヲ試スヲ旨トスルコト

第三　學業成績ノ考查

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

一、入學志願者ハ入學試驗檢定料ヲ添ヘ入學願書ヲ其ノ志願學校ヘ直接提出シ同時ニ其ノ入學前ニ在學シタル學校長ニ其ノ旨申出ツルコト

二、前項ノ學校長ハ最終二學年（學校卒業者ニ在リテハ三學年）間ノ學業成績證明書竝性行及身體ノ狀況ニ關スル調査書ヲ志願學校長ニ進達スルコト

必要アル場合ハ前項ノ外高等學校長ハ學校長ニ要求シテ諸種ノ調査書ヲ提出セシムルヲ得ルコト

三、試驗若ハ檢定ノ合格ニ依リ入學資格ヲ有スル志願者ニ付テハ當該試驗若ハ檢定ノ成績ハ之ヲ入學前ニ於ケル學業成績ト看做スコト但シ其ノ成績ニ付テハ相當斟酌ヲ加フルヲ得ルコト

前記ノ志願者ノ入學願書ハ直接提出セシメタル上當該試驗若ハ檢定ヲ施行シタル官廳又ハ學校ニ對シ成績其ノ他參考トナルヘキ事項ヲ照合スルコト

四、入學前ニ於ケル學業成績ハ各學科目別成績、平均成績及學年又ハ學級中ニ於ケル順位等ヲ參酌シテ之ヲ考査スルコト

第四　雜

一、入學者ノ選拔ヲナスタメニ行フ選拔試驗竝學業成績ノ考査等ハ數個ノ學校間ニ於テ所謂綜合制ニ依リ之ヲ行フヲ得ルコト

二、公私立高等學校竝北海道帝國大學豫科及東京商科大學豫科ニ於ケル入學者選拔ニ關スル規程竝取扱ニ關シテハ本案ニ準スルコト

同日又左記文部省令第二十九號が發せられた。

官立高等學校高等科入學者選拔試驗規程ハ之ヲ廢止ス

前記中學校に於ける試驗制度の改正に關し昭和二年十一月二十六日各地方長官に對し文部省普通學務局長より左記發普三二六號通牒を發した。

中學校高等女學校ノ學則變更ニ關スル件通牒

本月二十二日文部省令第二十六號同第二十七號ヲ以テ中學校令施行規則竝高等女學校令施行規則中ニ改正ヲ加ヘラレ又文部省訓令第十九號ヲ以テ右ニ關スル訓令ヲ發セラレタルニ付テハ從來中學校高等女學校ノ入學者選拔ニ關シ本省ノ認可ヲ得テ徵收セル入學試驗料等ハ自今入學考査料ト見做シ更メテ認可ノ手續ヲ要セサルニ付御了知相成度尙學則中生徒ノ入學、課程ノ修了及卒業ノ認定ニ關スル事項ノ改正報告書ハ便宜貴管內分ヲ一括シテ御送附相成度

昭和二年十二月二十日官立高等學校に對し左記文部省訓令第二十二號が發せられた。

昭和元年文部省訓令第一號官立高等學校高等科入學檢定料ノ取扱方ハ之ヲ廢止ス

昭和三年三月三十一日高等學校に對する文部省訓令第四號を以て左の如く高等學校高等科地理、心理及論理の教授要目が定められた。

高等學校高等科地理、心理及論理教授要目左ノ通定ム

地理教授要目（約六十時間）

教授方針

地表ニ於ケル人類ノ種族的經濟的政治的活動ト地理的自然環境トノ密接ナル關係ヲ說明シ、現代ニ於ケル世界ノ重要ナル諸國ノ狀況ヲ知ラシムルヲ以テ要旨トス

教授要目

一　地理學ノ意義及分類

二　自然環境ト人生

氣候、地形及其ノ他ノ自然環境ト人生トノ關係

三　世界ノ種族

種族別竝其ノ分布

四　人口

人口ノ密度、增減、分布、移民及植民等

五　村落及都市

其ノ種類、形成、大小、盛衰竝分布

六　原料生產業及其ノ資源

農業、林業、牧畜業、水產業、鑛業ノ地理的分布、生產ノ狀態

七　工業

原料、動力等ト工業トノ地理的關係

八　商業

商業特ニ貿易ノ發達ト其ノ地理的環境

九　交通

世界ニ於ケル主要ナル鐵道、航路、航空路及通信網等

一〇　國家

國家、國民及民族

一一　領土

領土及其ノ種類、國境問題

一二　國際聯盟

國際聯盟ノ管理地及保護地、國際河川、委任統治、民族保護

一三　主要諸國ノ現狀

支那、インド、オランダ領東インド、イギリス、ドイツ、フランス、イタリヤ、ソヴイエト聯邦、アメリカ合衆國、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、オーストラリヤ等

一四　世界ニ於ケル日本ノ地位

備考

本要目中ノ事項ニ就キテハ適宜其ノ順序ヲ變更シ又ハ取捨スルヲ妨ケス

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

心理教授要目（約六十時間）

一　心理學ノ對象、方法、部門。
二　精神作用ノ生理的基礎。
三　意識。無意識。行動。
四　感覺。視覺、聽覺、味覺、嗅覺、皮膚感覺、有機感覺、平衡感覺、運動感覺等。感覺ト刺戟トノ關係。うえーべるノ法則。
五　知覺。空間知覺、時間知覺等。錯覺、幻覺。
六　注意。
七　表象。聯合。記憶。學習。忘却。供述。
八　想像。思考。概念、判斷、推理。思考ト言語トノ關係。
九　感情。情緒。情操。表出。じえーむす・らんげ說。
一〇　本能。衝動。意志。練習。疲勞。
一一　人格。自我。個性。素質。
一二　個人ト社會トノ關係。

備考

一　本要目ハ文科ト理科トニ依リ多少內容ヲ加減シ得ルコト　特ニ理科ニアリテハ論理的事項ヲ適宜ニ加ヘ得ルコト。

二　發達的、社會的及變態的方面ノ知識ヲ適當ニ加フルコト。
三　教授ニ際シテハ適宜供覽及實驗ヲ用フルコト。
四　各項ノ排列及分合ハ必スシモ本要目ニ據ルヲ要セサルコト。

論理教授要目（約六十時間）

教授方針

從來ノ形式論理學ノ組織ト近時ノ諸說ノ大要トヲ敍述シ、其ノ間常ニ其ノ講義ノ體系的構造ニ留意シ、以テ思想齊整ノ訓練トナラシメ、併セテ一般學術ノ研究ニ於ケル實用ノ點ヲ顧慮シ、且ツ其ノ文化ニ於ケル意義ヲ說明スルコト。

教授要目

一　論理學ノ概念
二　論理學ト他學トノ關係
三　論理學ノ價値及機能
四　論理學ノ沿革及現代論理學ノ諸傾向
五　論理學ノ基本原理

六　概念ノ本質、構成及發達
七　概念ノ內包及外延

八　概念ノ種類
九　範疇

一〇　判斷ノ本質及構成
一一　判斷ノ種類
一二　主概念ト賓概念トノ包攝關係

一三　推理ノ本質及種類（直接及間接）
一四　直接推理（判斷ノ對當及變形等）
一五　間接推理ノ原理及種類（定言的、假言的、選言的）
一六　定言的推論式（規則、格及式）
一七　假言的推論式
一八　選言的推論式
一九　兩刀論法
二〇　推論式ノ省略及複合諸形
二一　推論式ノ價値
二二　演繹推理、歸納推理、類比推理

二三　推理ノ誤謬及虛僞

二四　方法論ノ意義及區分（探求的及統整的研究法）
二五　研究法一般（分析及綜合、記述及說明等）

二六　演繹法ト歸納法
二七　因果律ト自然法則
二八　觀察ト實驗
二九　歸納的方法
三〇　確率及統計
三一　憶說及檢證

三二　定義
三三　分類
三四　論證
三五　方法上ノ誤謬

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

三六　科學ノ體系

備考

一　本要目ハ論理學教授上主トシテ準據スヘキ教材ヲ擧ケタルモノニシテ、其ノ選擇及排列ハ必スシモ之ニ依ルヲ要セス。

二　思考練習ノ手段トシテ隨時問題ヲ課スルコトヲ要ス。

三　方法論ノ教授ニ際シテハ特ニ文科的諸學科ノ研究法ニ注意スルコトヲ可トス。

四　要目中他ノ學科（哲學概說、心理學、自然科學、數學等）ト重複スルモノハ適宜ニ省略スルコトヲ得。

文部省に於ては中學教育内容の改善を企て昭和三年九月二十八日左記諮詢第十一號が文政審議會に附議せられた。

諮詢第十一號

左記要項ニ依リ中學教育ヲ改善セントス

記

第一　左ノ旨趣ニ依リ新ニ生徒教養ノ要旨ヲ規定スルコト

中學校ニ於テハ中學校令ノ旨趣ニ基キ小學校教育ノ基礎ニ據リ一層高等ノ程度ニ於テ道德教育及國民教育ヲ施シ生活上有用ナル普通ノ智能ヲ養ヒ且體育ヲ行フコトヲ旨トシ特ニ左ノ事項ニ留意シテ其ノ生徒ヲ教養スルコト

一、教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ學校教育ノ全般ヨリ道德教育ヲ行ハンコトヲ期シ常ニ生徒ヲ實踐躬行ニ導キ殊ニ國民道德ノ養成ニ意ヲ用ヒ我カ建國ノ本義ト國體ノ尊嚴ナル所以トヲ會得セシメ忠孝ノ大義ヲ明ニシ其ノ信念ヲ鞏固ナラシムルヲ期スヘキコト

二、獨立自主ノ精神ヲ養ヒ勤勞ヲ愛好スルノ習慣ヲ育成シ且協同ヲ尚ヒ責任ヲ重ンスル觀念ヲ涵養スルニ努ムヘキコト

三、專ラ心力ノ啓發ヲ旨トシ徒ニ專門的學術ノ體系ニ泥ムコトナク社會生活上適切ナル智能ヲ養ハンコトヲ期スヘキコト

四、生徒ノ身體ヲ强健ナラシムルト共ニ精神ヲ鍛錬シ青年ノ潤達ナル氣風ヲ養ハンコトヲ期スヘキコト

第二　左ノ旨趣ニ依リ學科課程ヲ整理按排スルコト

一、中學校ニ於テハ道德、公民科、國語漢文、歷史、地理、外國語、數學、理科、圖畫、音樂、作業科、體操ヲ基本科目トシ國語漢文、法制經濟、外國語、數學、博物、物理及化學、衞生、圖畫、音樂、實業ヲ增課科目トスルコト

第一學年、第二學年ニ在リテハ基本科目ノミニ付一樣ノ學科課程（每週教授總時數各約三十時）ヲ定メテ之ヲ學習セシメ第三學年以上ニ在リテハ基本科目ニ付一樣ノ學科課程（每週教授時數約二十時）ヲ定メテ之ヲ學習セシムルノ外增課科目ヲ課スルコト、シ其ノ選擇組合セニ依リテ第一種及第二種ノ兩課程ヲ編制シ生徒ヲシテ何レカ其ノ一課程ヲ選修セシムルコト但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校ニ於テ第一種課程又ハ第二種課程ノミヲ設クルヲ得シムルコト

兩課程ノ增課科目ニ付テハ其ノ各學科目ニ配當スヘキ每週教授時數又ハ其ノ最大限及最小限ヲ定ムルト共ニ增課科目ニ充ツヘキ總時數ノ最大限及最小限ヲ定メ其範圍内ニ於テ地方ノ情況ニ依リ學科目及教授時數ニ付適宜

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

選擇組合セ（第一種課程ニ在リテハ必ス實業ヲ加ヘ第二種課程ニ在リテハ必ス外國語ヲ加ヘ又兩課程共成ルヘク國語漢文ヲ加ヘシムルコト）ヲ行フヲ得シムルコト

二、第一種課程ヲ選修シタル者及第二種課程ヲ選修シタル者共ニ資格其ノ他ニ關シテハ差別ヲ設ケサルコト

第三　左ノ旨趣ニ依リ學科ノ內容ヲ改善スルコト

一、特ニ國民精神ノ涵養ニ力ムルヲ旨トシ道德、國語漢文、歷史、地理等ノ教授內容ヲ改ムルコト

イ、修身ノ名稱ヲ道德ト改メ從來ニ比シ一層我カ建國ノ體制ト國體ノ本義ヲ明ラカナラシムルニ力メ新ニ道德及社會生活ノ原理ノ概要ヲ授ケ特ニ我カ國民道德ニ關スル信念ヲ一層鞏固ナラシムルニ力ムルコト

ロ、國語漢文講讀ノ材料ニ於テ從來ニ比シ國民性ノ涵養ニ資スヘキモノヲ一層多カラシメ又國語ニ於テハ從來近古文ニ止メタルヲ簡易ナル中古文及上古文ニモ及ホシ又漢文ハ日本外史、日本政記、大日本史等ノ如キ邦人ノ著作ヲ主トシ論語、孟子等ノ如キ古來國民思想ニ關係アリタル漢籍ヨリ之ヲ選ヒ增課科目ニアリテハ國語漢文共ニ主トシテ古今ノ名家ノ著書又ハ其ノ抄本ヲ使用セシムルコト

ハ、歷史ノ教授ハ徒ニ細密ナル事實ノ穿鑿ニ流ルヽノ弊ヲ防クニ力メ特ニ國史教育ノ充實ヲ期シ外國歷史ハ稍々之ヲ簡約ナラシメ更ニ歷史教授ノ順序ヲ改メ低學年ニ於テハ國史ヲ背景トスル東洋史ヨリ始メ西洋史ニ進ミ高學年ニ於テ國史ヲ授ケ日本文化史ヲ以テ終結スルモノトシ又ハ低學年ニ於テ國史ヲ成ルヘク鄉土材料ニ依リテ教授スルニ始メ次ニ東洋史、西洋史ニ及ホシ高學年ニ於テ審ニ國史ヲ授クルモ可ナルモノトスルコト

ニ、地理ハ本邦ノ世界ニ於ケル地位ヲ知ラシメ國民的自覺ヲ促スニ資スル爲外國地理ヲ授クル場合ニ於テモ特ニ經濟、產業等ニ付本邦ト密接ノ關係アル地方ヲ審カニシ其ノ他ノ地方ハ比較的簡約ナラシムルコト

二、實際生活ニ有用ナル智能ヲ養ヒ且勤勞ヲ愛好スルノ精神ヲ涵養スル爲作業科ヲ新設シ理科實業等ノ教授內容ヲ改ムルコト

イ、作業科ハ之ヲ基本科目トシ五學年ヲ通シテ之ヲ課シ作業ニ依リ勤勞ヲ愛好スルノ氣風ヲ養ヒ兼ネテ日常生活上有用ナル智能ヲ得シムルヲ以テ旨トシ園藝、工作其ノ他ノ作業ヲ其ノ內容ト爲スコト

ロ、從來ノ博物、物理及化學ヲ綜合シテ理科ヲ設ケ必スシモ專門的科學ノ體系ニ泥ムコトナク實際生活ニ有用ナル知識ヲ養フニ力メ殊ニ從來ニ比シ觀察實驗ニ重キヲ置キ且教授順序ハ第一學年ニ於テ日常生活ニ關スル一般理科ヨリ始メ第二學年以後博物的事項、物理及化學的事項ヲ併セ課シ又ハ第一學年及第二學年ニ於テ一般理科的事項、物理及化學的事項ニ進ミ第五學年ニ於テ應用理科ヲ課スルモノトシ又ハ第一學年ヨリ第三學年ヨリ第五學年ニ至ル迄博物的事項、物理及化學的事項ヲ課スルモノトスルコト

ハ、實業ハ每週教授時數ヲ增加シ第三學年ヨリ之ヲ課シ農業、工業、商業等ヲ綜合シ又ハ適宜分合シテ其ノ內容ヲ定メ特ニ實習作業ニ重キヲ置クコト

三、新ニ公民科ヲ設ケテ基本科目トナシ從來ノ法制經濟ノ知識的教育ニ傾キシニ鑑ミ其ノ教授ハ法制上經濟上及社會上ノ事項ノ概要ヲ授クルト同時ニ特ニ遵法ノ精神ト共存共榮ノ本義トヲ會得セシメ公共ノ爲ニ奉仕シ協同シテ事ニ當ルノ氣風ヲ養ヒ公民的陶冶ヲ爲スヲ旨トシ殊ニ道德、歷史、地理、實業等ノ教授ト聯繫ヲ保タシムルコト

四、學科課程ヲ全般ニ亙リ整理按排スル關係上從來比較的多クノ時數ヲ配當シタル外國語、數學ノ每週教授時數ヲ減少シ其ノ基本的知識ハ基本科目トシテ一樣ニ之ヲ授ケ進ミタル程度ノ學習ハ增課科目ニ於テ選修セシムル

モノトスルコト

右ニ關スル意見ヲ求ム

文政審議會は右に對し昭和四年六月二十日左の答申を爲した。

答　申

諮詢第十一號中學教育改善ニ關スル要項ハ別紙ノ通修正ノ上實施相成リ然ルヘシト認ム尚之カ實施ニ關シテハ左ノ各項ヲ實行セラレンコトヲ望ム

一、第二種課程ニ於ケル外國語、數學ノ毎週教授時數ノ最大限ハ之ヲ現行時數以下ニ減少セサルコト

一、劍道又ハ柔道ハ之ヲ必ス課スルモノトセラレタキコト

（別紙）

諮詢　第十一號中學教育改善要項中傍書ノ通修正スルモノトス（小字ハ修正文ナリ）

諮詢第十一號

左記要項ニ依リ中學教育ヲ改善セントス

記

第一　左ノ旨趣ニ依リ新ニ生徒教養ノ要旨ヲ規定スルコト

中學校ニ於テハ中學校令ノ旨趣ニ基キ小學校教育ノ基礎ニ據リ一層高等ノ程度ニ於テ道德教育及國民教育ヲ施シ生活上有用ナル普通ノ智能ヲ養ヒ且體育ヲ行フコトヲ旨トシ特ニ左ノ事項ニ留意シテ其ノ生徒ヲ教養スルコト

一、教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ學校教育ノ全般ヨリ道德教育ヲ行ハンコトヲ期シ常ニ生徒ヲ實踐躬行ニ導キ殊ニ國民道德ノ養成ニ意ヲ用ヒ我カ建國ノ本義ト國體ノ尊嚴ナル所以トヲ會得セシメ忠孝ノ大義ヲ明ニシ其ノ信念ヲ鞏固ナラシムルヲ期スヘキコト

二、獨立自主ノ精神ヲ養ヒ勤勞ヲ愛好スルノ習慣ヲ育成シ且協同ヲ尚ヒ責任ヲ重ンスル觀念ヲ涵養スルニ努ムヘキコト

三、專ラ心力ノ啓發ヲ旨トシ徒ニ專門的學術ノ體系ニ泥ムコトナク社會生活上適切有用ナル智能ヲ養ハンコトヲ期スヘキコト

四、生徒ノ身體ヲ強健ナラシムルト共ニ精神ヲ鍛錬シ青年ノ潤達ナル氣風ヲ養ハンコトヲ期スヘキコト

第二　左ノ旨趣ニ依リ學科課程ヲ整理按排スルコト

一、中學校ニ於テハ修身、道德、公民科、國語漢文、歷史、地理、外國語、數學、理科、圖畫、音樂、作業科、體操ヲ基本科目トシ國語漢文、法制經濟、外國語、數學、博物、物理及化學、衞生、圖畫、音樂、實業ヲ增課科目トスルコト

第一學年、第二學年、第三學年

第一學年、第二學年ニ在リテハ基本科目ノミニ付一樣ノ學科課程（毎週教授總時數第一學年、第二學年ニ在リテハ各約三十時、第三學年ニ在リテハ約三十二時）第四學年以上（毎週教授總時數約三十時）ヲ定メテ之ヲ學習セシメ第三學年以上ニ在リテハ基本科目ニ付一樣ノ學科課程（毎週教授時數約二十時）ヲ定メテ之ヲ學習セシムルノ外增課科目ヲ課スルコト、シ其ノ選擇組合セニ依リテ第一種及第二種ノ兩課程ヲ編制シ生徒ヲシテ何レカ其ノ一課程ヲ選修セシムルコト但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校ニ於テ第一種（尙第三學年ニ在リテモ基本科目（毎週教授時數約二十時）ノ外增課科目ヲ課シ第一種

及第二種ノ兩課程ヲ編制スルヲ得シムルコト

課程又ハ第二種課程ノミヲ設クルヲ得シムルコト

特別ノ事情アル場合ニ於テハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學校ニ於テ第一種課程又ハ第二種課程ノミヲ設クルヲ得シムルコト

兩課程ノ增課科目ニ付テハ其ノ各學科目ニ配當スヘキ每週教授時數又ハ其ノ最大限及最小限ヲ定ムルト共ニ增課科目ニ充ツヘキ總時數ノ最大限及最小限ヲ定メ其ノ範圍內ニ於テ地方ノ情況ニ依リ學科目及教授時數ニ付適宜選擇組合セ（第一種課程ニ在リテハ必ス實業ヲ加ヘ第二種課程ニ在リテハ必ス外國語ヲ加ヘ又兩課程共成ルヘク國語漢文ヲ加ヘシムルコト）ヲ行フヲ得シムルコト

又其ノ選擇組合セニ關シテハ左ノ旨趣ニ依ルコト

1　實業ハ第一種課程ニ在リテハ必ス之ヲ加フルコト

2　國語漢文ハ兩課程共ニ成ルヘク之ヲ加ヘシムルコト

二、第一種課程ヲ選修シタル者及第二種課程ヲ選修シタル者共ニ資格其ノ他ニ關シテハ差別ヲ設ケサルコト

第三　左ノ旨趣ニ依リ學科ノ內容ヲ改善スルコト

一、特ニ國民精神ノ涵養ニ力ムルヲ旨トシ修身、國語漢文、歷史、地理等ノ教授內容ヲ改ムルコト

イ、修身ノ名稱ヲ道德ニ於テハト改メ從來ニ比シ一層我カ建國ノ體制ト國體ノ本義ヲ明ラカナラシムルニ力メ新ニ道德及社會生活ノ原理ノ概要ヲ授ケ特ニ我カ國民道德ニ關スル信念ヲ一層鞏固ナラシムルニ力ムルコト

ロ、國語漢文講讀ノ材料ニ於テ從來ニ比シ國民性ノ涵養ニ資スヘキモノヲ一層多カラシメ又國語ニ於テハ從來主トシテ古來國民思想ニ關係アリタル邦人ノ著近古文ニ止メタルヲ簡易ナル中古文及上古文ニモ及ホシ又漢文ハ日本外史、日本政記、大日本史等ノ如キ邦

人ノ著作ヲ主トシ論語、孟子等ノ如キ古來國民思想ニ關係アリタル漢籍ヨリ之ヲ選ヒ增課科目ニアリテハ國語漢文共ニ主トシテ古今ノ名家ノ著書又ハ其ノ抄本ヲ使用セシムルコト

ハ、歷史ノ教授ハ徒ニ細密ナル事實ノ穿鑿ニ流ルヽノ弊ヲ防クニ力メ特ニ國史教育ノ充實ヲ期シ外國歷史ハ稍々之ヲ簡約ナラシメ更ニ歷史教授ノ順序ヲ改メ低學年ニ於テハ國史ヲ背景トスル東洋史ヨリ始メ西洋史ニ進ミ高學年ニ於テ國史ヲ授ケ日本文化史ヲ以テ終結スルモノトシ又ハ低學年ニ於テ國史ヲ成ルヘク鄕土材料ニ依リテ教授スルニ始メ次ニ東洋史、西洋史ニ及ホシ高學年ニ於テ審ニ國史ヲ授クルモ可ナルモノトスルコト

ニ、地理ハ本邦ノ世界ニ於ケル地位ヲ知ラシメ國民的自覺ヲ促スニ資スル爲外國地理ヲ授クル場合ニ於テモ特ニ經濟、產業等ニ付本邦ト密接ノ關係アル地方ヲ審ニシ其ノ他ノ地方ハ比較的簡約ナラシムルコト

二、實際生活ニ有用ナル智能ヲ養ヒ且勤勞ヲ愛好スルノ精神ヲ涵養スル爲作業料ヲ新設シ理科實業等ノ教授內容ヲ改ムルコト

イ、作業科ハ之ヲ基本科目トシ五學年ヲ通シテ之ヲ課シ作業ニ依リ勤勞ヲ愛好スルノ氣風ヲ養ヒ兼ネテ日常生活上有用ナル智能ヲ得シムルヲ以テ旨トシ園藝、工作其ノ他ノ作業ヲ其ノ內容ト爲スコト

ロ、從來ノ博物、物理及化學ヲ綜合シテ理科ヲ設ケ必スシモ專門的科學ノ體系ニ泥ムコトナク實際生活ニ有用ナル知識ヲ養フニ力メ殊ニ從來ニ比シ觀察實驗ニ重キヲ置キ且教授順序ハ第一學年ニ於テ日常生活ニ關スル

進ンデ

一般理科ヨリ始メ第二學年以後博物的事項、物理及化學的事項ニ進ミ第五學年ニ於テ應用理科ヲ課スルモノ

トシ又ハ第一學年及第二學年ニ於テ一般理科ヲ授ケ第三學年ヨリ第五學年ニ至ル迄博物的事項、物理及化學的事項ヲ課スルモ可ナルモノトスルコト（モノトシ又應用理科ヲ課スルヲ得シムルコト）

ハ、實業ハ毎週教授時數ヲ增加シ第三學年ヨリ第四學年又ハ第三學年ヨリ之ヲ課シ農業、工業、商業等ヲ綜合シ又ハ適宜分合シテ其ノ內容ヲ定メ特ニ實習作業ニ重キヲ置クコト

三、新ニ公民科ヲ設ケテ基本科目トナシ從來ノ法制經濟ノ知識的教育ニ傾キシニ鑑ミ其ノ教授ハ法制上經濟上及社會上ノ事項ノ概要ヲ授クルト同時ニ特ニ遵法ノ精神ト共ニ共存共榮ノ本義トヲ會得セシメ公共ノ爲ニ奉仕シ協同シテ事ニ當ルノ氣風ヲ養ヒ公民的陶冶（修身）ヲ爲スヲ旨トシ殊ニ道德、歷史、地理、實業等ノ教授ト聯繫ヲ保タシムルコト

四、學科課程ヲ全般ニ亙リ整理按排スル關係上從來比較的多クノ時數ヲ配當シタル外國語、數學ノ每週教授時數ヲ減少シ其ノ基本的知識ハ基本科目トシテ一樣ニ之ヲ授ケ進ミタル程度ノ學習ハ增課科目ニ於テ選修セシムルモノトスルコト

右ニ關スル意見ヲ求ム

原案を修正し且希望を付したる文政審議會の答申に基き、實際規程が改正せられたのは後に述べる如く昭和六年一月であつた。

昭和四年一月十六日高等學校に對する文部省訓令第一號を以て左の如く高等學校高等科植物及動物、鑛物及地質の教授要目が定められた。

高等學校高等科植物及動物、鑛物及地質教授要目左ノ通定ム

植物教授要目

教授ノ目的

植物ニ關スル知識ヲ授ケ應用ヲ示シ兼ネテ觀察ヲ精確ナラシムルヲ要旨トシ實驗ニヨツテ其ノ知識ヲ一層確實ナラシムルモノトス

植物學講義要目（約六十時間）

一　緒論（約一時間）

自然界、生物界、生物ノ特徵、動植物ノ區別、生物學、植物學及其ノ分科、植物學ト人生

二　形態（約十四時間）

（一）外部形態（約三時間）

植物體、莖、葉、芽、葉條（シユート）、根及其等ノ異形、花、果實、種子、發芽、相同、相似

（二）內部形態（約十一時間）

(1)細胞。原形體（プロトプラスト）（細胞質、核、プラスチツド）、細胞內容物、細胞膜、細胞分裂、核分裂（約四時間）

(2)組織。成長點及分裂組織、組織ノ分化及其ノ種類、細胞間連絡、管束、組織系（表皮、皮層、中心柱）、莖・葉・及根ノ構造、通氣系及器械的組織、第二期肥大成長、樹皮、材ノ構造（約七時間）

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

三　生理（約十六時間）

(1)榮養。養料、吸收、水液通路、根壓、排水、發散、炭素同化作用、葉綠粒ノ色素、窒素同化、同化物ノ轉用、酵素、植物ノ生產物、特殊榮養法（約八時間）

(2)活力代謝（ベトリーブスストフヴェクセル）。呼吸、分子內呼吸、醱酵、腐敗、發熱、發光附物質ノ循環（約三時間）

(3)成長。成長ノ條件、發育ノ週期、生殖器官ノ形成、壽命（約三時間）

(4)運動。乾濕運動、趨性・屈性・及傾性運動（約一時間）

(5)病害。（約一時間）

四　生態（約六時間）

生活形（水生、苔生、草本、木本、乾生、光寄生（ライトパラサイト））、環境、群落、群落ノ種類及分布、繁殖體（リヒトパラゴート）ノ散布、群落ノ成立ト更新、「フロラ」ノ分布、日本植物分布

五　生殖及遺傳（約十二時間）

(一)生殖（約五時間）

無性生殖、有性生殖、配偶子（ガメート）、受粉、受精、重複受精、接合體（ザイゴート）、減數分裂、配偶體（ガメトフアイト）、造胞體（スポロフアイト）、世代交番、單性生殖

(二)遺傳（約七時間）

遺傳形質、彷徨變異、生物測定法、純系、メンデリズム、連鎖現象（リンケージ）、性ニ關スル遺傳、突然變異、品種改良、遺傳ト進化ノ關係

六　分類（約十一時間）

(一)總論（約一時間）

(1)分類法ノ大要、綱、目、科、屬、種、變種、品種、學名命名法

(2)分類學ト自然系統

(二)各論（約十時間）

(1)バクテリヤ類附純粹培養、藍藻類

(2)粘菌類、鞭毛類

(3)渦鞭毛類、珪藻類附プランクトン

(4)接合藻類、綠藻類、車軸藻類、褐藻類、紅藻類

(5)藻菌類、眞菌類、地衣類

(6)蘚苔植物

(7)羊齒植物

(8)顯花植物（裸子植物。被子植物。單子葉植物、雙子葉植物）

(9)概括

植物學講義及實驗要目（第三學年約六十時間）

一　顯微鏡使用法及「プレパラート」製作法（約三時間）

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

二　植物採集法及腊葉製作法(約一時間)

三　分類(約二十八時間)

左ノ項目ニ就キ適宜選擇スベシ

バクテリヤ類、藍藻類、粘菌類、鞭毛類、渦鞭毛類、珪藻類、接合藻類、綠藻類、車軸藻類、褐藻類、紅藻類、藻菌類、眞菌類、地衣類、蘚苔植物、羊齒植物、顯花植物

四　細胞及組織(約二十四時間)

細胞、細胞ノ內容物、原形質運動、原形質分離組織ノ種類、組織系

莖・葉・及根ノ構造、第二期肥大成長ニヨル組織

供覽。分裂組織、細胞分裂、減數分裂、性染色體

五　變異統計、メンデル分離法則ニ關スル實驗結果供覽(約四時間)

備　考

一　本要目ハ授業上準據スベキ教材ヲ擧ゲタルモノニシテ其ノ排列ハ適宜之ヲ變更スルモ妨ゲ無シ殊ニ實驗ニ於テハ教材ノ季節關係、事項ノ難易、其ノ他ノ事情ヲ參酌シテ之ヲ定ムベシ

二　本要目ニ揭ゲタル各項ヲ授クルニ當リテハ成ルベク應用ニ關スル事項ヲ附說シ又ハ製品ヲ示ス樣留意スベシ

三　生物一般ニ關スル事項ニシテ進化論等ニ關スルモノハ動物學科ノ授業ト重複ヲ避クルタメ本要目ニ於テハ之ヲ省略セリ

四　生物學ニ關スル實驗ハ設備等ノ關係上生徒各自ニ行ハシムル事困難ナルヲ以テ講義及實驗ノ際成ルベク之ヲ供覽セシムベシ

五　成ルベク機會ヲ利用シテ植物ノ採集及生態的觀察ヲ行ハシムベシ

動物敎授要目

敎授ノ目的

動物ニ關スル知識ヲ授ケ應用ヲ示シ兼ネテ觀察ヲ精確ナラシムルモノトス

動物學講義要目(授業時數一箇年約六十時間)

一　動物學ノ範圍　(約一時間)

二　構造　(約四時間)

細胞、組織、器官、器官系

三　體制　(約二時間)

原型、相同、相似、個體、群體、分業

四　發生　(約十時間)

生殖法(有性、無性、單爲、幼生生殖)、世代ノ交番、卵生ト胎生、雌雄ノ別、成熟現象、受精、卵割、胚葉形成、器官形成、畸形

五、分類　(約十六時間)

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

種ノ概念、分類系統、命名法

門及重要ナル綱

原生動物、海綿動物、腔腸動物、扁形動物、(渦蟲類、吸蟲類、絛蟲類)、紐形動物、圓形動物、毛顎動物、輪形動物、環形動物(多毛類、貧毛類、蛭類)、前肛動物、棘皮動物(うみゆり類、ひとで類、くもひとで類、うに類、なまこ類)軟體動物(斧足類、掘足類、腹足類、頭足類)、節足動物(甲殻類、蜘蛛類、多足類、昆蟲類)、原索動物、脊椎動物、(魚類、兩棲類、爬蟲類、鳥類、哺乳類)　(約十二時間)

六　生理

運動、發音、發光、發電、體溫、循環、免疫、內分泌、呼吸、榮養及榮養素、排泄、新陳代謝、生殖、成長、老衰、死、再生、移植、神經系ノ機能、趨向性、本能、智能　(約三時間)

七　生態

環境ト適應、生活方法ノ種類、分布　(約四時間)

八　遺傳

遺傳ノ事例及法則、性ノ決定、優生學　(約七時間)

九　進化

變異、進化ノ例證、人類ノ由來、重ナル進化學說　(約一時間)

十　生命

生命ノ起源、生命ニ關スル學說

動物學講義及實驗要目

理科第三學年(授業時數一箇年約六十時間)

一　解剖實習

脊椎動物(例、かえる)、附脊椎動物比較解剖學大要講述及供覽、節足動物(例、ばった)、軟體動物(例、からすがひ)、環形動物(例、みゝず)

二　プレパラート製作法

三　鏡檢實習又ハ供覽

アミーバ、ザウリムシ、ヒドラ、デストマ等

四　生理實習供覽

神經及筋肉生理、消化酵素作用等

五　生態觀察及採集

學校所在地ノ狀況ニ應ジ原野、山林、湖沼又ハ海濱等ニ到リ適宜之ヲ課ス

備考

一　本要目ノ事項ニ就キテハ必要ニ應ジテ其ノ順序ヲ變更スルモ妨ゲス

二　植物教授要目ト重複スル事項ハ動物學的事例ヲ以テ補足スルニ止ムルモ妨ゲナシ

三　攝生、保健、傳染病竝寄生蟲病ノ豫防等ノ概要ハ之ニ關聯セル事項ヲ教授スル際ニ成ルベク講述スベシ

鑛物及地質教授要目(約六十時間)

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

（一）鑛物學ニ關スル項目

一　序論

二　鑛物ノ外形及內部構造

三　鑛物物理學

イ　等方體ト異方體

ロ　密度

ハ　凝集力

硬度、劈開、打像、壓像、蝕像、

ニ　反射

ホ　重屈折

偏光及偏光ニコル、一軸性ト二軸性、消光、干涉色、干涉圈、旋光

ヘ　熱電氣、壓電氣、磁氣

四　鑛物化學

イ　化學成分ト結晶形トノ關係

ロ　化學分析ニ依ル鑛物鑑定法

ハ　鑛物生成ノ化學

ニ　自然界ニ於ケル鑛物ノ化學的變化

五　鑛物ノ分類及鑑定

六　鑛物ノ利用

注　意

鑛物ノ分類及鑑定ニハ適當ノ表ヲ用フルヲ可トス、鑛物ノ產地特ニ我國ノ產地ハ此ノ際ニ習得セシムルヲ可トス

（二）地質學ニ關スル項目

一　序論

二　地球ノ生成

三　地球ノ現今ノ狀態（氣圈、水圈、岩石圈、重圈、元素ノ賦存狀態）、重圈ニ關スル學說、「アインスタシー」

四　地殼ノ構造

イ　火成岩ノ成因（岩漿及其ノ分化）、特性、產狀及種類

ロ　水成岩ノ成因、特性、產狀及種類附風成岩

ハ　變成岩ノ成因、特性及種類

ニ　鑛床ノ生成

五　內因的地質作用

內因的地殼變動ノ原因ト結果、造陸作用（緩慢ナル土地ノ上昇ト下降）、造山作用（皺曲、斷層、地塊運動）、火山現象、地震現象

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

六　外因的地質作用
　外因的地質作用ノ原因ト結果、大氣、雨水、流水、地下水、氷河、湖沼及海洋ノ地質的作用
　生物ノ地質的作用
七　地史學概論
　化石、地質時代ト地質系統、前カンブリヤ時代、古生代、中生代及新生代ノ地史、古生物ノ概括
八　日本地體構造ノ概要
九　地質學ノ應用
　注　意
　　事情ノ許ス限リ野外實習竝實驗ヲ課シ併セテ地圖ノ讀方、地形ノ觀察法等ヲモ習得セシム
　備　考
一　本要目ハ鑛物及地質ノ教授上準據スベキ主ナル教材ヲ擧ゲタルモノナリ但シ教材ノ排列ハ必ズシモ之ニ據ルヲ要セズ
二　本科ニ於テハ成ルベク實際生活ニ應用シ得ベキ知識ヲ授クルコトニ留意スベシ

昭和四年六月二十四日文部省令第三十二號を以て左の如く高等學校規程中に改正が行はれた。

高等學校規程中左ノ通改正ス

第十八條中「劍道及柔道」ヲ「劍道、柔道及弓道」ニ改ム

第二十五條中「及特別ノ事情ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受ケタル場合」ヲ削ル

第二十八條中「文部大臣ノ認可ヲ受ケ」ヲ削ル

第二十九條　公立又ハ私立ノ高等學校ノ教員數ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ定ムヘシ但シ兼任教員ハ教員數ノ半數ヲ超ユルコトヲ得ス

第三十條中「劍道又ハ柔道」ヲ「劍道、柔道又ハ弓道」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第十八條第二項「體操ハ教練及體操ヲ授クヘシ又劍道、柔道及弓道ヲ加フルコトヲ得」とあつたのを「體操ハ教練及體操ヲ授クヘシ又劍道及柔道ヲ加フルコトヲ得」と改めたのである。

第二十五條「教授日數ハ尋常科ニ在リテハ每學年二百二十日以上、高等科ニ在リテハ每學年二百日以上、專攻科ニ在リテハ百九十日以上トス但シ次條ノ場合（編者曰ふ次條の場合とは傳染病豫防の爲又は非常變災に因り臨時休業をなす場合のこと）及特別ノ事情ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ此ノ限ニアラス」とあつたのを、其中文部大臣の認可を受けたる場合を削除したのである。

第二十八條「高等科ニ於テハ國語及漢文、外國語、數學ヲ教授スル場合ヲ除ク外文部大臣ノ認可ヲ受ケ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得」とあつたのを文部大臣の認可を要せざることとしたのである。

第二十九條は、兼任教員は教員數の半數を超ゆることを得ずとの規定を新に加へたのである。

第三十條は劍道、柔道の教員は規定の教員定數の外とする規定であるが、今回弓道を加へたに就て弓道の教員も亦同

様なることを定めたものである。

昭和四年十一月二十八日各地方長官に對する左記文部次官通牒發普二三四號が發せられた。

中等學校入學者選拔ニ關スル件

中等學校ニ於テ入學志願者ノ數入學セシムヘキ人員ヲ超過スル場合ニ於ケル入學者選拔方法ニ關シテハ昭和二年十一月二十二日訓令第十九號及同日附通牒發普二〇四號ヲ以テ大體ノ標準ヲ定メアル處往々ニシテ其ノ解釋ヲ異ニシ時ニ情弊ヲ見ルカ如キ事例モ有之實施上遺憾勘カラサルニ付テハ右通牒第二項中イ號及ロ號ニ關シ左記ノ廉篤ト當事者ニ御示達相成平素ニ於テ準備教育ノ弊ニ陷ラス考査ニ際シテ公正ヲ失ハス克ク其ノ職責ヲ全ウスルコトヲ期セシメラルル樣致度命ニ依リ此段通牒ス

記

一、入學者ハ人物考査竝ニ身體檢査ヲ行ヒ且小學校長ノ報告ヲ參酌シテ之ヲ考査選拔スルコト

一、小學校長ノ報告ニ係ル事項ノミニ基キテ入學ヲ拒否スル場合ハ到底中等學校ノ學習ニ堪ヘスト認メラルル者ニ限ルコト

一、人物考査ハ常識、素質、性行等ニ付口頭試問ノ方法ニ依リテ之ヲ行ヒ必要アル場合ニ於テハ筆記試問ノ方法ヲ加フルヲ得ルコト常識ノ考査ハ小學校ノ教科ニ基キ暗記暗誦ニ流ルルコトナク理解、推理等ノ能力ヲ判定シ得ヘキ平易ナル事項ニ付之ヲ行フコト

昭和五年六月五日高等學校に對する文部省訓令第十二號を以て左の如く高等學校高等科修身の教授要目が定められた。

高等學校高等科修身教授要目左ノ通定ム

修身教授要目

教授方針

修身ノ教授ハ高等學校令第一條及高等學校規程第五條ノ趣旨ニ基キ青年期ニ於ケル精神生活ノ實際ニ鑑ミソノ健全ナル發達ヲ助成シ特ニ道德的自覺ヲ深クシ國民道德ニ關スル信念ヲ篤クシ道德問題ニ對スル正確ナル批判力ヲ養フコトニ努ムヘキモノトス

教授事項

前項ノ趣旨ニ依リ教授スヘキ事項大凡左ノ如シ

實踐道德ニ關スル事項（約三十時間）

一高等學校生活、學校生活ト家庭、交友等

一修學ノ態度

一青年期ノ心理、體育ト保健、情操ノ涵養

一道德ノ意義、自覺、人格價值

一自由ト自治、自律ト他律、責任感

一社會生活ノ意義、社會連帶

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

一正義、人道
一憲法ノ精神、立憲國民ノ本務
　國民道德ニ關スル事項（約三十時間）
一國民道德ノ意義、國史ト國民道德
一國家、國體、政體
一家族制、祖先尊崇、忠孝一致
一國民性、國民意識
一神道、武士道
一外來思想ト國民道德
一國際道德、國家主義ト國際主義
一日本國民ノ使命、東西文化ノ融會、世界平和ヘノ貢獻
　倫理學ニ關スル事項（約三十時間）
一倫理學ノ問題、對象及方法
一道德的判斷、善、正
一行爲、品性
一良心、人格、自由
一個人、社會

一理想、本務、德
一倫理學說批判、功利主義、唯理主義、人格主義等
一道德ト宗教、藝術、政治、經濟等

教授方法

前記實踐道德ニ關スル事項、國民道德ニ關スル事項、倫理學ニ關スル事項ハ各之ヲ一學年ニ配當シ教授スルヲ便トスルモ適宜分合ヲ行ヒ又順序ヲ變更スルコトヲ得
教授ノ目的ヲ達センカタメ權威アル典籍ヲ用ウルコトヲ妨ケス

昭和六年一月十日文部省令第二號を以て左の如く中學校令施行規則が改正せられた。

中學校令施行規則左ノ通改正ス

中學校令施行規則

第一章　生徒教養ノ要旨
第二章　學科及其ノ程度
第三章　學年、教授日數及式日
第四章　編制
第五章　設備
第六章　設置及廢止
第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第七章　入學、休學、退學及懲戒
第八章　雜則

中學校令施行規則

第一章　生徒教養ノ要旨

第一條　中學校ニ於テハ中學校令ノ旨趣ニ基キ學校教育ノ全般ヨリ道德教育ヲ行ハンコトヲ期シ常ニ生徒ヲ實踐躬行ニ導キ
ヲ施シ生活上有用ナル普通ノ智能ヲ養ヒ且體育ヲ行フヲ以テ旨トシ特ニ左ノ事項ニ留意シテ其ノ生徒ヲ教養スベ
シ

一　教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ學校教育ノ全般ヨリ道德教育ヲ行ハンコトヲ期シ常ニ生徒ヲ實踐躬行ニ導キ
殊ニ國民道德ノ養成ニ意ヲ用ヒ我ガ建國ノ本義ト國體ノ尊嚴ナル所以トヲ會得セシメ忠孝ノ大義ヲ明ニシ其
ノ信念ヲ鞏固ナラシメンコトヲ期スベシ

二　獨立自主ノ精神ヲ養ヒ勤勞ヲ愛好スルノ習慣ヲ育成シ且協同ヲ尚ビ責任ヲ重ンズルノ觀念ヲ涵養センコトニ
力ムベシ

三　專ラ心力ノ啓發ヲ旨トシ徒ニ專門的學術ノ體系ニ泥ムコトナク社會生活上適切有用ナル智能ヲ養ハンコトヲ
期スベシ

四　生徒ノ身體ヲ强健ナラシムルト共ニ精神ヲ鍛錬シ靑年ノ潤達ナル氣風ヲ養ハンコトヲ旨トスベシ

第二章　學科及其ノ程度

第二條　中學校ノ學科目ハ修身、公民科、國語漢文、歷史、地理、外國語、數學、理科、實業、圖畫、音樂、作業
科、體操トス

第四學年以上ニ在リテハ第一種及第二種ノ課程ヲ編制シ生徒ヲシテ其ノ一課程ヲ選修セシム第一種及第二種ノ課
程ハ修身、公民科、國語漢文、歷史、地理、理科、作業科、體操ヲ基本科目トシ第一種課程ニハ基本科目ニ國語
漢文、外國語、數學、理科、圖畫、音樂ノ中適宜其ノ數科目及實業ヲ增課シ第二種課程ニハ基本科目ニ國語漢文、
數學、理科、圖畫、音樂ノ中適宜其ノ數科目及外國語ヲ增課シ之ヲ編制スベシ

前項ノ規定ハ第三學年以上ヨリ之ヲ適用スルコトヲ得但シ第一種及第二種ノ課程ハ修身、公民科、國語漢文、歷
史、地理、數學、理科、作業科、體操ヲ基本科目トシ第一種課程ニハ基本科目ニ國語漢文、外國語、數學、理科、
圖畫、音樂ノ中適宜其ノ數科目及實業ヲ增課シ第二種課程ニハ基本科目ニ國語漢文、外國語、數學、理科、
中適宜其ノ數科目及外國語ヲ增課シ之ヲ編制スベシ
特別ノ事情アルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ第一種課程及第二種課程ノ中其ノ一ヲ缺クコトヲ得
實業ニ於テ農業又ハ工業ヲ課スル場合ニ在リテハ作業科ヲ缺クコトヲ得
外國語ハ英語、獨語、佛語又ハ支那語トス

第三條　各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ第四學年以上ニ於テ第一種及第二種ノ課程ヲ編制スル場合ニ在
リテハ甲號表、第三學年以上ニ於テ第一種及第二種ノ課程ヲ編制スル場合ニ在リテハ乙號表ニ依ルベシ
學校長ハ必要アルトキハ甲號表又ハ乙號表ノ每週教授時數ノ合計及各學科目ノ一學年間ニ於ケル教授時數ノ總計
ヲ增減セザル範圍內ニ於テ甲號表又ハ乙號表ノ教授時數ヲ變更スルコトヲ得
甲號表ノ第三學年ニ於ケル音樂ハ之ヲ缺クコトヲ得

前條第五項ノ規定ニ依リ作業科ヲ缺キタルトキハ其ノ教授時數ハ便宜之ヲ他ノ學科目ニ配當スルコトヲ得

實業、作業科、圖畫、音樂等ノ實習及體操ハ甲號表又ハ乙號表ノ教授時數外ニ於テ之ヲ課スルコトヲ得

甲號表又ハ乙號表ノ教授時數ノ外每週二時以內ヲ課程外ノ指導ニ充ツルコトヲ得

甲號表

學科目＼學年		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
基本科目	修身	一	一	一	一	一
	公民科					
	國語漢文	七	六	六	四	四
	歷史					
	地理	三	三	三	三	三
	外國語	五	五	六		
	數學	三	三	五		
	理科	二	三	三	四	
	圖畫	一	一	一		
	音樂	一	一	一		
	作業科	二	二	一	一	一
	體操	五	五	五	五	五

乙號表

學科目＼學年		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
基本科目	修身	一	一	一	一	一
	公民科					
	國語漢文	七	六	四	四	四
	歷史	三	三	三	三	三
增課科目	國語漢文					
	外國語					
	數學					
	理科					
	實業					
	圖畫					
	音樂					
	增課科目ニ充ツベキ總時數					
合計		三〇	三〇	三二	二〇	二〇
基本科目總時數		三〇	三〇	三二	二〇	二〇

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

基本科目	地理	外國語	數學	理科	圖畫	音樂	作業科	體操	基本科目總時數
	五	五	三	二	一	一	二	五	三〇

増課科目ニ充ツベキ總時數	第一種	第二種	第一種	第二種	第一種	第二種
三〇	一—三	一—三	一—三	一—三	一—三	一—三
	二—五	四—六	二—五	四—七	二—五	四—七
	一—二	一—二	二—四	二—五	二—四	二—五
	一—二	一—二	一—四	一—二	一—四	一—二
	三—五		三—五		三—六	
	一—二	一—二	一—二	一—二	一—二	一—二
	一—二	一—二	一—二	一—二	一—二	一—二
二〇	一〇—一二	一一—一五	一〇—一二	一一—一五	一〇—一二	一一—一五

増課科目	國語漢文	外國語	數學	理科	實業	圖畫	音樂
	五	三	三	三	一	一	一
	五	三	三	三	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
	五	三	三	四	一	一	一
合計	三〇	三一—三五	三〇—三二	三一—三五	三〇—三二	三一—三五	三〇—三二

第四條　各學科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益センコトヲ要ス

第五條　修身ハ教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ鞏固ナル意志ヲ鍛錬シ殊ニ我ガ國體ニ關スル信念ヲ養ヒ以テ健全有爲ナル國民タラシメンコトヲ期シ實踐躬行ニ導クヲ以テ要旨トス

修身ハ道德ノ要領ヲ授ケ就中我ガ國民道德ノ由來ト特質トヲ悟ラシメ建國ノ體制及國體ノ本義ヲ明ニシ國家、社會及家ニ對スル責務竝ニ人格修養ニ關シ必要ナル事項ヲ知ラシメ更ニ道德及社會生活ノ理論ノ概要ヲ授クルト共ニ時代思想ニ對スル正シキ批判力ヲ養ヒ道德的信念ヲ確立セシムルニ力ムベシ

第六條　公民科ハ國民ノ政治生活、經濟生活竝ニ社會生活ヲ完ウスルニ足ルベキ知德ヲ涵養シ殊ニ遵法ノ精神ト共存共榮ノ本義トヲ會得セシメ公共ノ爲ニ奉仕シ協同シテ事ニ當ルノ氣風ヲ養ヒ以テ善良ナル立憲自治ノ民タルノ素地ヲ育成スルヲ以テ要旨トス

公民科ハ憲政自治ノ本義ヲ明ニシ日常生活ニ適切ナル法制上、經濟上竝ニ社會上ノ事項ヲ授クベシ

第七條　國語漢文ハ普通ノ言語、文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ發表シ文字ヲ端正ニ書寫スルノ能ヲ得シメ國民性ヲ涵養シ文學上ノ趣味ヲ養ヒ知德ノ啓發ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語漢文ハ現時ノ國文ヲ主トシテ講讀セシメ進ミテハ平易ナル近古文ヨリ簡易ナル上古文ニ及ボシ又平易ナル漢文ヲ講讀セシメ簡易ニシテ實用ニ適スル國文ヲ作ラシメ國語文法ノ大要及習字ヲ授クベシ

第八條　歷史ハ歷史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社會ノ變遷、文化進展ノ過程、邦國盛衰ノ由ル所ヲ理會セシメ特ニ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

我ガ國運進展ノ迹ヲ詳ニシ建國ノ本義ト國體ノ尊嚴無比ナル所以トヲ知ラシメ大義名分ヲ明ニシ國民精神ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス

歷史ハ國史及外國史トシ國史ニ於テハ國初ヨリ現時ニ至ルマデノ重要ナル事蹟ヲ授ケ建國ノ體制、皇統ノ無窮、歷朝ノ鴻德盛業、政治、經濟、產業其ノ他文化ノ發達、對外的關係等ニ關シテハ特ニ意ヲ用ヒテ之ヲ授ケ外國史ニ於テハ世界大勢ノ變遷ニ關スル事蹟ヲ主トシ著明ナル諸國ノ興亡、文化ノ發達及我ガ國運ノ進展ニ關係アル事蹟ノ大要ヲ知ラシムベシ

第九條　地理ハ地球及人類生活ノ狀態ヲ理解セシメ殊ニ兩者ノ關係ヲ明ニシ我ガ國及諸外國ノ國勢ヲ知ラシメ國民タルノ自覺ヲ促スニ資スルヲ以テ要旨トス

地理ハ日本地理、外國地理及地理概說トシ日本地理ニ於テハ我ガ國ノ自然狀態、政治、經濟、產業、交通等ノ狀態竝ニ其ノ關係ヲ明ニシ我ガ國ノ國勢ヲ知ラシメ外國地理ニ於テハ主トシテ我ガ國ト政治、經濟、產業、交通等ニ關シ重要ノ關係アル諸外國ノ地理ノ大要ヲ授ケ地理概說ニ於テハ自然地理及人文地理ノ概要ヲ知ラシムベシ

第十條　外國語ハ發音、綴字、聽方、讀方及解釋、話方及作文、書取、文法ノ大要竝ニ習字ヲ授クベシ

第十一條　數學ハ數量ニ關スル知識ヲ授ケ計算ニ習熟セシメ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

數學ハ算術、代數及幾何ヲ授ケ又三角法ヲ授クルコトアルベシ

第十二條　理科ハ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ヲ與ヘ其ノ人生ニ對スル關係及之ガ應用ヲ理解セシメ觀察、工夫ノ力ヲ養フヲ以テ要旨トス

理科ハ日常生活ニ關スル事項ノ理科的說明ヨリ始メ進ミテハ重要ナル植物、動物、鑛物ニ關スル一般ノ知識、人體ノ構造、生理及衞生ノ大要竝ニ重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用、元素及化合物ニ關スル知識ヲ授クベシ

第十三條　實業ハ實業ニ關スル知識技能ヲ授ケ實際生活ヲ理解セシメ職業ノ尊重スベキ所以ヲ知ラシメ勤勉力行ノ氣風ヲ養フヲ以テ要旨トス

實業ハ農業、工業若ハ商業ヲ課シ又ハ之ヲ適宜分合シテ授クベシ

第十四條　圖畫ハ形象ヲ精密ニ觀察シ正確且自由ニ之ヲ畫クノ技能ヲ得シメ工夫創作ノ力ヲ陶冶シ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

圖畫ハ自在畫及用器畫トシ自在畫ニ於テハ寫生畫ヲ主トシ臨畫及考案畫ヲ加ヘ用器畫ニ於テハ主トシテ幾何畫ヲ授クベシ

第十五條　音樂ハ歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ德性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

音樂ハ單音唱歌及簡易ナル重音唱歌ヲ授ケ又樂典ノ大要ヲ授クベシ

第十六條　作業科ハ作業ニ依リ勤勞ヲ尙ビ之ヲ愛好スルノ習慣ヲ養ヒ日常生活上有用ナル智能ヲ得シムルヲ以テ要旨トス

作業科ハ園藝、工作其ノ他ノ作業ヲ課スベシ

第三學年以上ニ在リテハ作業科ニ於テ用器畫ヲ主トスル圖畫ヲ併セ課スルコトヲ得

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第十七條　體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ姿勢ヲ端正ニシ身體ヲ強健ニシ且其ノ動作ヲ機敏ナラシメ快活、剛毅、堅忍持久ノ精神及規律ヲ守リ協同ヲ尚ブノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

體操ハ體操、教練、劍道及柔道、遊戲及競技ヲ授クベシ

第十八條　補習科ノ修業年限ハ一年以內トシ其ノ學科目ハ第二條第一項ノ學科目中ニ就キ之ヲ定ムベシ

補習科ノ各學科目ハ隨意科目又ハ選擇科目ト爲スコトヲ得

第十九條　豫科ノ修業年限ハ二年トス

豫科ノ學科目、教授ノ要旨及其ノ程度竝ニ每週教授時數ニ關シテハ小學校令第十九條竝ニ小學校令施行規則第一條乃至第十條、第十二條及第十七條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ學科目ノ外外國語ヲ加フルコトヲ得

外國語ハ簡易ナル英語、獨語、佛語又ハ支那語トス

外國語ノ每週教授時數ハ三時トシ國語、圖畫、唱歌ノ每週教授時數各一時ヲ減ジテ之ニ充ツベシ

第二十條　豫科ノ教科書ニ關シテハ小學校令第二十四條第一項乃至第三項及小學校令施行規則第五十三條ノ規定ヲ準用ス

特別ノ事情アルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ前項ノ規定ニ依ラザルコトヲ得

第二十一條　生徒身體ノ情況ニ因リ學修スルコト能ハザル學科目ハ之ヲ其ノ生徒ニ課セザルコトヲ得

第三章　學年、教授日數及式日

第二十二條　學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

前項ノ學年ノ外土地ノ情況ニ依リ九月一日ニ始リ翌年八月三十一日ニ終ル學年ヲ置クコトヲ得

學年ハ之ヲ分テテ三學期トス

補習科ニ關シテハ前三項ノ規定ニ依ラザルコトヲ得

第二十三條　教授日數ハ豫科及第一學年乃至第三學年ニ在リテハ每學年二百二十日以上トシ第四學年及第五學年ニ在リテハ每學年二百日以上トス但シ第二十四條ノ場合及特別ノ事情ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條　傳染病豫防ノ爲必要ナルトキ其ノ他非常變災アルトキハ臨時休業ヲ爲サシムルコトヲ得

前項ノ事由アルトキハ地方長官ハ道府縣立以外ノ中學校ノ休業ヲ命ズルコトヲ得

第二十五條　紀元節、天長節、明治節及一月一日ニハ職員及生徒、學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行フベシ

第四章　編制

第二十六條　中學校ノ生徒數ハ八百人以下トス但シ特別ノ事情アルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ增スコトヲ得

分校ノ生徒數ハ三百人以下トス

豫科ノ生徒數ハ第一學年ニ入學セシムベキ生徒數ヲ、補習科ノ生徒數ハ第五學年ヲ修了スベキ生徒數ヲ參酌シテ之ヲ定ムベシ

前項ノ生徒數ハ第一項ノ生徒數ニ算入セズ

第二十七條　學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制スベシ

一學級ノ生徒數ハ五十人以下トス

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二十八條　作業科、音樂、體操ハ學年又ハ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得實業ニ於ケル實習ノ場合亦同ジ

第二十九條　分校ニハ豫科又ハ第四學年以上ノ生徒ヲ置クコトヲ得ズ

第三十條　教員ノ數ハ五學級以下ノ學校ニ於テハ一學級毎ニ二人以上トシ五學級以上一學級ヲ加フル毎ニ一人半以上ノ割合ヲ以テ之ヲ增スベシ但シ一學級毎ニ一人ハ他ノ職ヲ兼ネズ又他ノ職ヨリ兼ネザルコトヲ要ス

前項ノ教員數ノ外劍道及柔道ニ就キ教員一人以上ヲ增スベシ實業ヲ課スル場合亦同ジ

特別ノ事情アル場合ニ於テハ公立學校ニ在リテハ管理者、私立學校ニ在リテハ設立者ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ當分ノ內第一項ノ教員數ヲ減ズルコトヲ得

第五章　設備

第三十一條　中學校又ハ其ノ分校ニ於テハ學校ノ規模竝ニ學科組織ニ適應シ相當ナル校地、校舍、體操場、校具及其ノ他ノ必要ナル設備ヲ備フベシ

校地ハ道德上竝ニ衞生上害ナキ所タルベシ

校舍ハ教授上、管理上竝ニ衞生上適當ニシテ質朴堅牢ナランコトヲ要ス

第三十二條　中學校又ハ其ノ分校ニ於テ備フベキ表簿ノ種類概ネ左ノ如シ

一　中學校ニ關係アル法令

二　學則、日課表、教科用圖書配當表及學校醫視察簿

三　職員ノ名簿、履歷書、出勤簿竝ニ擔任學科目及時間表

四　生徒ノ學籍簿、出席簿、身體檢查ニ關スル表及兵役ニ關スル書類

五　入學考查及學業成績考查ニ關スル書類

六　資產原簿、出納簿及經費ノ豫算決算ニ關スル帳簿竝ニ圖書、器械、器具、標本及模型ノ目錄

七　往復書類

生徒學籍簿ニハ生徒ノ氏名、族籍、居所、生年月日、入學前ノ學歷、入學、轉學及退學ノ年月日竝ニ其ノ學年、卒業ノ年月日及轉學竝ニ退學ノ事由、兵役關係、保證人ノ氏名及居所等ヲ記載スベシ

第一項ノ表簿中生徒學籍簿ハ十五年以上、其ノ他ノ表簿ハ五年以上之ヲ保存スベシ

第三十三條　土地ノ情況ニ依リ學校長、舍監及教員ノ住宅ヲ置クベシ

第三十四條　道府縣立以外ノ中學校ニ在リテハ校地ノ增減、校舍其ノ他ノ建物ノ建設又ハ變更ハ圖面ヲ具シ地方長官ノ認可ヲ受クベシ

第六章　設置及廢止

第三十五條　中學校又ハ其ノ分校ノ設置ニ就キ認可ヲ受ケントスルトキハ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一　名稱

二　私立學校ニ在リテハ其ノ位置

三　學科及生徒定員

四　開校年月

五　學則

六　經費及維持ノ方法

公立學校ノ位置ハ地方長官ニ於テ認可ヲ申請スベシ

第一項第一號乃至第三號及前項ノ位置ノ變更ハ文部大臣ノ認可ヲ受クベシ

第一項第二號、第二項及第三項ノ位置ニ關スル申請ニハ校地ノ地形及面積、地質、建物ノ配置、屋外體操場ノ區域及面積、竝ニ附近ノ情況等ヲ記載シタル圖面及飲用水ノ定量分析表ヲ添付スベシ

第一項第四號ノ變更ハ豫メ之ヲ文部大臣ニ屆出ヅベシ

第一項第五號ノ變更ハ遲滯ナク文部大臣ニ屆出ヅベシ

第三十六條　中學校又ハ其ノ分校ノ廢止ニ就キ認可ヲ受ケントスルトキハ其ノ事由及生徒ノ處分方法ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

中學校ヲ廢止シタルトキハ三十日以內ニ第三十二條第一項第四號ノ生徒學籍簿ヲ地方長官ニ提出スベク地方長官ハ十五年以上之ヲ保存スベシ監督官廳ノ命令ニ依リ中學校ヲ閉鎖シタルトキ亦同ジ

第三十七條　公立中學校ノ費用負擔者若ハ私立中學校ノ設立者ヲ變更シ、私立中學校ヲ公立中學校ニ、公立中學校ヲ私立中學校ニ變更シ又ハ分校ヲ獨立ノ中學校ト爲サントスルトキハ第三十五條第一項ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受クベシ但シ同條項中第二號及第四號ノ事項ハ此ノ限ニ在ラズ

第七章　入學、休學、退學及懲戒

第三十八條　生徒ヲ入學セシムベキ時期ハ學年ノ始ヨリ三十日以內トス但シ缺員アルトキハ第二學期ノ始ヨリ十日以內ニ臨時入學セシムルコトヲ得

前項ノ規定ハ補習科ノ生徒入學ニ關シテハ之ヲ適用セズ

第五學年ニハ轉學又ハ當該學年ニ於テ退學シタル者ノ再入學ヲ除クノ外新ニ生徒ノ入學ヲ許スコトヲ得ズ

第三十九條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ第一學年ノ入學ヲ許スコトヲ得

一　他ノ中學校又ハ高等學校ノ豫科ヲ修了シタル者

二　中學校ニ於テ行フ尋常小學校卒業ノ程度ニ依ル檢定ニ合格シタル者

前項ノ檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ノ者タルベシ但シ尋常小學校第五學年ノ課程ヲ修了シ學業ノ成績優秀且身體ノ發育十分ニシテ中學校ノ課程ヲ修ムルニ足ルコトヲ當該學校長ニ於テ證明シタル者ハ此ノ限ニ在ラズ

第四十條　豫科第一學年ニ入學スルコトヲ得ル者ハ尋常小學校第四學年ノ課程ヲ修了シタル者又ハ年齡十年以上ニシテ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者タルベシ

第四十一條　第二學年以上又ハ豫科第二學年ニ入學ヲ許スベキ者ハ相當年齡ニ達シ前各學年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等ノ學力ヲ有スル者タルベシ

前項ノ入學者ノ學力ハ當該學年ノ程度ニ於テ之ヲ檢定スベシ

第四十二條　中學校生徒ニシテ退學シタルトキヨリ一年以內ニ於テ中學校ニ入學ヲ志願シタルトキハ同一學年以下ノ學年ニ限リ入學ヲ許可スルコトヲ得

第四十三條　他ノ中學校ニ轉學ヲ希望スル生徒アルトキハ學校長ハ正當ノ事由アリト認メタル場合ニ限リ其ノ生徒ノ在學證明書及成績表ヲ移轉先學校ニ送付シ移轉先學校ニ於テハ缺員アル場合ニ限リ轉學ヲ許可スルコトヲ得

第四十四條　各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ

第四十五條　學校長ハ一學年ノ課程ヲ修了セザル生徒ノ學年ヲ進ムルコトヲ得ズ

第四十六條　學校長ハ中學校ヲ卒業セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ、豫科ヲ修了セリト認メタル者ニハ修了證書ヲ授與スベシ

第四十七條　補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ中學校ヲ卒業シタル者タルベシ

學校長ハ補習科ヲ修了セリト認メタル者ニハ修業證書ヲ授與スルコトヲ得

第四十八條　學校長ハ兵役ニ服スル生徒ニ對シテハ其ノ期間休學ヲ許可スベシ

第四十九條　學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズベシ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三　引續キ一年以上缺席シタル者

四　正當ノ事由ナクシテ一月以上缺席シタル者

五　出席常ナラザル者

第五十條　生徒退學セントスルトキハ學校長ノ許可ヲ受クベシ

第五十一條　學校長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第八章　雜則

第五十二條　學則中ニ規定スベキ事項概ネ左ノ如シ

一　學年、學期及休業日ニ關スル事項

二　學科課程、教授時數ニ關スル事項

三　課程ノ選修ニ關スル事項

四　課程ノ修了及卒業ノ認定ニ關スル事項

五　生徒ノ入學、退學、休學、懲戒ニ關スル事項

六　授業料、入學料等ニ關スル事項

七　寄宿舍ニ關スル事項

第五十三條　道府縣立以外ノ中學校ニ關シ文部大臣ニ提出スベキ文書ハ地方長官ヲ經由スベシ

前項ノ文書中、學校ノ設置及廢止ニ關スル申請其ノ他重要ト認ムル事項ニ就テハ地方長官ハ其ノ意見ヲ具スベシ

第五十四條　本令中、學校長トアルハ私立學校ニ在リテハ其ノ學校ヲ代表シ校務ヲ掌理スル者ヲ包含ス

附　則

本令ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スベキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ本令ノ規定ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

實業、作業科ハ本令施行後五年以內之ヲ缺クコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ實業、作業科ヲ缺キタル學校ニシテ之ヲ置クニ至リタル際現ニ在學スル生徒ニ課スベキ學科目及其ノ程度ニ關スルハ第二項ノ例ニ依ル

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第三項ノ規定ニ依リ實業、作業科ヲ缺キタル學校ニ於テハ其ノ教授時數ハ適宜之ヲ他ノ學科目ニ配當スベシ

右は前に述べた如く昭和三年九月文政審議會に諮詢し、昭和四年六月同會の答申を得た改善案が實施せられたものであつて、中學校教育の內容に關する重要なる改正である。元來中學校の教育は中堅國民養成の爲にする高等普通教育であつて一箇の完成教育たるに拘らず、實際其生徒中には上級學校に進入せんとする者が相當多數なるが爲に、自然中學校教育を以て單に準備教育なりと考ふる如き弊があり、且中學校の學科目が劃一に過ぐるが爲に生徒の趣味嗜好竝に土地の情況等に適應せざるの憾があつたのに顧み、今回學科課程の上に大なる改正を加へ、中學校教育の本旨を明にし、其完成教育たるの實を擧げんとしたのであつた。卽ち先づ全學年を通じ全生徒に課すべき基本科目なるものを定め、第四學年以上（場合に依れば第三學年以上）は右の基本科目の外、生徒の性能、趣味、志望、土地の情況等に留意して作成した增科課目から成立つ所の第一種、第二種の課程を設け、生徒をして何れか其一を選修せしむることとしたのである。

其の他

近時憂慮すべき危險思想蔓延の狀勢に鑑み、特に國體觀念の養成精神教育の振興を高調したること

勤勞を尙ぶの氣風を養はんが爲に、特に新に作業科を設けて之を基本科目中に置きたること

實業の科目は從來之を缺き又は隨意科目と爲すことを得たのであるが、今回第一種課程に於ては之を必修としたること

と

法制經濟を改めて公民科としたること

博物、物理及化學は之を綜合して理科としたること

外國語は從來英語、佛語又は獨語であつたが今回新に支那語を加へたること

劍道及柔道を體操中に於て必修せしむることとしたこと

等も亦改正の主要なる點である。

昭和六年一月二十日文部省は北海道廳、府縣に對する文部省訓令第二號を以て左の如く改正中學校令施行規則の趣旨を明にした。

今般文部省令第二號ヲ以テ中學校令施行規則ヲ改正セリ

現行中學校令施行規則ハ明治三十四年ノ制定ニ係リ公布以來年ヲ閱スルコト既ニ三十年其ノ間時勢ノ進歩ニ伴ヒ一部ノ改正ヲ施スコト數回ニ及ベリト雖其ノ教育ノ實際ハ高等普通教育ノ本義ニ照シテ尙遺憾ノ點尠カラズ卽チ中學校ノ教育ガ往々ニシテ高等教育ヲ受ケントスル者ノ豫備教育タル舊時ノ遺風ヲ脫セズシテ上級學校入學ノ準備ニ流レ爲ニ動モスレバ人格ノ修養ヲ等閑ニ附シ且實際生活ニ適切ナラザルノ嫌アリ而シテ中學校ハ年ヲ逐ヒテ增設セラレ今ヤ校數五百五十餘生徒數三十四萬餘ニ達シ之ヲ中學校令施行規則制定當時ノ二百四十餘校八萬八千餘人ニ比較スルトキハ近時ニ於ケル普及ノ跡顯著ナルモノアルヲ知ルニ足ラン更ニ中學校生徒卒業後ノ情況ニ關シ之ヲ最近十年間ノ資料ニ徵スルニ卒業後直ニ上級學校ニ入學スル者ハ年々約三分ノ一ニ過ギズシテ其ノ大部分ハ卒業ト共ニ社會ノ實務ニ當ルノ情態ナリ然レバ中學校ハ廣ク社會ノ各方面ヨリ將來ヲ異ニスル多數ノ生徒ヲ收容スルモノト見ルヲ得ベシ然ルニ現行制度ノ如ク多數ノ學科目ヲ揭ゲ總テノ生徒ヲシテ一樣ニ之ヲ學修セシメ其ノ性能、趣味、志望、土地ノ情況等ニ依リテ斟酌スルノ餘地極メテ少キガ如キハ頗ル實情ニ適合セザルモノト認メ今回中學校令施行規則ニ改正ヲ加ヘテ中學校ニ於ケル高等普通教育ノ本旨ヲ明ニシ且其ノ學科課程ヲ改善シ以テ中學校教育ノ職能ヲ全カ

ラシメンコトヲ期シタルモノナリ玆ニ其ノ改正ノ要旨及施行上特ニ注意ヲ要スル事項ノ大要ヲ示サントス

一　中學校教育ノ要旨ヲ明ニシタルコト

中學校カ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施スモノタルコトハ中學校令ノ示ス所ナレドモ實際ニ於テハ前述ノ如ク往々ニシテ其ノ本旨ニ副ハザルモノアルノ實情ニ鑑ミ今回新ニ生徒教養ノ要旨ヲ規定シ中學校ニ於テハ中學校令ノ旨趣ニ基キ小學校教育ノ基礎ニ據リ一層高等ノ程度ニ於テ道德教育及國民教育ヲ施シ生活上有用ナル普通ノ智能ヲ養ヒ且體育ヲ行フベキモノタルコトヲ明ニシ又生徒教養上特ニ主力ヲ注グベキ事項ヲ列擧スルコトトナセリ

二　高學年ニ於テ第一種及第二種ノ兩課程ヲ編制シ其ノ一課程ヲ選修セシムルコト

中學校ノ學科目ハ之ヲ基本科目ト增課科目トノ二種ニ分テリ基本科目ハ高等普通教育トシテ共通ニ必要ナル知識技能ヲ授クルモノニシテ增課科目ハ生徒ノ性能、趣味、志望、土地ノ情況等ニ依リテ適當ニ選擇履修セシムルモノトス隨ツテ基本科目ハ各生徒ヲ通ジテ必ズ一樣ニ學修セシメ增課科目ハ第四學年以上ノ學年ニ於テ課スルコトトナシ學校ニ於テ適宜增課スベキ學科目ヲ選定シ之ヲ基本科目ト組合セテ第一種及第二種ノ兩課程ヲ編制シ生徒ヲシテ何レカ其ノ一課程ヲ選修セシムルコトトナシタリ尙第三學年ヨリモ本規定ヲ適用シテ第一種及第二種ノ兩課程ヲ編制スルヲ得ルコトトナセリ

低學年ニ於テ基本科目ノミニ付一樣ノ學科課程ヲ定メ之ヲ必修セシムルコトトナシタルハ主トシテ生徒ノ心理的發達ヲ考慮シタル結果ナレドモ同時ニ此ノ期間ニ於テ生徒ヲシテ自ラ其ノ性能、趣味等ヲ覺ラシメ又學校當事者及生徒保護者ヲシテ其ノ觀察ニ基キ高學年ニ於ケル課程ノ選擇竝ニ其ノ學修ヲ有效適切ニ指導セシメンガ爲ナリ

右ニ述ベタルガ如ク高學年ニハ第一種及第二種ノ兩課程ヲ併セ置クヲ本體トスレドモ特別ノ事情アル場合ニハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ第一種課程又ハ第二種課程ノミヲ設クルヲ得シムルコトトナセリ是レ地方ノ情況又ハ學校ノ事情ニ依リ兩課程中其ノ一ヲ設クルノ必要ナキ場合又ハ兩課程ヲ同時ニ設クルノ困難ナル場合等ノ存スルコトナキヲ保シ難キニ因ルナリ

三　學科目及其ノ內容ニ改正ヲ施シタルコト

學科目ニ就テハ社會ノ趨勢ト學校教育ノ實情トニ鑑ミ改正ヲ施シタル所勘カラズ

從來ノ法制及經濟ハ其ノ教授ガ概シテ法制及經濟ノ專門的知識ヲ授クルニ傾キ實際生活ニ適切ナラザル嫌アリシニ鑑ミ今回之ヲ廢シ新ニ公民科ヲ設ケテ立憲自治ノ國民トシテ必要ナル教養ヲ與フルコトトナセリ公民科ニ於テハ法制上、經濟上及社會上ノ事項ニ關シ之ガ事實的說明ヲナシ以テ道義ニ歸結セシムルヲ旨トシ修身、國語、歷史、地理、實業等ノ諸學科目ト聯絡裨補シテ其ノ教授ノ效果ヲ全ウセンコトヲ期スベキノミナラズ訓練ト相待チテ公民的德操ノ涵養ニ力ムベキナリ修身ト公民科トハ各獨立ノ學科目トナシタルモ兩學科目ハ極メテ密接ナル關係アルモノナルヲ以テ修身ヲ兼ネ修メテ之ガ知識ノ豐富ナル教員ヲシテ公民科ノ教授ニ當ラシムルハ極メテ望マシキコトニ屬ス

新ニ作業科ヲ設ケ園藝、工作、其ノ他ノ作業ヲ課シ勤勞ヲ尙ビ之ヲ愛好スルノ習慣ヲ養ヒ且日常生活上有用ナル智能ヲ與フルコトトナセリ蓋シ勤勞ノ尊重スベキハ輓近ノ世態ニ照シ學生、生徒ノ氣風ニ顧ミ特ニ之ガ必要ヲ認ムル所ナリ是レ作業科ヲ以テ基本科目トナシ將來ノ職業如何ニ拘ラズ總テノ生徒ニ必修セシムルコトトナシタル所以ナリ但シ實業中農業又ハ工業ニ於テ實質上相當ノ作業ヲ課シ得ル場合ニ在リテハ第一種課程ニ於テ作業科ヲ缺キ其ノ教授時數ハ之ヲ作業科以外ノ學科目ニ配當スルヲ得シムルコトトナセリ

從來ノ博物、物理及化學ハ之ヲ綜合シテ理科トナセリ是レ理科ニ於テハ必ズシモ專門的學術ノ體系ニ泥ムコトナク

實際生活上有用ナル理科的智能ヲ與フルヲ旨トシ一般理科ヨリ始メ進ンデ博物的事項、物理的事項及化學的事項ヲ課シ又應用理科ヲ授クルニ適セシメンガ爲ナリ而シテ其ノ教授ニ當リテハ殊ニ觀察實驗ニ重キヲ置キテ實際生活ニ裨益スル所多カラシメンコトヲ期スベシ

實業ハ從來之ヲ缺キ又ハ隨意科目ト爲スヲ得ルコトトナセルヲ改メ第一種課程ニ於テ之ヲ必修セシムルコトトナシ且其ノ教授時數ヲ增加セリ是レ今回ノ改正中重要ナルモノノ一ナリ抑モ中學校ニ於テ實業ヲ課スルハ普通教育ノ一事項トシテ實業ニ關スル常識ヲ養ヒ實際生活ヲ理解セシメ職業ノ尊重スベキ所以ヲ會得セシムルト共ニ勤勉力行ノ氣風ヲ養フコトヲ旨トシ實業學校ニ於ケルガ如ク實業ヲ專門的ニ授クルノ趣旨ニアラザルモ將來實務ニ就カントスル者ノ爲ニハ極メテ適切有用ナル修養タルヲ失ハズ中學校卒業ノ後社會ノ實務ニ就ク者年ト共ニ多キヲ加フルノ傾向アルニ顧ミ中學校ニ實業ヲ必修セシムル課程ヲ設クルハ洵ニ適切ナル施設ナレバ其ノ運用宜シキヲ得ンコトヲ希望ス尚實業ニ於テハ農業、工業若ハ商業ヲ課シ又ハ適宜之ヲ分合シテ教授事項ヲ定ムベキモノトナシタルハ教材畫一ノ弊ニ陷ルコトナク克ク地方ノ情況ニ應ジテ適切ナル事項ヲ教授セシメンコトヲ期シタルガ爲ナリ

外國語ニ於テハ從來英語、獨語又ハ佛語ヲ課セシガ今回外國語ノ中ニ支那語ヲ加ヘタリ是レ我ガ國ト中華民國トノ關係頗ル密接ナルニ鑑ミ中學校教育ヲシテ實際生活ニ有用ナルモノタラシムルノ趣旨ニ依リ支那語ノ學修ヲ必要トスル地方ニ於テハ之ヲ課シ得ルノ途ヲ開キタルナリ

從來ノ唱歌ハ之ヲ音樂ト改メ基本科目トシテ必修セシムルコトトナシ其ノ課程ニ樂典ノ大要ヲ加ヘタリ是レ音樂ニ依ル情操教育ノ重ンズベキモノアルヲ認メタルガ爲ナリ而シテ之ガ教授ニ當リテハ特ニ歌曲ノ選定ニ留意シテ國民性ノ陶冶ニ資センコトヲ要ス

劍道及柔道ハ之ヲ體操中ニ於テ必修セシムルコトトナセリ是レ劍道及柔道ガ我ガ國固有ノ武道ニシテ質實剛健ナル國民精神ヲ涵養シ心身ヲ鍛錬スルニ適切ナルヲ認メタルガ爲ニシテ兩者又ハ其ノ一ヲ必修セシメントス

生徒ノ自發的研究ヲ奬勵シ之ヲ指導スルハ教育ノ要務ナリ之ヲ以テ生徒ヲシテ其ノ性能、趣味、境遇、志望等ニ應ジテ自由ニ研究スル所アラシメ且之ニ對シテ適當ナル指導ヲ施サンガ爲ニ所定ノ教授時數外ニ於テ每週二時以內ヲ課程外ノ指導ニ充ツルヲ得ルコトトナセリ

學科目ノ教授內容ニ就テ改正ヲ加ヘタル點尠カラズ其ノ主要ナルモノヲ擧グレバ從來ニ比シ一層國民精神ヲ涵養センガ爲修身ニ於テ國體觀念ヲ明徵ナラシメ道德的信念ヲ鞏固ニシ穩健中正ナル人世觀ヲ抱カシメンコトヲ期シ國語漢文ニ於テ國民性ノ涵養ニ資スベキ材料ヲ多カラシメ歷史ニ於テ外國歷史ヲ稍簡略ナラシメテ國史ヲ一層精深ニシ地理ニ於テ外國地理中特ニ政治、經濟、產業、交通等ニ關シ我ガ國ト密接ノ關係アル地方ヲ審ニシテ國民的自覺ヲ促スニ資スルコトトナシタリ又各學科目ヲ通ジテ教授ヲシテ實際生活ニ適切有用ナラシムルト共ニ心力ノ啓培ニ力メシメンコトヲ期セリ

以上ハ今回改正ノ主要ナル事項ニシテ之ヲ要スルニ時勢ノ進運ニ應ジ中學教育ノ內容ヲ改善シ高等普通教育ノ本旨ヲ貫徹シ以テ健全有爲ナル國民ヲ養成セシメントスルニ在リ而シテ改正ノ趣旨ニ依リ改善ノ實ヲ擧ゲンコトハ教育ニ當ル者ノ研鑽ト努力トニ俟タザルヲ得ズ殊ニ今回ノ改正ニ於テハ增課科目ノ選擇、兩種課程ノ編制、生徒ノ課程選修ノ指導等教職員ノ考究裁量ニ俟ツモノ甚多シ地方長官ハ克ク改正ノ趣旨ヲ體シ學校當事者ヲ督勵シ以テ中學教育改善ノ實績ヲ擧ゲンコトヲ期セラルベシ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

昭和六年二月七日高等學校に對する文部省訓令第四號を以て左の如く高等學校高等科外國語の教授要目が定められた。

高等學校高等科外國語教授要目左ノ通定ム

外國語教授要目

教授方針

外國語ノ教授ハ高等學校規程第七條ノ趣旨ニ基キ外國語ヲ正確ニ了解シ且之ニ依リテ思想感情ヲ表現スルノ能力ヲ養成シ以テ學術ノ研究ニ資スルト共ニ海外諸國ノ文化、國情、國民性等ヲ正シク理解セシメ併セテ健全ナル思想、趣味、情操ヲ涵養スルコトニ努ムヘキモノトス

教授事項

發音、綴字、書方、讀方、譯解、話方、聽方、作文、書取、文法

各事項ハ成ルヘク互ニ聯關セシメ以テ教授ノ效果ヲ擧クルヤウ努ムヘシ

英語教授要目

第一外國語

文科

第一學年(約二百七十時間)

第二學年(約二百四十時間)

第三學年(約二百四十時間)

理科

第一學年(約二百四十時間)

第二學年(約二百八十時間)

第三學年(約百八十時間)

發音　強勢、抑揚及語句ノ聯結ニ注意シ譯解、話方等ノ教授ニ際シ常ニ正確ナル發音ニ習熟セシムヘシ

綴字(書方ヲ含ム)　譯解、作文、書取等ノ際適宜之ヲ教授スヘシ又綴字、發音ト聯關シテ稍組織的ナル知識ヲ與フルコトヲ得ヘシ

讀方　譯解、話方等ノ教授ト共ニ練習セシムルコトヲ得ヘク語句ノ發音、文章ノ抑揚ニ注意セシムルハ勿論讀ムト同時ニ理解シ又聽者ヲシテ理解セシメ得ルヤウ習熟セシムヘシ

譯解　英語ノ學習ヲ單ナル機械的記憶及表面的理解ニ止メス英語ノ特性、國語ト英語トノ語法、文脈ノ差異等ヲ會得セシメ文章ニ含マレタル意味、感情等ヲ直接感受セシムルヤウ語學的訓練ヲ行フヘシ又豫習ヲ督勵シ良書ヲ指定シテ自學研鑽ノ風ヲ起シ作品ヲ通シテ海外諸國ノ文化、國情ヲ理解セシムルト共ニ眞摯ナル思想、感情ニ觸レシメ進ンテ文學ノ鑑賞及批評ノ能力ヲ養フコトニ努ムヘシ

話方(聽方ヲ含ム)　日常ノ挨拶、應對ヲ初メ口頭ニヨル思想、感情ノ發表ニ慣レシムルト共ニ英語ヲ聽取スルコトニ習熟セシメ以テ英語ニヨル談話、講義等ヲ容易ニ了解シ得ルヤウ指導スヘシ

作文　既習ノ語句及文法上ノ知識ヲ自由ニ活用シテ自ラ英文ヲ講成スルコトニ慣レシメ以テ自己ノ思想、感情ヲ適切ニ表現スルノ能力ヲ養フヘシ

書取　隨時之ヲ課シ正確且敏速ニ書取ルコトヲ練習セシムヘシ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

文法　特ニ時間ヲ設ケテ組織的ニ教授スルコトヲ得ルモ譯解、作文等ヲ教授スル際常ニ具體的說明ヲ加ヘ既ニ習得セル文法上ノ知識ヲ整理シ且增進スルヤウ指導スヘシ

第二外國語

文科

第一學年(約九十時間)
第二學年(約九十時間)
第三學年(約九十時間)

理科

第一學年(約九十時間)
第二學年(約九十時間)
第三學年(約九十時間)

各教授事項ハ第一外國語ノ場合ニ準ス

入學前獨語或ハ佛語ヲ履修セル者ニ對シテハ初步ヨリ教授シ第一外國語ノ知識ヲ利用シテ急速ノ進步ヲ計ルヘシ

備考

一第一外國語、第二外國語ヲ通シテ教授事項ハ成ルヘク互ニ聯關セシメテ教授スルモノトス例ヘハ發音、綴字、讀方、書取、文法ノ如キハ譯解、話方、作文等ニ隨伴セシメテ之ヲ授クルコトヲ得ヘシ

一譯解ノ教材ハ同種類ノモノニ偏セサルヤウ教授者間ニ協調ヲ保チ文章ノ難易ト內容ノ適否トヲ愼重ニ考慮シテ成ルヘク近代ノ標準的作品ヨリ選フヘシ

譯解以外ノ教授事項ニ關シテモ適當ナル教材ヲ選ヒテ使用スルコトヲ妨ケス

一前記教授事項ノ外ニ適宜暗誦ヲ課スルコトアルヘシ

獨語教授要目

第一外國語

文科

第一學年(約三百三十時間)

發音、綴字、書方、讀方、譯解、話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取、文法

發音、綴字、讀方ハ初期ニ於テ正確ナル基礎ヲ授ケ書方ハ獨逸文字ノ書體ヲ一通リ練習セシムヘシ

譯解、話方、作文、文法ニ就テハ平易ヲ旨トシ成ルヘク相互ノ連絡ニ注意シ必スシモ重複スルヲ妨ケス時々暗誦、書取等ヲ課シテ語彙ヲ豐ニシ語法ニ熟セシムルヲ可トス

第二學年(約三百時間)

讀方、譯解、話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取、文法

讀方、譯解等ノ教材ノ選擇ニ際シテハ成ルヘク各種ノ文體及內容ニ接セシムルヤウ注意スヘシ

文法ニ就テハ適宜ニ補遺練習ヲ行フヘシ

第三學年(約三百時間)

讀方、譯解、話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取、文法

教材ハ論文、小說、戲曲、詩歌、史傳、紀行、時文等ヨリ適宜ニ選擇シテ獨逸文化ノ理解ニ資センコトニ努ムルモノトス

理　科

第一學年(約三百時間)

概ネ文科第一學年ニ準ス

第二學年(約二百七十時間)

概ネ文科第二學年ニ準ス

第三學年(約二百七十時間)

概ネ文科第三學年ニ準ス

教材ノ選擇ニ際シテハ必スシモ文科ト差別スルヲ要セスト雖多少自然科學的要素ヲ加味スルヲ妨ケス

第二外國語

文科、理科

第一學年(約百二十時間)

主トシテ發音、綴字、書方、讀方、譯解、文法ヲ課シ傍ラ話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取ニ及フ

第二學年(約百二十時間)

主トシテ讀方、譯解ヲ課シ話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取ニ及フ

教材ハ成ルヘク各種ノ文體及內容ニ接セシムルヤウ選擇スルモノトス

第三學年(約百二十時間)

主トシテ讀方、譯解ヲ課シ話方(聽方ヲ含ム)、作文、書取ニ及フ

教材ハ事情ヲ考慮シテ適宜ニ之ヲ選擇ス必スシモ文科理科ノ差別ヲ設ケスト雖多少ノ斟酌ヲナスヲ妨ケス

備　考

一入學前獨逸語ヲ履修セル者ニ就テハ相當ノ期間特別ノ課程ニ依ル授業ヲナスコトアルヘシ

一成ルヘク早ク辭書ノ使用ニ慣レシメ自習スルノ習慣ヲ養フコトニ努ムヘシ

一作文ハ國文獨譯、他國語ヨリノ獨譯、自由作文等ヲ適宜ニ課スルコトヲ得

一第二外國語ニ就テハ時間數其ノ他ノ事情ニ鑑ミ主トシテ讀書力ノ養成ニ努ムヘシ

佛語教授要目

第一外國語

文　科

第一學年(約三百三十時間)

一發音　發音原理、發音練習

一綴字　佛語綴字法ノ特色

一書方　佛語書方ノ特色

一讀方　朗讀法練習、暗誦

一譯解　初步讀本、簡易ナル名家文章

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

一話方　日常會話ノ一般形式
一聽方　簡易ナル文章
一作文　國文佛譯及英文佛譯（主トシテ日常ノ平易ナル短文）
一書取　文法ノ一般原則ヲ適用セル短文
一文法　文法大意、動詞變化ノ練習

第二學年（約三百時間）

一讀方　朗讀法練習、暗誦
一譯解　難解ナラサル模範作家ノ作品、新聞雜誌ノ平易ナル記事論說
一話方　日常會話
一聽方　平易ナル文章、說話
一作文　國文佛譯、英文佛譯、自由作文
一書取　平易ナル名家文章
一文法　上級文法

第三學年（約三百時間）

一讀方　名家文章ノ朗讀及暗誦
一譯解　諸種ノ論文、小說、戲曲、詩歌、隨筆、歷史、法律、政治、經濟、自然科學書等
一話方　會話、說話、論議

一聽方　講義、講演、演說
一作文　國文佛譯、自由作文、論文作成
一書取　名家文章
一文法　補遺及復習

理　科

第一學年（約三百時間）
第二學年（約二百七十時間）
第三學年（約二百七十時間）

教授事項ハ概ネ文科ニ準スルモ譯解ニ於テハ科學ニ關スル著書、論文等ヲ併用シ作文、話方ニ於テモ科學ニ關スル教材ヲ併課スルコトヲ妨ケス

第二外國語

文　科

第一學年（約百二十時間）
第二學年（約百二十時間）
第三學年（約百二十時間）

理　科

第一學年（約百二十時間）

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二學年(約百二十時間)
第三學年(約百二十時間)
第一外國語ノ場合ニ準スルモ時間數其ノ他ノ事情ニ鑑ミ讀書力養成ヲ主眼トス

備　考

一第一學年ニ於テハ特ニ既習ノ外國語ノ知識ヲ利用シテ急速ノ進歩ヲ計ルヘシ
一教材ニ關シテハ主トシテ十七世紀以後ノ名家ノ著作ヲ採用シ佛國ノ文學、藝術、歴史、地理、制度、風俗、習慣、國民思想ノ變遷發達等ヲ知ラシメ以テ佛國ニ關スル一般的知識ヲ養成スルモノトス
一入學前佛語ヲ履修セル者ニ就テハ相當ノ期間特別ノ課程ニ依ル授業ヲナスコトアルヘシ

同日又北海道廳、府縣に對する文部省訓令第五號を以て左の如く中學校教授要目が定められた。これは前述の中學校令施行規則の改正に伴ひ要目全部の改正を必要とするに至つたが爲である。

明治四十四年文部省訓令第十五號中學校教授要目左ノ通改正ス地方長官ハ各學校長ヲシテ本改正要目ニ準據シ地方ノ情況ニ適切ナル教授細目ヲ定メシメ以テ各學科目教授ノ内容ヲ充實シ克ク中學校教育ノ本旨ヲ貫徹セシメンコトヲ期セラルベシ

中學校教授要目

本要目實施上ノ注意

修身
公民科
國語漢文
歴史
地理
外國語
數學
理科
圖畫
音樂
作業科
實業
農業　工業　商業　實業(農業・工業・商業ヲ綜合セルモノ)

本要目實施上ノ注意

一　各學科目ヲ教授スルニハ其ノ固有ノ目的ヲ達スルコトニ力ムルト共ニ互ニ聯絡補益シテ統一ヲ保タンコトヲ要ス
二　本要目ニ掲ゲタル事項及順序ハ斟酌ヲ加フルモ妨ナシ
三　教授用具ハ教授上差支ナキ限リ成ルベク日用品ヲ利用シ又ハ教員自ラ製作シテ之ニ充テンコトニ力ムベシ又諸

第二編　本　論

學科目ニ通ズル用具ハ成ルベク之ヲ兼用スベシ

修身

低學年ニ於テハ主トシテ修養・家生活・社會生活・國家生活・國際生活ニ關スル道德ノ要領ヲ授ケ其ノ歸趣ヲ教育ニ關スル勅語ヲ始メ戊申詔書、國民精神作興ニ關スル詔書ニ求メテ特ニ國體ノ尊嚴ナル所以ヲ會得セシメ忠君愛國ノ大義ヲ明ニシ國民道德ニ對スル信念ヲ鞏固ナラシメ且我ガ國ノ世界的地位ヲ自覺セシムルコトニ力ムルモノトス

高學年ニ於テハ道德ノ原理、社會生活ノ原理ヲ授ケテ國民道德ノ根據ニ對シテ確信ヲ與ヘンコトヲ旨トシ又國民道德ノ特質ヲ十分明確ニ悟了セシムルト共ニ時代思想ニ對シテ正シキ批判力ヲ養ハンコトニ力ムルモノトス

第一學年乃至第三學年　　毎週一時

生徒心得

教育ニ關スル勅語

戊申詔書

國民精神作興ニ關スル詔書

道德ノ要領

人格ノ修養

身體　精神

家生活

家　祖先　孝行　夫婦　友愛　親族等

社會生活

協同　公正　寬容　同情　公益　秩序　責任　禮儀　職業等

國家生活

國體　天皇　皇室　忠君愛國　國憲國法

國際生活

國際親善　國際協力　外國人トノ交際

作法

第四學年及第五學年　　毎週一時

道德ノ原理

良心　行爲　品性　至善　本務　德　人格

社會生活ノ原理

社會ノ成立及組織　社會ノ作用

國民道德

我ガ國道德ノ由來

教育ニ關スル勅語發布ノ由來

教育ニ關スル勅語ノ精神

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

時代思想ノ批判

作法

注　意

一　修身教授ノ效ヲ收メントスルニハ特ニ訓練ニ依リテ生徒ヲ實行ニ導キ人格的感化ヲ及ボサンコトニ力ムベシ

二　修身ノ教授ハ生徒ノ思想年齡ニ適應セシメ又努メテ實際生活ニ適切ナラシメンコトヲ要ス

三　作法ヲ教授スルニハ克ク其ノ精神ノ存スル所ヲ知ラシメ應用宜シキヲ得シメンコトヲ要ス但シ之ヲ授クルニハ特ニ時間ヲ設ケズシテ道德ノ要領ヲ授クル際便宜併セ課スルモ可ナリ

四　教訓ニ資スベキ事件ノ偶發シタル時又ハ國民ノ記念スベキ日及忠良賢哲ノ記念日等ニ於テハ適宜教訓スルヲ可トス

公民科

本要目ハ法制上經濟上及社會上ノ事項ニ關シ日常生活ノ關係ヨリ其ノ教材ヲ排列シ常ニ實踐上ノ問題ニ歸結セシメンコトヲ期セリ

教材中我ガ家、我ガ鄉土、我ガ府縣、我ガ國家等ノ題目ヲ選ビタルハ生徒ノ親熟シタル日常生活ノ事項トシテ之ヲ取扱ハンガ爲ナリ

第四學年

人ト社會　　毎週二時

人ト社會　共同生活ト共存共榮　國家ノ重要意義　我ガ家

家庭生活　我ガ國ノ家族制度　戶主・家族　親族・婚姻　戶籍・相續

一家ノ生計

一家ノ收入　生計費　勤儉貯蓄　保險　財產

職業

職業ト人生　職業ノ選擇　勤勞ト研究　職業ト道德

教育

人ト教育　家庭教育　學校教育・義務教育　社會教育

社會教育ヲ教授スル際新聞雜誌等ノ事項ニ說及ブベシ

神社

神社　敬神崇祖

宗教

宗教　信教ノ自由

公安

警察ト公衆　災害防止　公衆衞生

地方自治

地方自治ノ沿革　地方自治ノ精神　我ガ鄉土

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

我ガ鄕土ヲ敎授スル際愛鄕愛國ノ事ニ說及ブベシ

市町村
　市町村ノ自治　公民　議員ノ選擧　市町村會　市役所・町村役場　市町村ノ財政　市町村ノ財產
府縣
　府縣ノ自治　府縣廳　我ガ府縣
農村ト都市
　農村ト都市　農村生活　農村ノ開發　都市ノ生活　都市ノ改善
產業
　產業ト國民經濟　農業　工業　商業　其ノ他ノ產業
　農業・工業・商業等ノ任務・要素及企業形態、產業組合、產業助成機關等ニ說及ブベシ
貨幣及金融
　貨幣　物價　信用　金融機關
交通
　交通機關　交通ト文化
　交通道德ノ事ニ說及ブベシ
　第五學年
國家

人類ト國家　國家ノ要素　國體ト政體　我ガ國家
皇室ト臣民
　天皇　皇位繼承　皇室典範　皇室及皇族　皇室ト臣民
　詔勅ノ事ニ說及ブベシ
立憲政治
　立憲政治　帝國憲法　臣民ノ權利義務
帝國議會
　帝國議會　議員ノ選擧　議會ノ作用　政黨
國務大臣　樞密顧問
　國務大臣　內閣　樞密顧問
行政官廳
　行政官廳　行政官廳ノ種類　官吏
國法
　國法　國法ノ種類　法ノ尊重　法ト道德
裁判所
　司法　裁判所　訴訟・調停　陪審
國防

毎週二時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

國防　兵役　我ガ國ノ軍備　國防ト國民
國交
　國交　條約　國際協同　國交ト國民
財政
　歳入ト歳出　租稅　官業　公債
我ガ國ノ產業
　我ガ國ノ產業　我ガ國ノ貿易　資源ノ開發
人口ト國土
　人口ト國土　拓殖ト移住　海外發展
　人口ト國土ノ教授ノ際我ガ領土、租借地委任統治ノ地域等ノ事ニ說及ブベシ
社會改善
　社會問題　社會政策　社會事業　社會改善
世界ト日本
　人類文化ノ發達　文化史上ノ我ガ國ノ地位　我ガ國ノ使命

注　意

一　公民科ノ教授ハ事例ヲ成ルベク日常生活ニ於ケル經驗ニ求メ理論ニ偏セズシテ實際ヲ主トシ且道德的情操ノ陶冶ニ力メ特ニ修身トノ聯絡ニ留意スベシ

二　本要目ハ土地ノ情況等ニ應ジ適宜斟酌シテ運用スベシ

國語漢文

國語漢文ハ國語講讀・漢文講讀・作文・文法及習字ヲ課スルモノトス

國語講讀ハ讀方及解釋、話方・暗誦・書取ヲ課シ其ノ材料ハ總テ文章ノ模範タリ而シテ國體ノ精華、民俗ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ敍シ以テ健全ナル思想、醇美ナル國民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、文藝ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルベシ

漢文講讀ハ讀方及解釋、暗誦ヲ課シ其ノ材料ハ國語講讀ノ場合ニ準ズ而シテ邦人ノ著作ニ係ルモノヲ主トシ更ニ德敎ニ關係深キ漢籍中ヨリ之ヲ選ブベシ

作文ハ平明達意ニシテ實際ニ適スル文ヲ作ラシメ且生徒ノ作品ニ就キ添削批評ヲナスベシ尙特ニ作文ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ少クトモ隔週一回國語漢文ノ講讀ノ時間內ニ於テ之ヲ課スベシ

文法ハ國文法ノ大要ヲ授ケテ國語ノ特色ヲ理解セシムベシ尙特ニ文法ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ常ニ講讀・作文等ニ附帶シ實例ニ就テ之ヲ敎ヘ正確ナル語法ニ練熟セシムベシ

習字ハ楷書・行書及假名ヲ課シ間架結構ノ大要ヲ知ラシメ且實用ニ適切ナラシメンコトヲ期スベシ尙特ニ習字ノ時間ヲ設ケザル學年ニ在リテモ作文・書取其ノ他ノ場合ニ於テ常ニ正確ナル書方ニ注意セシムベシ

第一學年　　毎週七時

國語講讀
　漢文ノ入門ニ資スベキ材料ヲ加ヘ漢文學習ノ基礎ヲ併セ養ハシムベシ　　毎週四時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで　　二七三

作文　毎週一時
文法　毎週一時
品詞ノ大要ヲ授ケ口語、文語ノ異同ヲ知ラシメ用言ノ活用ニ練熟セシムベシ
習字

第二學年

國語講讀　毎週一時
漢文講讀　毎週六時
作文　毎週三時
習字　毎週二時

第三學年

國語講讀　隔週一時
漢文講讀　隔週一時
作文　毎週六時
習字　毎週三時

第三學年（第一種及第二種ノ兩課程ニ分チタル場合）

國語講讀　毎週三時
漢文講讀　毎週三時

基本教材

國語講讀　毎週四時
漢文講讀　毎週二時

增課教材

毎週二時

國語講讀
近世近古ニ於ケル名著ノ抄本類ヲ課スベシ
漢文講讀
主トシテ邦人ノ手ニナレル名著ノ抄本類ヲ課スベシ
習字

第四學年

基本教材

國語講讀　毎週四時
漢文講讀　毎週二時

增課教材

國語講讀　毎週二時
前學年ノ材料ニ準ジ更ニ中古上古ニ於ケル文章ヲ選ビ授クベシ
漢文講讀　毎週一時乃至三時
前學年ノ材料ニ準ジ更ニ德教ニ關係深キ漢籍ノ抄本類ヲ授クベシ
文法
既習ノ全事項ヲ組織的ニ整理シ文ノ構成ニ對スル一般ノ知識ヲ授クベシ
習字

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第五學年　　毎週四時

基本教材　　毎週二時

國語講讀　　毎週二時

漢文講讀　　毎週一時乃至三時

増課教材

國語講讀

前學年ニ準ジ尚國文學ノ史的發展ヲ略述シ國民性ノ由來スル所ヲ知ラシムベシ

漢文講讀

前學年ニ準ズ

文法

習字

注　意

一　國語漢文ノ教授ニ際シテハ常ニ生徒ノ思想感情ヲ啓發陶冶シ之ニ由リテ高尚ナル人格ヲ成シ特ニ愛國的精神ヲ養ハンコトヲ期スベシ

二　國語漢文各分科ノ教授ハ互ニ聯絡補益センコトニ力ムベシ

三　増課教材ノ要目ハ適宜取捨シテ之ヲ課スベシ

四　文法ノ教授ニ於テハ國語ノ特色ヲ理解セシムルト共ニ國語愛護ノ精神ヲ養ハンコトニ留意スベシ

尚第四學年又ハ第五學年ノ増課教材中ニ成ルベク文法ノ時間ヲ設ケテ之ヲ課スベシ

歴史

國史ハ小學校ニ於テ人物ヲ主題トセルモノヲ總括シテ歴史上重要ナル事蹟ヲ授ケ特ニ高學年ニ於テ更ニ文化史的ニ批判綜合スルモノトス

外國史中東洋史ハ我ガ國ノ文化ニ直接重大ナル關係ヲ有スル事實人物ヲ主トシテ教授シ西洋史ハ西洋文化ノ性質及發達ヲ概括的ニ授クルト共ニ列國ノ國民性ニ就キ其ノ由來ヲ知ラシメ且我ガ國ノ文化ニ影響セル顯著ナル事實及世界大勢ノ變遷ニ關スル事蹟ニ重ヲ置クモノトス

教材ノ排列ニ就キ國史ヨリ始メ外國史ニ入リ更ニ國史ヲ以テ結ブモノヲ要目甲トシ外國史ヨリ始メテ國史ニ入リ文化ヲ中心トシタル國史ニ終ルモノヲ要目乙トス

〔甲〕

第一學年　　毎週二時

國史

神代

神武天皇ノ創業

皇威ノ發展

文化ノ傳來

蘇我氏ノ專權及其ノ滅亡

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

政治上ノ革新
奈良奠都
奈良時代ノ文化
平安奠都
藤原氏ノ擅權　中央及地方ノ情況
平安時代ノ文化
院政
源平二氏ノ興起
平氏ノ擅權及其ノ滅亡
鎌倉幕府ノ創立
鎌倉時代ノ文化
鎌倉幕府ノ越權　承久ノ變
建武ノ中興
吉野ノ朝廷
室町幕府ノ創立
室町時代ノ外交ト文化
室町幕府ノ失政　應仁ノ亂

群雄ノ興起ト織田豐臣二氏ノ統一
織田豐臣時代ノ外交ト文化
江戸幕府ノ創立
江戸時代ノ外交
江戸時代ノ文化
江戸幕府ノ失政
學問ノ興隆ト尊王思想ノ勃興
大政奉還
明治維新
明治大正時代ノ內治
明治大正時代ノ外交
明治大正時代ノ文化
現代ノ情勢

第二學年

外國史(東洋史)
上代ノ支那
周代ノ文化

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週一時

第二編　本　論

箕子ノ朝鮮
孔子ト儒學
諸子百家
秦ノ興亡
前漢ト後漢
朝鮮半島ノ變遷
漢代ノ文化
佛教ト其東傳
三國
南北朝ト其ノ文化
隋ノ統一
唐ノ興隆
唐代ノ文化
北宋ト南宋
元ノ興起
明ノ興起　李氏ノ朝鮮
西力東漸

第三學年

外國史(東洋史)　第一學期　毎週二時

清ノ興起
西洋諸國ノアジヤ經略
清國ト我ガ國
中華民國

外國史(西洋史)　毎週一時

第一學期

古代東方諸國
ギリシヤトローマ
キリスト教
ゲルマニヤ、アラビヤ諸民族ノ活動
封建制度トローマ法王
十字軍ト其ノ影響
新航路ノ發見
文藝復興

第二・第三學期　毎週二時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本論

宗教改革
諸國家ノ興隆ト植民地經營
北米合衆國ノ獨立ト其ノ發達
近古ノ文化
フランス革命ト其ノ反動
近世歐洲諸國ノ隆盛ト其ノ國民性
近世文化ノ進歩

第四學年

外國史(西洋史)　第一學期
列强ノ世界政策
歐洲大戰
大戰後ニ於ケル列國ノ現勢
現代文化ノ趨勢
世界ニ於ケル我ガ帝國ノ地位
國史　第二・第三學期
建國ノ體制
上代ノ文化

毎週二時
毎週二時
毎週二時

律令ノ制定
奈良平安時代ノ文化
武士ノ興起ト武家政治
武士道ノ起源及其ノ發達
室町時代ノ世相
國民ノ海外發展ト西洋文化
戰國諸雄ト皇室

第五學年

國史
江戸時代ノ內治外交
江戸時代ニ於ケル諸藩ノ治
王政復古ノ由來
明治ノ新政
明治大正時代ノ文化
現代國勢ノ一般ト國民ノ覺悟

〔乙〕

第一學年

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週二時
毎週一時

第二編　本　論

外國史（國史ヲ背景トシタル東洋史）　毎週二時

支那ノ開國
周
孔子
秦
漢　三韓
漢字漢學ト我ガ國
釋迦佛教ノ傳播
隋・唐
唐ノ文化ト我ガ國
宋
宋ノ文化ト我ガ國
元・明　西洋トノ關係　朝鮮
元明ト我ガ國

第二學年

外國史（國史ヲ背景トシタル東洋史）　毎週一時

第一學期

清
西洋人ノアジヤ經略
清國ト我ガ國
中華民國
東洋ニ於ケル我ガ國

外國史（西洋史）　毎週一時

第一學期

古代東方諸國
ギリシヤトローマ
ゲルマニヤ民族ノ建國
サラセン帝國トマホメツト
キリスト教會ト封建制度
十字軍
新航路ノ發見
文藝復興ト宗教改革
諸國家ノ興隆ト植民地經營
第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

北米合衆國ノ獨立
近古ノ文化
フランス革命
ナポレオン一世
英國ノ隆盛ト其ノ國民性
佛國ノ隆盛ト其ノ國情
イタリヤ王國ノ建設
ドイツ帝國ノ建設ト其ノ國民性
ロシヤ帝國ノ發展ト其ノ國情
近世文化ノ進歩

第三學年

外國史(西洋史)　第一學期　毎週二時

列強ノ世界政策
歐洲大戰
大戰後ニ於ケル列國ノ現勢
現代文化ノ趨勢
世界ニ於ケル我ガ帝國ノ地位

國史　第二・第三學期　毎週二時

建國ノ體制
皇威ノ伸張
上古ノ社會組織・國民思想・風俗
朝鮮半島トノ關係　文化ノ進歩
支那トノ交通　政治ノ革新
奈良時代ト其ノ文化
平安時代初期ノ趨勢
攝關政治　院政
平安時代ノ文化
武士ノ勃興　源平二氏ノ興亡
鎌倉幕府　北條氏ノ執權
元寇
鎌倉時代ノ文化　士風
建武ノ中興　吉野ノ朝廷
室町幕府
支那及朝鮮トノ交通

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

室町時代ノ文化
戰國時代ノ大勢
西洋人ノ渡來ト西洋文化ノ輸入
第四學年

國史

織田豐臣二氏ノ統一ト其ノ時代ノ文化
江戸幕府　社會組織
海外諸國トノ交通　鎖國
元祿時代ノ文化　社會文運ノ發達
江戸幕府ノ中興　諸藩ノ治
文化文政時代ノ世相ト文化
國史國學ノ發達　尊王思想ノ勃興
洋學ノ發達　海防　攘夷論
開港ノ顚末
幕府ノ衰頽　大政奉還
明治維新
明治初年ノ外交

毎週二時

西洋文化ノ採用　世相ノ變遷
自治制度ノ發達　立憲政體ノ確立
法典編纂　條約改正
東洋ノ平和ト我ガ國
文化ノ發達　國運ノ隆昌
帝國ノ世界的地位ト國民ノ覺悟
第五學年

文化ヲ中心トシタル國史概說
國體ノ精華
社會組織ト國民思想ノ淵源
大陸文化ノ輸入ト國民生活ノ展開
外來文化ノ同化　平安時代文化ノ隆盛
武士ノ勃興ト國民精神ノ發達
宋元明トノ交通ト新文化ノ輸入
國民ノ海外發展　西洋文化ノ輸入
武家中心ノ社會組織
鎖國後ニ於ケル文化ノ發達

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週二時

經濟・產業ノ進歩　都市・交通ノ發達
尊王思想ノ勃興ト王政
西洋文化ノ輸入ト新生活ノ展開
政治・制度ノ發達
學問・藝術ノ進歩
產業ノ發達ト社會上ノ變化
我ガ國際的地位ノ向上
帝國ノ現勢ト其ノ世界的使命

注　意

國史

一　國史ヲ授クルニハ特ニ我ガ國體ノ特異ナル所以及大義名分ヲ明ニスルコトヲ主トシ徒ニ細密ナル事實ノ穿鑿ニ流レテ其ノ要領ヲ失ハザランコトヲ要ス

二　外國文化ノ傳來ニ就テハ常ニ之ガ取捨ヲ謬ラズシテ我ガ國ノ文化ヲ培養大成シタルコトヲ知ラシムベシ

三　高學年ニ於テハ文化及社會ノ變遷ヲ詳ニシ各時代ノ觀念ヲ一層明確ニセンコトニ力ムベシ

四　國史ノ教材中其ノ地方ニ關係深キモノハ稍詳ニ之ヲ教授スベシ

外國史

一　東洋史ヲ授クルニハ我ガ國ニ關係アル事項特ニ文化ニ關スル史實ニ重ヲ置キ其ノ他ハ努メテ簡略ニ取扱ヒ錯綜セル事件難澁ナル辭句等ハ努メテ之ヲ避クベシ

二　西洋史ヲ授クルニハ特ニ近世以後ニ重ヲ置キ各國家ノ成立變遷ヲ詳ニシ現代文化ノ趨勢ト世界ノ大勢トヲ知ラシメンコトニ力ムベシ

三　外國史ヲ授クル際各國家ノ國體國民性等ニ就テハ其ノ我ガ國ト異ナル所以ヲ明ニシ生徒ヲシテ誤解ヲ生ゼザラシメンコトヲ期スベシ

地理

地理ノ教授ハ重ヲ日本地理ニ置キ比較的之ヲ精深ニ教授スルモノトス

外國地理ノ教材ハ必ズシモ本邦トノ位置的關係ニ拘泥セズ地理的事情ヲ顧慮シ簡ヨリ繁ニ進ムノ法ニ則リテ排列スルモノトス

教材ノ學年配當ハ便宜甲表又ハ乙表ニ據リ第一學年及第二學年ノ毎週教授時數ハ歴史トノ關係ニヨリ之ヲ定ムルモノトス

甲表

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
毎週時數	二時	二時	一時	一時	一時
外國地理	外國地理	日本地理	日本地理	自然地理概說	人文地理概說

乙表

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
毎週時數	二時	一時	一時	一時	一時
外國地理	日本地理	日本地理	自然地理概說	人文地理概說	

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

外國地理

大洋洲

總說

總說ニ於テハ境域・地勢・氣候・生物・國家・住民・產業・交通等ノ概要ヲ授クベシ以下之ニ倣フ

各說

各說ニ於テハ各國（又ハ各地方）ニ就テ其ノ大小、我ガ國トノ關係ノ多少等ニヨリ境域・地勢・氣候・住民・產業・交通・政治・教育・宗教・都會等ノ事項ニ關シ其ノ分量ヲ斟酌シテ之ヲ授クベシ以下之ニ倣フ

オーストラリヤ

我ガ南洋諸島

ハワイ諸島等

兩極地方

總說

アフリカ

總說

各說

南アメリカ

總說

各說

西北部諸國

北部諸國

ブラジル

南部諸國

北アメリカ

總說

各說

アメリカ合衆國

カナダ

メキシコ

中央アメリカ　西印度諸島等

アジヤ

總說

各說

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本論
滿洲
關東州
支那
印度支那
マレー諸島
印度
シベリヤ
アジヤトルコ　アラビヤ　イラン地方
中央アジヤ　コーカシヤ等
ヨーロツパ
總說
各說
ロシヤ
フインランド　バルト海沿岸諸國　ポーランド等
スカンデナビヤ半島
デンマーク　オランダ　ベルギー等
ドイツ

スイス　オーストリヤ　ハンガリー　チエツコ、スロバキヤ等
イギリス
フランス
イベリヤ半島
イタリヤ
バルカン半島
日本地理
帝國ノ位置
地方誌
總括
地勢
山脈　河川　湖沼　平野　海岸　島嶼等
海洋
沿海　海流　潮汐等
氣候及動植物
住民
人口　都會等
第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

政治
　立法　行政　司法　軍備　外交等
教育　神社　宗教
産業
　農業　林業　水產業　鑛業　工業　商業等
交通
　道路　鐵道　航路　通信等

自然地理概說
宇宙及太陽系
地球
月
曆
陸界　其ノ變動
海洋
氣界　天氣及氣候
地勢・氣候・生物相互ノ關係

人文地理概說
自然ト人類トノ關係
住民
產業
交通
國家
世界ノ主要諸國ノ國勢比較
世界ニ於ケル我ガ國ノ地位

注　意

一　地理ヲ授クルニハ成ルベク事實ノ比較聯絡ニ力メ特ニ外國地理ニ於テハ我ガ國ノ情勢ヲ以テ比較ノ基礎トナスベシ

二　實地ニ觀察シ得ベキ事項ハ成ルベク直接ニ觀察セシメ其ノ他ハ常ニ地圖・標本・寫眞・繪畫・表等ニ依リ又ハ之ヲ幻燈等ニ映寫シテ生徒ノ知識ヲ確實ナラシムベシ

三　常ニ讀圖力ノ養成ニ力メ且簡單ナル圖表ノ作製ニ慣レシムベシ

四　人文地理的教材ニ關シテハ常ニ其ノ異動ニ留意シテ之ヲ授クベシ

五　學校所在府縣及之ト密接ノ關係アル地方ニ就テハ特ニ詳細ニ教授スベシ

六　自然地理概說及人文地理概說ハ特ニ我ガ國ニ關スル事項ニ注意シテ之ヲ授クベシ

外國語

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

政治
　立法　行政　司法　軍備　外交等
教育　神社　宗教
産業
　農業　林業　水產業　鑛業　工業　商業等
交通
　道路　鐵道　航路　通信等
自然地理概說
　宇宙及太陽系
　地球
　月
　曆
　陸界　其ノ變動
　海洋
　氣界　天氣及氣候
　地勢・氣候・生物相互ノ關係
人文地理概說

自然ト人類トノ關係
住民
產業
交通
國家
世界ノ主要諸國ノ國勢比較
世界ニ於ケル我ガ國ノ地位

注　意

一　地理ヲ授クルニハ成ルベク事實ノ比較聯絡ニ力メ特ニ外國地理ニ於テハ我ガ國ノ情勢ヲ以テ比較ノ基礎トナスベシ

二　實地ニ觀察シ得ベキ事項ハ成ルベク直接ニ觀察セシメ其ノ他ハ常ニ地圖・標本・寫眞・繪畫・表等ニ依リ又ハ之ヲ幻燈等ニ映寫シテ生徒ノ知識ヲ確實ナラシムベシ

三　常ニ讀圖力ノ養成ニ力メ且簡單ナル圖表ノ作製ニ慣レシムベシ

四　人文地理的教材ニ關シテハ常ニ其ノ異動ニ留意シテ之ヲ授クベシ

五　學校所在府縣及之ト密接ノ關係アル地方ニ就テハ特ニ詳細ニ教授スベシ

六　自然地理概說及人文地理概說ハ特ニ我ガ國ニ關スル事項ニ注意シテ之ヲ授クベシ

外國語

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

外國語ノ教材ハ平易ナル現代文ヲ主トシ常識ノ養成、國民性ノ涵養ニ資スルヲ旨トシテ選擇スベシ

外國語ハ發音・綴字・聽方、讀方及解釋、話方及作文、書取・文法・習字ヲ課シ了解・發表ノ二方面ニ亙リテ互ニ聯絡シテ之ヲ授クルモノトス

第一學年及第二學年

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取

初ハ聲音ノ基礎的練習ニ重ヲ置キ且綴字ノ練習ヲナサシムベシ

簡易ナル語句文章ニ就テ聽方、讀方及解釋ヲ授ケ之ト關聯シテ話方及作文、書取等ヲ課スベシ

必要ニ應ジ文法上ノ事項ヲ知ラシムベシ

習字

成ルベク既習ノ語句文章ニ就テ之ヲ授クベシ

毎週五時

第三學年

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取　文法

毎週六時

前學年ニ準ジ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クベシ

文法ハ成ルベク既習ノ材料ニ基キテ其ノ大要ヲ授クベシ

第三學年（第一種及第二種ノ兩課程ニ分チタル場合）

第一種　增課教材

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取　文法

毎週二時乃至五時

前學年ニ準ジ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クベシ

教授時數少キ場合ニハ讀方及解釋ニ重ヲ置クコトヲ得

第二種　增課教材

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取　文法

毎週四時乃至六時

前學年ニ準ジ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クベシ

文法ハ成ルベク既習ノ材料ニ基キテ其ノ大要ヲ授クベシ

第四學年及第五學年

第一種　增課教材

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取　文法

毎週二時乃至五時

前學年ニ準ジ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クベシ

教授時數少キ場合ニハ讀方及解釋ニ重ヲ置クコトヲ得

第二種　增課教材

聽方　讀方及解釋　話方及作文　書取　文法

毎週四時乃至七時

前學年ニ準ジ稍進ミタル程度ニ於テ之ヲ授クベシ

注意

一　發音・綴字ハ初期ノ教授ニ於テ注意シテ之ヲ練習セシムベキモ勿論ナレドモ何レノ學年ニ於テモ之ヲ忽ニスベカラズ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

二　發音ヲ授クルニ際シ必要アルトキハ舌・齒・唇等ノ位置ヲ說明シ又發音圖ヲ示スベシ

三　聽方、讀方及解釋ニ於テハ實物・繪畫・動作等ヲ示シ又彼我風俗習慣等ノ相違ヲ說キテ意義ノ了解ヲ助クベシ

四　作文ニ於テハ常ニ聽方、讀方及解釋又ハ話方ニ於テ練習セル事項ヲ應用シテ記述セシムルコトニ留意スベシ

五　作文・文法ノタメニ第三學年以上ニ於テハ適宜時間ヲ分ツコトヲ得

六　書取ハ各學年ヲ通ジテ成ルベク頻繁ニ之ヲ課スベシ

七　生徒ノ學力ニ應ジ正確明瞭ニ會得セル文章ニ就キ時々暗誦ヲ課スベシ

八　適當ノ時期ニ於テ豫習ヲ課シ又辭書ノ用法ヲ授ケ其ノ使用ニ慣レシムベシ

九　第一種課程ニ在リテハ實業ノ種類ニ應ジ適宜教材ノ選擇ニ留意スベシ

一〇　支那語ニ在リテハ四聲・注音・字母等ノ特有ノモノニ就キ注意シテ教授スベシ尙其ノ教材ニ就テハ漢文トノ關係ニ留意シ特ニ習字ハ國語漢文ニ於ケル習字トノ關係ヲ考慮シ之ヲ省クモ可ナリ

〔甲〕

第一學年　　毎週三時

數學

本要目ハ算術・代數・幾何・三角法ノ區別ヲナサズ單ニ教授內容ヲ列擧スルニ止メタリ而シテ其ノ取扱ハ或ハ之ヲ分科シ或ハ之ヲ綜合スル等教授者ニ於テ任意工夫スベキモノトス

第一種及第二種ノ兩課程ヲ第四學年ヨリ分ツ場合ニ於ケル要目ヲ甲トシ第三學年ヨリ分ツモノヲ乙トス

整數　小數　分數

正數　負數

一次方程式

幾何圖形

第二學年　　毎週五時

二次方程式

直線形

圓

第三學年

分數方程式

比例

相似形

銳角三角函數

第四學年

增課教材

基本教材ノ補充

級數

第一種　毎週二時乃至四時

第二種　毎週二時乃至五時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

對數
第一種課程ニ在リテハ特ニ實業ニ必要ナル事項ヲ選ビテ課スル爲前記ノ內容ヲ適宜斟酌スルコトヲ得
第五學年ニ於テモ亦之ニ同ジ　第一種　毎週二時乃至四時　第二種　毎週二時乃至五時
第五學年
増課教材
平面及直線
多面體
曲面體
三角函數及其ノ應用
全課程ノ總括及補充
〔乙〕
第一學年　毎週三時
整數　小數　分數
正數　負數
一次方程式
幾何圖形
第二學年　毎週三時

二次方程式
直線形
圓
第三學年　毎週三時
分數方程式
比例
相似形
第三學年　毎週一時乃至二時
増課教材
基本教材ノ復習及應用
銳角三角函數
第一種課程ニ在リテハ特ニ實業ニ必要ナル事項ヲ選ビテ課スル爲前記ノ內容ヲ適宜斟酌スルコトヲ得
第四學年及第五學年ニ於テモ亦之ニ同ジ　第一種　毎週二時乃至四時　第二種　毎週二時乃至五時
第四學年
増課教材
基本教材ノ補充
級數

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

對數

第五學年

增課教材

平面及直線

多面體

曲面體

三角函數及其ノ應用

全課程ノ總括及補充

注　意

一　步合算・軌跡・作圖題・求積等ハ本要目ニ列擧セル事項ニ聯關シテ適宜之ヲ授クベシ

二　第一學年ニ於ケル幾何圖形ヲ教授スルニハ立體ノ觀察測定、平面圖形ノ作圖、模型ノ作製等ニ依リテ空間ニ關スル觀念ヲ明瞭ニシ且後學年ニ於ケル學習ノ基礎タラシメンコトニ力ムベシ

三　教材ハ成ルベク實際生活ニ適切ナルモノヲ選ブベシ

四　教授ノ際常ニ函數觀念ノ養成ニ留意スベシ

五　珠算ハ適宜之ヲ課スルコトヲ得

理科

低學年ニ於テハ一般理科ヲ課シ小學校ノ教授内容ト聯絡シテ日常生活ニ關係アル事項ニ就キ博物・物理及化學ノ各方面ヨリ之ヲ理會セシムルモノトス

高學年ニ於テハ便宜之ヲ博物・物理及化學ニ分チテ教授スレドモ一般理科ト聯絡ヲ保チ徒ニ科學的體系ニ泥ムコトナク常ニ相互ノ關係ニ注意シ稍進ミタル程度ニ於テ教授スルモノトス

博物・物理及化學ノ應用ニ關シテハ低學年ヨリ適當ノ機會ニ之ヲ教授スベキモノナレドモ乙表ニ據ル場合ニハ特ニ高等年ニ於テ應用ニ關スル重要ナル事項ヲ纏メテ教授スルモノトス

每週教授時數ノ配當ニ就テハ甲表又ハ乙表ニ據ルモノトス

甲表

學年	一般理科	博物	物理及化學
第一學年		二	
第二學年			二
第三學年		一	二
第四學年		一	二
第五學年	四		

乙表

學年	一般理科	博物	物理及化學	應用理科
第一學年	二			
		一	一	

第一種　每週二時乃至四時
第二種　每週二時乃至五時

第二學年	一			
第三學年	一	一	二	
第四學年	一	二	二	四
第五學年	一	二	一	一

〔甲〕

一般理科

一般理科ニ於テハ實驗觀察ヲ重ンジ徒ニ理論的說明ニ陷ラザランコトニ力メ高學年ニ於ケル教材トノ關係ヲ考慮シ博物・物理及化學ノ各方面ヨリ考察シ適宜左ノ材料ヲ組合セ互ニ聯絡ヲ保チテ教授スベシ又或時期ニ於テハ博物材料ヲ主トシテ之ニ物理化學ノ材料ヲ加味シ他ノ時期ニ於テ物理化學ノ材料ヲ主トシテ之ニ博物ノ材料ヲ加味スル等便宜ノ取扱ヲナスコトヲ得

乙要目ノ一般理科ニ於テモ亦之ニ同ジ

果實　種子　芽　花　根　莖　葉

シダ類　藻類　キノコ　カビ　バクテリヤ

ウサギ・ニハトリ・フナ・カヘル・バツタノ類ノ形態・解剖・生理・生態

普通ノ鑛物　岩石及土壤

空氣　燃燒　熱

水

酸　アルカリ

衣服　食物

藥器　蓄音機

鏡　レンズ

簡單ナル機械

熱機關

電氣

電流ト磁石

電流ト熱

植物及動物

形體　解剖

生理　生態竝ニ分布

系統

有用植物及動物　有害植物及動物

生理及衞生

人體ノ構造

各器官ノ構造及作用

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

衛生竝ニ普通ノ疾患

鑛物

主用ナル有用鑛物

火成岩　水成岩　變成岩　土壤

地殼構造ノ概要　地史ノ概要

生物通論

生物ノ生態

生物ノ進化

遺傳　變異　品種改良

物理

密度及比重

固體・液體及氣體ノ性質

比熱

熱ノ作用

大氣ノ乾濕

光度

光ノ反射及屈折

光ノ分散

磁氣

電流ノ强サ　電動力　抵抗

電流ノ作用

感應電流

眞空放電

放射能

力　運動

落體及拋射體

圓運動　廻轉運動

仕事及エネルギー

振動及波動

音波　光波　電波

化學

主ナル非金屬元素及其ノ化合物

主ナル金屬元素及其ノ化合物

主ナル有機化合物

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

化學量論ノ諸定律
分子量　原子量
化學式及化學方程式
酸　鹽基　鹽
溶液
電解及電離
元素週期律

〔乙〕

一般理科

果實　種子　芽　花　根　莖　葉
キノコ　カビ　バクテリヤ
ウサギ・ニハトリ・フナ・カヘル・バツタノ類ノ形態・解剖
生理・生態
普通ノ鑛物　岩石及土壤
空氣　燃燒　熱
水
樂器　蓄音機

鏡　レンズ
靜電氣
植物及動物
形態　解剖
生理　生態竝ニ分布
進化　系統
有用植物及動物　有害植物及動物
生理及衞生
人體ノ構造
各器官ノ構造及作用
衞生竝ニ普通ノ疾患
鑛物
主要ナル有用鑛物
火成岩　水成岩　變成岩　土壤
地殼構造ノ概要　地史ノ概要
物理
密度及比重

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

固體・液體及氣體ノ性質
比熱
熱ノ作用
大氣ノ乾濕
光度
光ノ反射及屈折
光ノ分散
磁氣
電流ノ强サ　電動力　抵抗
電流ノ作用
感應電流
眞空放電
放射能
力　器械　運動
落體及拋射體
圓運動及廻轉運動
仕事及エネルギー

振動及波動
音波　光波　電波

化學
主ナル非金屬元素及其ノ化合物
主ナル金屬元素及其ノ化合物
主ナル有機化合物
化學量論ノ諸定律
分子量　原子量
化學式及化學方程式
酸　鹽基　鹽
溶液
電解及電離
元素週期律

應用理科
自然物ノ利用
生物ノ蕃殖
品種改良

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

傳染病ト免疫
醸造
酸アルカリ工業　肥料
窯業
冶金　合金
燃料
油脂工業　塗料
纖維　色染
火藥　毒ガス
光學器械
動力機

増課教材

第四學年ヨリ第一種第二種ノ兩課程ヲ分ツ場合
　第一種　毎週七時乃至四時
　第二種　毎週一時乃至二時
第四學年及第五學年
第三學年ヨリ第一種第二種ノ兩課程ヲ分ツ場合
　第一種及第二種　毎週一時乃至二時
第三學年
　第一種　毎週一時乃至四時
　第二種　毎週一時乃至二時
第四學年及第五學年

博物

博物ハ基本教材ニ關聯シテ實驗ヲ課シ又農業・林業・畜産・園藝・水産・工業・生理・衛生等ニ關係アル事項ニ就テ補說スルモノトス

物理及化學

物理及化學ハ基本教材ニ關聯シテ實驗ヲ課シ又理化學工業等ニ關係アル事項ニ就テ補說スルモノトス

注　意

一　本要目ニ掲ゲタル事項ハ土地・季節ノ情況等ニ依リテ便宜斟酌スベシ

二　理科教授ニ於テハ生徒實驗ヲ重ンジ栽培・飼育・採集等ノ實習ヲナサシメ確實ナル理會ヲ得シムルト共ニ努メテ獨創工夫ノ能ヲ養フコトニ留意スベシ

圖畫

圖畫ハ之ヲ自在畫・用器畫ノ二ニ大別ス

自在畫ノ寫生畫及臨畫ニ在リテハ專ラ形象描寫ノ基礎的練習ヲナサシメ考案畫ニアリテハ日常生活上必須ナルモノニ就テ其ノ形狀ト裝飾トヲ工夫セシムルモノトス

用器畫ハ數學トノ聯絡ヲ顧慮シテ之ヲ第三學年以上ニ課シ其ノ應用ニ關スルモノハ各學年ニ於テ必要ニ應ジ之ヲ畫カシムルモノトス

基本科目トシテ第三學年マデ課スル場合ニ於ケル要目ヲ甲トシ第二學年マデ課スルモノヲ乙トス

〔甲〕

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第一學年　毎週一時

自在畫

寫生畫及臨畫

靜物

考案畫

平面圖案

第二學年　毎週一時

自在畫

寫生畫及臨畫

靜物・植物・建築物等

考案畫

應用ヲ主トシタル平面圖案及立體圖案

第三學年　毎週一時

自在畫

寫生畫及臨畫

靜物・植物・動物・人物・建築物・風景等

考案畫

前學年ニ準ズ　毎週一時乃至二時

用器畫

平面幾何畫及其ノ應用

第四學年　毎週一時乃至二時

增課教材

自在畫

寫生畫及臨畫

前學年ニ準ズ

考案畫

前學年ニ準ズ

用器畫

投影畫及其ノ應用

第五學年　毎週一時乃至二時

增課教材

自在畫

寫生畫及臨畫

前學年ニ準ズ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

考案畫
　前學年ニ準ズ
用器畫
　透視畫及其ノ應用
〔乙〕
　第一學年
自在畫
寫生畫及臨畫
　靜物
考案畫
　平面圖案
　第二學年
自在畫
寫生畫及臨畫
　靜物・植物・動物・人物・建築物・風景等
考案畫
　應用ヲ主トシタル平面圖案及立體圖案

毎週一時

毎週一時

自在畫
寫生畫及臨畫
　前學年ニ準ズ
考案畫
　前學年ニ準ズ
用器畫
　平面幾何畫及其ノ應用
　第四學年
　　增課教材
自在畫
寫生畫及臨畫
　前學年ニ準ズ
考案畫
　前學年ニ準ズ
用器畫

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週一時乃至二時

毎週一時乃至二時

投影畫及其ノ應用

第五學年

增課教材

自在畫

寫生畫及臨畫

前學年ニ準ズ

考案畫

前學年ニ準ズ

用器畫

透視畫及其ノ應用

注　意

一　自在畫ハ教授ニ際シ適宜色彩及美ニ關スル事項ヲ授ケ又必要ニ應ジテ透視畫法及陰影畫法ニ注意セシムベシ

二　色彩畫ハ主トシテ第二學年以上ニ於テ之ヲ課シ第一學年ニ在リテハ簡易ナル程度ニ止ムベシ

三　記憶畫及見取畫ハ適宜之ヲ練習セシムベシ

四　成ルベク名作品又ハ其ノ複製ヲ鑑賞セシメテ趣味ノ涵養ニ力ムベシ

五　考案畫及用器畫ニ於ケル應用ハ成ルベク日常生活ニ關係アルモノヲ選ブベシ

音樂

毎週一時乃至二時

本要目ニハ歌曲及樂典ノミヲ擧ゲタリ發聲・音階・音程・拍子・聽音等ノ基本練習ハ便宜歌曲ニ附帶シテ授クベキモノトス

第一學年

歌曲　　毎週一時

單音唱歌　輪唱歌

樂典

樂譜

第二學年

歌曲　　毎週一時

單音唱歌　輪唱歌　重音唱歌

樂典

音程　音階

第三學年

基本教材ノ場合　毎週一時

增課教材ノ場合　毎週一時乃至二時

歌曲

前學年ニ準ジ程度ノ高キモノ

樂典

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

初歩ノ和聲

第四學年

増課教材

歌曲

前學年ニ準ジ程度ノ高キモノ

樂典

初歩ノ樂式　音樂史

第五學年

増課教材

歌曲

前學年ニ準ジ更ニ程度ノ高キモノ

樂典

前學年ニ準ズ

注　意

一　唱歌教授ニハ總テ本譜ヲ用フベシ

二　歌曲ハ歌詞・曲調共ニ國民精神ヲ涵養シ得ル高尚優雅ナルモノヲ選ブベシ

三　歌曲ハ其ノ數多キヲ求メズ十分ニ熟達セシメンコトヲ期スベシ

毎週一時乃至二時

毎週一時乃至二時

四　生徒中變聲期ニ際セルモノニハ唱ハシメザルコトヲ得

作業科

作業科ノ教授事項ハ各學校ニ於ケル事情ヲ考慮シテ之ヲ定ムベキモ今園藝及工作ヲ併セ課スル場合ヲ例示ス

園藝

第一學年

校庭ノ手入

花卉蔬菜ノ手入

養禽

毎週一時

第二學年

校庭ノ手入

花卉蔬菜ノ手入

樹木ノ手入

藥細工・竹細工等

養禽

毎週一時

第三學年

校庭ノ手入

樹木ノ手入

隔週一時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

藁細工・竹細工等　隔週一時
蔬菜栽培
養禽

第四學年

校庭ノ手入
樹木ノ手入　隔週一時
藁細工・竹細工等
蔬菜及果樹ノ栽培
養禽・養兎等
農產物加工
簡易ナル土工

第五學年

校庭ノ手入　隔週一時
樹木ノ手入
藁細工・竹細工等
蔬菜及果樹ノ栽培
養禽・養兎等

農產物加工
簡易ナル土工
造園

工作

第一學年

木工
主要ナル木工具ノ使用法及手入法　毎週一時
簡易ナル木工品ノ製作

第二學年

木工及塗仕上
簡易ナル木工品ノ製作ト其ノ塗仕上　毎週一時
學校備品・校舍・附屬建物・門・揭示場等ノ繕ヒ又ハ塗直シ等

第三學年

金工附木工
主要ナル金工具ノ使用法及手入法　隔週一時
簡易ナル金屬加工品ノ製作及修理
運動具・遊戲具・理科實驗器械等ノ修理又ハ製作

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第四學年　　隔週一時

コンクリート工附木金工

簡易ナルコンクリート工ニ依ル各種ノ設計・布設又ハ修理

學校ノ圖書陳列棚・園藝棚・動物小屋等ノ製作又ハ修理

第五學年　　隔週一時

木金工・塗工・コンクリート工等ノ綜合作業

校庭農園等ノ棚・垣根・門・亭・溫室・物置・農具舍・肥料舍等ノ設計築造又ハ修理

注　意

一　各教授事項ハ常ニ相互ノ聯絡ニ力メ又適宜ニ之ヲ按排シテ授クベシ

二　學校ノ事情ニヨリ便宜洒掃整頓、材料及生產物ノ經理記帳、氣象觀測等ニ從ハシムベシ

三　第三學年以上ニ在リテハ便宜製作ト同時ニ製圖ヲ授クベシ

四　個人作業ト共同作業トヲ適宜ニ混課シ個人作業ニ於テハ教授事項ノ會得ヲ與フルヲ旨トシ共同作業ニ於テハ應用練習ヲ圖リ團體生活ニ慣レシメ一致協力ノ精神ヲ養ハンコトニ力ムベシ

實業

本要目ニ於テハ農業・工業若クハ商業ヲ單獨ニ課スル場合及是等ヲ綜合セル場合ヲ示セリ其ノ他ノ場合ニ於テハ適宜本要目ヲ斟酌シテ教授事項ヲ定ムルモノトス

實業ヲ第四學年ヨリ課スル場合ニ於ケル要目ヲ甲トシ第三學年ヨリ課スル場合ニ於ケル要目ヲ乙トス

〔甲〕　農業

第四學年　　毎週三時乃至五時

耕種

穀菽・蔬菜・花卉・工藝作物ノ栽培　農具

養蠶

第五學年　　毎週三時乃至六時

耕種

果樹ノ栽培　育種

土壤及肥料

畜產

林業

水產

農業經營

農業政策

〔乙〕

第三學年　　毎週三時乃至五時

〔甲〕

耕種	穀菽ノ栽培　農具
養蠶	第四學年
耕種	蔬菜・果樹・花卉ノ栽培
畜産	
林業	
水産	第五學年
耕種	工藝作物ノ栽培　育種
土壤及肥料	
農業經營	
農業政策	
工業	第四學年
工業ノ意義	工業ノ發達　工業ノ種類
工業用材料	
機械製作作業	
木型工　鑄工　鍛工　手仕上　機械仕上等	
	第五學年
動力機械	
各種製造工業	
建築	

〔乙〕

工業ノ意義　工業ノ種類	第三學年
工業用材料	
機械製作作業	
木型工　鑄工　鍛工　手仕上　機械仕上等	
	第四學年
動力機械	

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至六時

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至六時

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至五時

各種製造業
　第五學年
交通機關
建築
土木
　道路　橋梁　水利等
工場經營
我ガ國ノ工業
　商業
〔甲〕
　第四學年
賣買
交通
倉庫
金融
取引所
單式簿記

毎週三時乃至六時

毎週三時乃至五時

保險
外國貿易
商業助成機關
商業ノ經理
複式簿記
〔乙〕
　第三學年
賣買
交通
倉庫
　第四學年
金融
取引所
保險
單式簿記
　第五學年

毎週三時乃至六時

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至六時

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

第二編　本　論

外國貿易
商業助成機關
商業ノ經理
複式簿記
實業（農業・工業・商業ヲ綜合セルモノ）

〔甲〕

第四學年

人生ト實業
作物
養蠶　家畜
農產物　水產物
製造加工
植林
建築　土木
動力ト機械
農業ト工業

第五學年

毎週三時乃至五時

毎週三時乃至六時

工業ノ種類
工產品
商業　商業ト農工業
賣買
金融
交通
保險
倉庫
貿易
企業
我ガ國ノ實業

〔乙〕

第三學年

人生ト實業
作物
家畜
農產物　水產物

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

毎週三時乃至五時

製造加工	
動力	
機械	
農業ト工業	
第四學年	
養蠶	
紡績	
工產品	
商品	
賣買	
金融	
交通	
農工業ト商業	
第五學年	
植林	
建築	
土木	毎週三時乃至五時
保險	
倉庫	
貿易	
企業	
我ガ國ノ實業	毎週二時乃至六時

注意

一　實業ノ教授ハ地方ノ事情ニ順應シ實際生活ニ適切ナラシムベシ

二　實驗・實習・見學ヲ重ンジ勤勞ヲ尊重スル精神ヲ養フコトニ力ムベシ

三　工業ノ實習ハ別ニ要目ヲ示サズ各地方ノ情況ニ適切ナルモノヲ選定シテ之ヲ課スベシ

四　簿記ヲ教授スルニハ記帳練習ニ重ヲ置キ例題ハ實際取引ニ準據セシムベク且計算ハ珠算ニ依ラシムベシ

昭和六年三月二十七日文部省令第七號を以て左の如く高等學校規程中に改正が行はれた。

高等學校規程中左ノ通改正ス

第一條　尋常科ノ學科目ハ修身、公民科、國語漢文、外國語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、音樂、作業科、體操トス

外國語ハ英語、獨語又ハ佛語トス

第二條　各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

學年＼學科目	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	一	一	一	一
公民科			一	一
國語漢文	七	七	六	六
外國語	六	七	六	六
歷史	三	三	三	三
地理				
數學	四	四	四	四
理科	二	二	四	五
圖畫	一	一	一	一
音樂	一	一		
作業科	一	一	一	一
體操	五	五	五	五
計	三二	三二	三二	三三

作業科、圖畫、音樂等ノ實習及體操ハ前表ノ教授時數ヲ適宜增加シテ之ヲ課スルコトヲ得

附　則

本令ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ本令ノ規定ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

作業科ハ本令施行後五年以內之ヲ缺クコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ作業科ヲ缺キタル學校ニシテ之ヲ置クニ至リタル際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ其ノ教授時數ハ適宜之ヲ他ノ學科目ニ配當スヘシ

第三項ノ規定ニ依リ作業科ヲ缺キタル學校ニ於テハ其ノ教授時數ハ適宜之ヲ他ノ學科目ニ配當スヘシ

右は前に述べた中學校令施行規則の改正と同一の精神に出でたものである。

次に男子の高等普通教育及最高等普通教育の施設狀況に就て述べると、

水戸、山形及佐賀に高等學校を設置することは寺內內閣の時に計畫の端を發し、次で原內閣の時に豫算に計上せられたもので所謂高等教育機關大擴張計畫以前の分に屬するものであるが、其設立準備が整つたので大正九年四月勅令第百十號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り水戸高等學校、山形高等學校及佐賀高等學校が設立せられ、渡邊又次郎が水戸高等學校長に、三輪田輪三が山形高等學校長に、生駒萬治が佐賀高等學校長に任ぜられた。右三校の授業開始は大正九年九月からであつた。何れも生徒定員六百人十五學級で水戸は文科九學級理科六學級、山形は文科六學級理科九學級、佐賀は文科六學級理科九學級であつた。

大正九年十一月勅令第五百五十一號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り、弘前高等學校及松江高等學校が設立せられ秋田實が弘前高等學校長に、小松倍一が松江高等學校長に任ぜられた。授業開始は大正十年四月からであつた。これ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

は恰も高等學校帝國大學を通じて學年開始期が九月から四月に改められた際である。

二校共に生徒定員六百人十五學級で弘前は文科九學級理科六學級、松江は文科六學級理科九學級であつた。

右の二校は原內閣の時の高等教育機關大擴張計畫に依て設けられたものである。

大正十年十一月勅令第四百三十二號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り東京高等學校、大阪高等學校及福岡高等學校が設立せられ、湯原元一が東京高等學校長に、野田義夫が大阪高等學校長に、吉岡鄕甫が浦和高等學校長に、秋吉音治が福岡高等學校長に任ぜられた。

授業開始は何れも大正十一年四月からであつた。

東京高等學校のみは七年制の學校であつて生徒定員は高等科四百八十人文科六學級理科六學級尋常科三百二十人八學級であつた。

大阪高等學校は生徒定員六百人文科六學級理科九學級、浦和高等學校は生徒定員六百人文科九學級理科六學級、福岡高等學校は生徒定員六百人文科九學級理科六學級であつた。

右四校は高等教育機關擴張計畫に依て設けられたものである。

大正十一年八月勅令第三百九十一號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り、靜岡高等學校及高知高等學校が設立せられて金子銓太郎が靜岡高等學校長に、江部淳夫が高知高等學校長に任ぜられた。

授業開始は何れも大正十二年四月からであつた。

兩校共に生徒定員六百人文科九學級理科六學級であつた。

右の二校は何れも高等教育機關擴張計畫に依て設けられたものである。

大正十二年十二月勅令第五百一號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り、姬路高等學校及廣島高等學校が設立せられて小松原隆二が姬路高等學校長に、十時彌が廣島高等學校長に任ぜられた。

授業開始は何れも大正十三年四月からであつた。

兩校共生徒定員六百人文科九學級理科六學級であつた。

右は何れも高等教育機關擴張計畫に依て設けられたもので、此二校を最後として十校增設の計畫は全部完成した譯である。

以上官立高等學校の外公立私立の高等學校に就て述べると、

公立高等學校としては、

富山縣立高等學校が大正十二年十月富山に、大阪府立浪速高等學校が大正十五年三月大阪に、東京府立高等學校が昭和四年二月東京に何れも設立を認可せられた。

私立高等學校としては、

武藏高等學校が大正十年十二月東京に、甲南高等學校が大正十二年一月神戸に、成蹊高等學校が大正十四年二月東京に、成城高等學校が大正十五年三月東京に何れも設立を認可せられた。

公立私立の高等學校は何れも七年制のものである。

第五款　女子高等普通教育(高等女學校教育)

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

大正九年七月勅令第百九十九號を以て高等女學校令中に改正が行はれ、又同月文部省令第十五號を以て高等女學校令施行規則中に改正が行はれたが、これは學則改革の一部として臨時教育會議の決議に基きて爲されたものであつて、學制改革の問題と關聯して便宜前章女子高等普通教育の款に於て之を述べたから此處には之を省略する。

大正十年四月八日文部省令第二十四號を以て左の如く高等女學校高等科入學資格試驗規程が定められた。

高等女學校高等科入學資格試驗規程左ノ通定ム

高等女學校高等科入學資格試驗規程

第一條　高等女學校令施行規則第四十二條ノ三ノ高等女學校高等科入學資格試驗ヲ受ケントスル者ハ年齡滿十七年以上ノ女子ニシテ身體健全、品行方正且現ニ高等女學校ニ在學セサル者タルヘシ

第二條　高等女學校高等科入學資格試驗ハ文部大臣ノ指定シタル高等女學校ニ於テ便宜之ヲ行フ

第三條　試驗ハ修業年限五年又ハ三年ノ高等女學校ノ必須各學科目ニ就キ其ノ卒業ノ程度ニ依リ之ヲ行フヘシ

第四條　高等女學校ニ於テハ試驗ニ合格シタル者ニ合格證書ヲ交付スヘシ

第五條　試驗ノ問題、答案及成績表ハ五年以上之ヲ保存スヘシ

第六條　高等女學校ニ於テハ本令ノ試驗ニ付試驗手數料ヲ徵收スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年三月十六日文部省告示第百六十七號を以て左の如く高等女學校高等科入學資格試驗を行ふ高等女學校が指定せられた。

高等女學校高等科入學資格試驗規程第二條ニ依リ高等女學校高等科入學資格試驗ヲ行フ高等女學校ヲ左ノ通定ム

一、修業年限五箇年ノ道府縣立高等女學校

大正十三年十月三十日文部省令第二十七號を以て左の如く高等女學校令施行規則中に改正が行はれた。

高等女學校令施行規則中左ノ通改正ス

第三十條ニ左ノ一項ヲ加フ

特別ノ事情アル場合ニ於テハ公立學校ニ在リテハ管理者、私立學校ニ在リテハ設立者ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ當分ノ內第一項ノ規定ニ依ル員數ヲ減スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三十條中新に加へられた第二項は當分の內規定の教員數を減じ得ることを規定したものである。

大正十五年五月二十七日文部省令第二十五號を以て左の如く高等女學校令施行規則中に改正が行はれた。

高等女學校令施行規則中左ノ通改正ス

第十三條第二項中「體操、教練及遊戲」ヲ「體操、教練、遊戲及競技」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右の改正に依て體操中に新に競技が加へられたのであつた。

昭和二年十一月二日文部省令第二十二號を以て左の如く高等女學校令施行規則中に改正が行はれた。

高等女學校令施行規則中左ノ通改正ス

第二十六條中「天長節祝日及一月一日」ヲ「天長節、明治節及一月一日」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は昭和の御代になつてからは天長節祝日がなくなり又新に明治節が祝日の中に加へられたが故である。

昭和二年十一月二十二日文部省令第二十七號を以て左の如く高等女學校令施行規則中に改正が行はれた。

高等女學校令施行規則中左ノ通改正ス

第二十四條第二項中「試驗及」ヲ削ル

第三十五條第一項第五號ヲ左ノ如ク改ム

五　入學考査、學業成績考査ニ關スル書類

第四十一條中「日本歷史」ヲ「國史」ニ、「試驗」ヲ「檢定」ニ改ム

第四十二條中「試驗」ヲ削ル

第四十三條第二項ヲ左ノ如ク改ム

前項入學者ノ學力ハ當該學年ノ程度ニ於テ之ヲ檢定スヘシ

第四十四條中「試驗ニ依ラスシテ」ヲ削ル

第四十五條中第三項ヲ削ル

第四十六條　各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ

附　則

本令ハ昭和三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

右は文部省に於て男子高等普通教育女子高等普通教育の學校及中等程度の實業學校を通じて入學試驗進級試驗及卒業試驗を廢止せしむる方針を取つたが故である。（男子高等普通教育の款參照）

前記高等女學校に於ける試驗制度の改正に關し、昭和二年十一月二十六日各地方長官に對し文部省普通學務局長より左記發普三二六號通牒を發した。

中學校高等女學校ノ學則變更ニ關スル件通牒

本月二十二日文部省令第二十六號同第二十七號ヲ以テ中學校令施行規則並高等女學校令施行規則中ニ改正ヲ加ヘラレ又文部省訓令第十九號ヲ以テ右ニ關スル訓令ヲ發セラレタルニ付テハ從來中學校高等女學校ノ入學者選拔ニ關シ本省ノ認可ヲ得テ徵收セル入學試驗料等ハ自今入學考査料ト見做シ更メテ認可ノ手續ヲ要セサルニ付御了知相成度

尙學則中生徒ノ入學、課程ノ修了及卒業ノ認定ニ關スル事項ノ改正報告書ハ便宜貴管内分ヲ一括シテ御送附相成度

高等女學校令施行規則中左ノ通改正ス

昭和七年二月十九日文部省令第五號を以て左の如く高等女學校令施行規則中の改正が行はれた。

第一條第一項中「修身、」ノ下ニ「公民科、」ヲ加ヘ第五項中「法制及經濟、」ヲ削ル

第二條ノ二　公民科ハ國民ノ政治生活、經濟生活竝ニ社會生活ヲ完ウスルニ足ルヘキ智德ヲ涵養シ殊ニ遵法ノ精神ト共存共榮ノ本義トヲ會得セシメ公共ノ爲ニ奉仕シ協同シテ事ニ當ルノ氣風ヲ養ヒ以テ善良ナル立憲自治ノ民タルノ素地ヲ育成スルヲ以テ要旨トス

公民科ハ憲政自治ノ本義ヲ明ニシ日常生活ニ適切ナル法制上、經濟上竝ニ社會上ノ事項ヲ授クヘシ

第十五條　削除

「第十五條ノ二」ヲ「第十五條」ニ、「第十五條ノ三」ヲ「第十五條ノ二」ニ改ム

第十六條甲號表中修身ノ項ノ次ニ「

公民科				
二八	二九	二九		

」ノ項ヲ加ヘ計ノ項ヲ「

計	
二八	

」ニ改ム

第十六條乙號表及第十九條甲號表中修身ノ項ノ次ニ「

公民科				
二八	二八	二九	二九	

」ノ項ヲ加ヘ計ノ項ヲ「

計	
二八	

」ニ改ム

第十六條丙號表及第十九條乙號表中修身ノ項ノ次ニ「

公民科				
二八	二九	二九		

」ノ項ヲ加ヘ計ノ項ヲ「

計	
二八	

」ニ改ム

第十七條第一項中「修身、」ノ下ニ「公民科、」ヲ加ヘ「第三項中「、法制及經濟」ヲ削ル

第十八條第二項中「第二條、」ノ下ニ「第十五條ノ三」ヲ「第十五條ノ二」ニ改ム

第十九條丙號表中修身ノ項ノ次ニ「

公民科				
二	二	二		

」ノ項ヲ加ヘ計ノ項ヲ「

計		
二九	二九	

」ニ改ム

附　則

本令ハ昭和七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ仍從前ノ規定ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

同日文部省は北海道廳、府縣に對する文部省訓令第二號を以て左の如く高等女學校令施行規則中の改正に依り新に公民科を加へた趣旨を明にした。

今般文部省令第五號ヲ以テ高等女學校令施行規則中ニ改正ヲ施シ法制及經濟ヲ廢シ新ニ公民科ヲ加ヘタリ仍テ玆ニ改正ノ要旨及施行上特ニ注意ヲ要スル事項ノ大要ヲ示スベシ

時勢ノ進運ニ應ジ男女ヲ問ハズ一般國民ニ公民的教養ヲ與フルノ必要ヲ認メ嚮ニ高等女學校ニ於テモ法制及經濟ノ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

學科目ヲ課シ得ルコトト爲シタルガ之ヲ實績ニ徴スルニ其ノ教授ガ概シテ法制及經濟ノ專門的知識ヲ授クルニ傾キ且實際生活ニ適切ナラザル嫌アリシニ鑑ミ今回法制及經濟ヲ廢シ新ニ公民科ヲ設ケテ其ノ趣旨ヲ明ニシ更ニ之ヲ必修セシムルコトトシ以テ公民的教養ノ徹底ヲ圖ルコトトセリ

公民科ニ於テハ法制上、經濟上及社會上ノ事項ニ關シ之ガ事實的說明ヲ爲シ以テ道義ニ歸結セシムルヲ旨トシ修身、國語、歷史、地理、家事等ノ諸學科目ト聯絡裨補シテ其ノ教授ノ效果ヲ完ウセンコトヲ期スベキノミナラズ訓練トシテ修身ト公民科トハ各之ヲ獨立ノ學科目トナシタルモ斯ノ兩學科目ハ極メテ密接ナル關係アルモノナルヲ以テ修身ヲ兼ネ修メテ之ガ知識ノ豐富ナル教員ヲシテ公民科ノ教授ニ當ラシムルハ極メテ望マシキコトニ屬ス

相竢チテ公民的德操ノ涵養ニ力メ又特ニ女子ノ德操ニ顧慮シ且女子ノ地位及其ノ任務ニ適應セシメンコトヲ要ス而シテ修身ト公民科トハ各之ヲ獨立ノ學科目トナシタルモ斯ノ兩學科目ハ極メテ密接ナル關係アルモノナルヲ以テ修身ヲ兼ネ修メテ之ガ知識ノ豐富ナル教員ヲシテ公民科ノ教授ニ當ラシムルハ極メテ望マシキコトニ屬ス

地方長官ハ克ク改正ノ趣旨ヲ體シテ學校當事者ヲ督勵シ以テ高等女學校ニ於ケル公民教育ノ實績ヲ擧ゲシメンコトヲ期セラルベシ

同日又文部省は北海道廳、府縣に對する文部省訓令第三號を以て左の如く高等女學校及實科高等女學校の教授要目中に改正を加へ公民科の教授要目を定めた。

高等女學校及實科高等女學校教授要目中左ノ通改正ス

目次中「修身」ノ次ニ「公民科」ヲ加フ

修身ノ要目ノ次ニ左ノ要目ヲ加フ

公　民　科

高等女學校

第四學年

毎週一時

人ト社會

人ト社會　共同生活ト共存共榮　國家ノ重要意義

我ガ家

家庭生活　我ガ國ノ家族制度　戶主・家族　親族・婚姻　戶籍・相續

一家ノ生計

一家ノ收入　生計費　勤儉貯蓄　保險　財產

職業

職業ト人生　職業ノ選擇　勤勞ト研究　職業ト道德

教育

人ト教育　家庭教育　學校教育・義務教育　社會教育

社會教育ヲ教授スル際新聞雜誌等ノ事項ニ說及ブベシ

神社

神社　敬神崇祖

宗教

宗教　信教ノ自由

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

公安
　警察ト公衆　災害防止　公衆衛生
地方自治
　地方自治ノ沿革　地方自治ノ精神　我ガ鄉土
　我ガ鄉土ヲ教授スル際愛鄉愛國ノ事ニ說及ブベシ
市町村
　市町村ノ自治　公民　議員ノ選擧　市町村會　市役所・町村役場　市町村ノ財政　市町村ノ財產
府縣
　府縣ノ自治　府縣廳　我ガ府縣
農村ト都市
　農村ト都市　農村生活　農村ノ開發　都市ノ生活　都市ノ改善
產業
　產業ト國民經濟　農業　工業　商業　其ノ他ノ產業
　農業・工業・商業等ノ任務・要素及企業形態、產業組合・產業助成機關等ニ說及ブベシ
貨幣及金融
　貨幣　物價　信用　金融機關
交通
　交通機關　交通ト文化
　交通道德ノ事ニ說及ブベシ

第五學年

國家
　人類ト國家　國家ノ要素　國體ト政體　我ガ國家
皇室ト臣民
　天皇　皇位繼承　皇室典範　皇室及皇族　皇室ト臣民
　詔勅ノ事ニ說及ブベシ
立憲政治
　立憲政治　帝國憲法　臣民ノ權利義務
帝國議會
　帝國議會　議員ノ選擧　議會ノ作用　政黨
國務大臣　樞密顧問
　國務大臣　內閣　樞密顧問
行政官廳
　行政官廳　行政官廳ノ種類　官吏
國法

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで　毎週一時

國法　國法ノ種類　法ノ尊重　法ト道徳
裁判所
司法　裁判所　訴訟・調停　陪審
國防
國防　兵役　我ガ國ノ軍備　國防ト國民
國交
國交　條約　國際協同　國交ト國民
財政
歳入ト歳出　租税　官業　公債
我ガ國ノ産業
我ガ國ノ産業　我ガ國ノ貿易　資源ノ開發
人口ト國土
人口ト國土　拓殖ト移住　海外發展
人口ト國土ノ教授ノ際我ガ領土、租借地、委任統治ノ地域等ノ事ニ說及ブベシ
社會改善
社會問題　社會政策　社會事業　社會改善
世界ト日本

人類文化ノ發達　文化史上ノ我ガ國ノ地位　我ガ國ノ使命

修業年限四年ノモノニ在リテハ本要目中第四學年ニ揭ゲクル事項ヲ第三學年ニ、第五學年ニ揭ゲタル事項ヲ第四學年ニ、修業年限三年ノモノニ在リテハ本要目中第四學年ニ揭ゲタル事項ヲ第二學年ニ、第五學年ニ揭ゲタル事項ヲ第三學年ニ配當シテ教授スベシ

實科高等女學校

修業年限四年ノモノ　毎週一時

第三學年及第四學年

高等女學校第四學年及第五學年ニ準ズ

修業年限三年ノモノ　毎週一時

第二學年及第三學年

高等女學校第四學年及第五學年ニ準ズ

修業年限二年ノモノ　毎週一時

第一學年及第二學年

高等女學校第四學年及第五學年ニ準ズ

注　意

一　本要目ハ法制上、經濟上及社會上ノ事項ニ關シ日常生活ノ關係ヨリ其ノ教材ヲ排列シ常ニ實踐上ノ問題ニ歸結セシメンコトヲ期シタリ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

教材中我ガ家、我ガ鄉土、我ガ府縣、我ガ國家等ノ題目ヲ選ビタルハ生徒ノ親熟シタル日常生活ノ事項トシテ之ヲ取扱ハンガ爲ナリ

二　公民科ノ教授ハ事例ヲ成ルベク日常生活ニ於ケル經驗ニ求メ女子ノ母タリ妻タルノ地位、家庭ニ於ケル任務等ニ留意シ理論ニ偏セズシテ實際ヲ主トシ且道德的情操ノ陶冶ニ力メ特ニ修身トノ聯絡ニ留意スベシ

三　本要目ハ土地ノ情況等ニ應ジ適宜斟酌シテ運用スベシ

第六款　專門教育

第一項　概　說

大正十年四月九日左記文部省令第二十六號が發せられた。

朝鮮、臺灣、樺太又ハ關東州ニ於ケル官立公立ノ中學校若ハ修業年限四年以上ノ高等女學校ニ於テ專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依リ行フ試驗檢定ハ專門學校ノ入學ニ關シ明治三十六年文部省令第十四號ニ依ル試驗檢定ト同一ノ效力ヲ有ス

大正十一年三月十七日文部省令第十號を以て左の如く大正十年文部省令第二十六號中に改正が行はれた。

大正十年文部省令第二十六號中「中學校若ハ修業年限四年以上ノ高等女學校」ヲ「中學校、高等普通學校、修業年限四年以上ノ高等女學校若ハ女子高等普通學校」ニ改ム

附　則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年文部省令第二十六號に於ては、朝鮮に於ける官立公立の中學校及高等女學校に於て行ふ試驗檢定は、專門學校の入學に關し、明治三十六年文部省令第十四號に依る試驗檢定と同一の效力を有することを定めて居たのであるが、今回は朝鮮の高等普通學校及女子高等普通學校（共に朝鮮人の爲にする學校）に於て行ふ試驗檢定にも同一の效力を有せしむることとしたのである。

前既に述べた如く明治三十六年に定められた專門學校入學者檢定規程に依れば、文部大臣に於て專門學校の入學に關し、中學校若は修業年限四箇年の高等女學校の卒業者と同等以上の學力を有するものと指定したる者は、無試驗檢定に依り專門學校に入學し得るのであるが、其指定には一般專門學校の入學に關して指定する所謂一般指定と、或種の專門學校のみの入學に關して指定する所謂限定指定との二種があり、中等程度の實業學校の卒業者には最初は實業專門學校の入學のみに關する限定指定が與へられ、從つて實業學校卒業者は彼の中學校卒業專門學校入學に關する試驗檢定合格若は一般專門學校入學に關する指定を以て入學資格とする專門學校や高等學校には入學する資格を有しなかつたのである。此の如く文部當局が實業學校卒業者に對して容易に一般指定を與へなかつたのは、一は之が爲に實業學校の教育をして其本來の目的より離れて、上級學校に對する準備教育たるに傾かしむるが如き惡結果を生ずるを恐れたが爲であつた。尙ほ之と同樣の事情は明治四十三年以來制度として認められた高等女學校實科及實科高等女學校に關しても存在したのであつて、此等學校の卒業者には專門學校の入學に關し限定指定すら與へられなかつた。然るに指定に關する實業學校及實科高等女學校方面よりの希望は次第に熱烈となり、且指定を與ふるが爲に學校本來の目的を害するが如き處な

き事情も明となつたので、大正十三年三月十二日左記文部省告示第百九號が發せらるるに至つた。

專門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

一、男子實業學校卒業者

但シ尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限五年、高等小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限三年若ハ之ト同等以上ノ實業學校ノ卒業者ニ限ル

一、修業年限二年ノ高等女學校高等科ニ入學スルコトヲ得ル者

一、實科高等女學校及高等女學校實科卒業者

一、女子實業學校卒業者

但シ尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限四年、高等小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限二年若ハ之ト同等以上ノ實業學校ノ卒業者ニ限ル

此の如くして男子實業學校卒業者、女子實業學校卒業者竝に實科高等女學校及高等女學校實科卒業者には何れも一般指定が與へらるることとなつた。其他修業年限二箇年の高等女學校高等科に入學することを得る者も亦同一の特典に浴したのであつた。

大正十三年十月十一日文部省令第二十二號を以て左の如く專門學校入學者檢定規程が改正せられた。

專門學校入學者檢定規程左ノ通改正ス

專門學校入學者檢定規程

第一條　專門學校ノ本科ニ入學セントスル者ニシテ中學校若ハ修業年限四年以上ノ高等女學校ヲ卒業セサル者ハ本令ニ依リ學力ノ檢定ヲ受クヘシ

第二條　檢定ヲ分チテ試驗檢定及無試驗檢定トス

第三條　試驗檢定ハ每年少クトモ一回之ヲ行フ

試驗檢定ノ出願期限、試驗施行ノ期日及場所ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ告示ス

第四條　試驗檢定ノ學科目及其ノ程度ハ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校ノ各學科目及其ノ卒業程度トス但シ中學校若ハ高等女學校ニ於テ加除シ又ハ課セサルコトヲ得ル學科目ハ之ヲ省ク

第五條　試驗檢定ヲ受ケントスル者ハ受驗願書（第一號書式）ニ左ノ書類ヲ添ヘ受驗地ノ地方廳ヲ經由シ文部大臣ニ出願スヘシ

一　履歷書（第二號書式）

二　戸籍抄本

三　寫眞（手札形トシ出願前三月以內ニ脫帽ニテ撮影シタルモノニシテ裏面ニ撮影年月日本籍氏名ヲ記載スヘシ）

四　第七條第二項ニ依ル證明書ノ寫又ハ大正七年文部省令第三號第六條第二項ニ依ル證明書ノ寫

五　第八條ノ資格ヲ證明スル書面

第六條　試驗檢定ヲ受ケントスル者ハ手數料トシテ金七圓ヲ納付スヘシ

第七條　試驗檢定ニ合格シタル者ニハ合格證書（第三號書式）ヲ交付ス

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

試驗檢定ヲ受ケタル者ニシテ之ニ合格セサルモ受驗學科目中合格點ヲ得タルモノアルトキハ其ノ證明書（第四號書式）ヲ交付ス

前項ノ證明書ヲ有スル者ニシテ試驗檢定ヲ出願シタルトキハ當該學科目ノ試驗ヲ免除ス

前項ノ規定ハ大正七年文部省令第三號第六條第二項ニ依ル證明書ヲ有スル者ニ付之ヲ準用ス

第八條　試驗檢定ノ學科目中一科目又ハ數科目ニ就キ中學校若ハ修業年限四年以上ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト認ムル者ニ對シテハ當該學科目ノ試驗ヲ免除ス

第九條　合格證書ヲ有スル者其ノ氏名本籍ヲ變更シ又ハ合格證書ヲ亡失毀損シタルトキハ其ノ書換若ハ再交付ヲ出願スルコトヲ得

前項ニ依リ合格證書ノ書換若ハ再交付ヲ出願スル者ハ手數料トシテ金一圓ヲ納付スヘシ

第十條　試驗ニ關シ不正ノ行爲アリタル者ニ對シテハ其ノ試驗ヲ停止ス試驗後發覺シタルトキハ既ニ交付シタル合格證書又ハ證明書ハ其ノ效力ヲ失フ

第十一條　無試驗檢定ハ當該專門學校ニ於テ入學ノ際之ヲ行フ

無試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ハ文部大臣ニ於テ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定シタル者ニ限ル

前項ノ指定ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十二條　本令ニ依リ納付スヘキ手數料ハ收入印紙ヲ用ヰ之ヲ願書ニ貼付スヘシ其ノ既ニ納メタル後ハ何等ノ事由アルモ之ヲ還付セス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ專門學校入學者試驗檢定施行ニ關スル手續ヲ開始シタルモノニ在リテハ當該試驗檢定ニ關シ仍從前ノ規程ニ依ル

（書式）略

右の專門學校入學者檢定規程の改正に關して特に注意すべきは試驗檢定に關することである。明治三十六年に制定せられた專門學校入學者檢定規程の第三條には試驗檢定は官立公立の中學校若は修業年限四箇年以上の高等女學校に於て便宜之を行ふことを規定し、第四條には試驗檢定の學科目及其程度は中學校若は修業年限四箇年の高等女學校の各學科目及其卒業の程度とすることを規定して居る。試驗は官立公立の中學校若は高等女學校に於て便宜之を行ふのであるから、之を行ふと否とは全く學校の自由であつて必ず毎年之を行ふものとは限らない。又試驗の學科目及其程度は中學校若は高等女學校の各學科目及其卒業の程度であつて、最下學年から最上學年までの全部の學科目を一時に試驗するのであるから、餘程の秀才に非ざれば之に合格することは困難である。試驗の施行が不確實である上に、右の如き難試驗であるから受驗者の苦痛は一通ではない。此試驗は畢竟禁止試驗に外ならぬといふ不平の起るのも、全く無理ならぬ次第であつた。かくては此制度を設けた精神を沒却するに等しいものであるので、今回は規定を改め試驗は國家試驗として文部省に於て統一して之を行ひ、而して毎年少くとも一回は之を施行することとし（第三條）、又中學校若は高等女學校の全科目を一時に受驗するを要せず幾回かに分ちて順次之を受くるを得るものとし（第七條）、又他の方面に於て其學力を認め得る者に對しては或學科目の試驗を免除するの規定（第八條）をも設けた。即ち新規定は頗る適切穩當なる改正

であり、受驗者に對する福音とも稱すべきものであつた。舊制度の時代に極めて少數に過ぎなかつた受驗者が、今日數千の多數に上るに至つたことは、改正の效果を最雄辯に物語るものである。

同日左記文部省告示第三百七十四號が發せられた。

專門學校入學者檢定規程第八條ニ依リ左記ノ通學科目ノ試驗ヲ免除ス

資格	試驗免除學科目
高等試驗令第七條ノ試驗合格者	國語、漢文、歷史、地理、數學、物理、化學
中學校第四學年修了者及高等學校高等科入學資格試驗合格者	博物
教員免許令ニ依リ授與セラレタル教員免許狀所有者	教員免許狀ニ記載シタル學科目
男子ニシテ小學校本科正教員免許狀所有者	英語ヲ除クノ外ノ學科目
小學校專科正教員免許狀所有者	免許狀ニ記載シタル學科目

同日又左記文部省告示第三百七十五號が發せられた。

專門學校入學者檢定規程ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

一小學校本科正教員免許狀所有者
但シ男子ニ在リテハ英語ニ付小學校本科正教員試驗檢定ニ合格シタル者又ハ英語ニ付小學校專科正教員免許狀ヲ有スル者ニ限ル

府縣師範學校の卒業者には既に初より一般專門學校の入學に關する指定を與へて居るのであるから、此處に所謂小學校正教員免許狀所有者とは師範學校卒業者以外卽ち檢定に依つて免許を得たる者を意味するのである。

大正十三年十二月六日文部省令第三十一號を以て左の如く專門學校入學者檢定規程第十一條に依る指定に關する規則が定められた。

專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關スル規則左ノ通定ム

第一條　專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關スル規則

專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關スル規則

等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トシテ文部大臣ノ指定ヲ受ケントスルトキハ學校ノ管理者又ハ設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ申請スヘシ

一　目的
二　名稱
三　位置
四　學校ノ沿革

五　學　則

六　生徒定員

七　校地、校舍及寄宿舍ノ圖面竝其ノ所有ノ區別

八　設立者ノ履歷

九　學校長、學校長ナキトキハ其ノ學校代表者ノ履歷竝教員ノ氏名、資格、學業經歷、擔任學科及專任兼任ノ區別

十　現在生徒ノ學年及學級別員數

十一　卒業者ノ員數及卒業後ノ狀況

十二　經費及維持ノ方法

十三　教科書目錄

十四　參考書、教授用器具、機械、模型及標本目錄

十五　學校ノ資產目錄

前項第七號ノ校地ニ關スル圖面ニハ面積、地質及附近ノ情況ヲ記載シタル圖面竝飲料水ノ定性分析表ヲ添付スヘシ

第一項第八號ノ設立者カ法人ナルトキハ其ノ定款又ハ寄附行爲ヲ添付スヘシ

第二條　指定ヲ受ケタル學校ノ名稱、位置、學則、生徒定員及維持ノ方法ヲ變更セントスルトキハ管理者又ハ設立者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ特別ノ規定ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受ケ又ハ文部大臣ニ開申スヘキ事項ニ關シテハ各其ノ規定ニ依ル

指定ヲ受ケタル學校ノ設立者ヲ變更セントスルトキハ前項ノ規定ニ準シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三條　指定ヲ爲スヘキ學校ハ左ノ各號ノ一ニ該當シ其ノ管理及維持ノ方法確實ニシテ相當ノ教員及設備ヲ具ヘ成績優良ナルモノニ限ル

一　男子ノ學校ニ在リテハ尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限三年又ハ之ト同等以上ノ學校

二　女子ノ學校ニ在リテハ尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年限二年又ハ之ト同等以上ノ學校

第四條　文部大臣又ハ地方長官ハ必要ト認メタルトキハ所屬吏員ヲシテ指定ヲ受ケタル學校ノ試驗ニ立會ハシメ又ハ試驗問題及其答案ヲ查閱セシムルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テ試驗問題又ハ試驗ノ方法不適當ト認メラルヽモノアルトキハ當該官吏ハ其ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第五條　中學校令施行規則第三十四條、第三十九條第一項、第四十八條、第五十一條及高等女學校令施行規則第三十五條、第三十九條、第四十九條、第五十一條ノ規定ハ指定ヲ受ケタル學校ニ關シ之ヲ準用ス

第六條　指定ヲ受ケタル學校ニシテ本令ニ違背シ又ハ其ノ成績不良ナリト認メタルトキハ文部大臣ハ其ノ指定ヲ取消スコトアルヘシ

第七條　本令ニ依リ文部大臣ニ提出スヘキ書類ハ地方長官ヲ經由スヘシ但シ文部大臣ノ所管ニ屬セサル學校ニ付テハ

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

ハ此ノ限ニアラス

附　則

第八條　本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第九條　本令施行以前ニ爲シタル指定ハ之ヲ本令ニ依リ爲シタル指定ト看做ス

大正十四年六月十七日文部省令第三十二號を以て左の如く大正十年文部省令第二十六號中に改正が行はれた。

大正十年文部省令第二十六號中左ノ通改正ス

「專門學校ノ入學ニ關シ明治三十六年文部省令第十四號」ヲ「大正十三年文部省令第二十二號」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年文部省令第二十六號は本項に於て既に述べた通朝鮮、臺灣、樺太又は關東州に於て專門學校入學者檢定に關する規程に依り行ふ試驗檢定は、專門學校の入學に關し明治三十六年文部省令第十四號專門學校入學者檢定規程に依る試驗檢定と同一の效力を有することを規定したものである。然るに明治三十六年文部省令第十四號は、前述べた如く大正十三年文部省令第二十二號を以て全部改正せられたので、之に基き今回右の如く大正十年文部省令第二十六號中の文字を改めたのである。

大正十四年九月二日文部省令第三十六號を以て左の如く專門學校入學者檢定規程中に改正が行はれた。

專門學校入學者檢定規程中左ノ通改正ス

第十條　試驗ニ關シ不正ノ行爲アリタル者ニ對シテハ其ノ試驗ヲ停止シ尙期間ヲ定メテ試驗ヲ受ケシメサルコトアルヘシ

大正七年文部省令第三號高等試驗令第七條及第八條ニ關スル件第八條ニ依リ試驗ヲ停止セラレタル者ハ其ノ停止セラレタル期間本令ノ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

試驗ニ關シ不正ノ行爲アリタルトキハ既ニ交付シタル合格證書又ハ證明書ハ其ノ效力ヲ失フ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十五年一月十六日文部省告示第六號を以て左の如く大正十三年文部省告示第三百七十五號中に改正が行はれた。

大正十三年文部省告示第三百七十五號中左ノ通改正ス

但書中「試驗檢定」ヲ「ノ檢定」ニ改ム

大正十三年文部省告示第三百七十五號は前に述べた如く小學校本科正教員免許狀所有者に對し、一般專門學校の入學に關し中學校若は修業年限四年の高等女學校の卒業者と同等の學力を有するものと指定し、但し男子に在つては英語に就き小學校本科正教員試驗檢定に合格したる者又は英語に就き小學校專科正教員免許狀を有する者に限ると規定したるものである。今回は之を改め英語に就き小學校正教員試驗檢定に合格したる者のみにあらず無試驗檢定に合格したる者にても可なりとしたのである。

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

大正十五年一月二十七日文部省令第五號を以て左の如く大正十年文部省令第二十六號が改正せられた。

大正十年文部省令第二十六號左ノ通改正ス

朝鮮總督、臺灣總督、樺太廳長官又ハ關東長官ノ定メタル專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依リ行フ試驗檢定ハ大正十三年文部省令第二十二號ニ依ル試驗檢定ト同一ノ效力ヲ有ス朝鮮、臺灣、樺太又ハ關東州ニ於ケル官立公立ノ中學校、高等普通學校、修業年限四年以上ノ高等女學校若ハ女子高等普通學校ニ於テ專門學校入學者檢定ニ關スル規程ニ依リ行ヒタル試驗檢定ニ付亦同シ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十年文部省令第二十六號は朝鮮、臺灣、樺太又は關東州に於ける官公立の中學校若は修業年限四箇年以上の高等女學校に於て、專門學校入學者檢定に關する規程に依り行ふ試驗檢定は、明治三十六年文部省令第十四號に依る試驗檢定と同一の效力を有することを規定したものである。然るに前に述べた如く大正十三年文部省令第二十二號を以てする明治三十六年文部省令第十四號の改正に依り、檢定試驗は從來の如く所謂官立公立の中學校若は高等女學校に於て行ふ試驗にはあらずして文部省自ら行ふ國家試驗となり、其後朝鮮臺灣其他の外地に於ても亦之に倣つて檢定試驗を總督又は長官の行ふ國家試驗に改めたのであつた。此の如く內地に於ても外地に於ても制度が變つたので、今回右の如く規程を改め外地の國家試驗たる檢定試驗は內地の國家試驗たる檢定試驗と同一の效力あることを認め、且從前外地の中學校若は高等女學校に於て行つた檢定試驗も亦同樣なることと認むることとしたのである。

昭和二年十月十五日文部省告示第二百九十九號を以て左の如く大正十三年文部省告示第三百七十四號中に改正が行はれた。

大正十三年文部省告示第三百七十四號中左ノ通改正ス

「中學校第四學年修了者及高等學校高等科入學資格試驗合格者」ヲ「中學校第四學年修了者、高等學校高等科入學資格試驗合格者及高等學校高等科ノ入學ニ關シ指定セラレタル者」ニ改ム

大正十三年文部省告示第三百七十四號は前に述べた如く、專門學校入學者檢定規程第八條に依り一定の者に對して一定の學科目の試驗を免除することを定めたものである。卽ち博物の試驗を免除せらるる者は中學校第四學年修了者及高等學校高等科入學資格試驗合格者であつたが、今回は之に高等學校高等科の入學に關し指定せられたる者を加へたものである。

昭和二年十一月二十二日官公私立大學及專門學校に對し文部次官より左記發專一四一號通牒を發した。これは高等學校の試驗制度を改めた際であつたのである。

試驗制度改正ニ關スル件

今般試驗制度ニ關シ文部省訓令ノ發布アリタル處右ハ從來ノ試驗制度ニ伴ツテ生セル諸種ノ弊害ヲ除去スルヲ以テ旨趣トセルモノナルニ付貴(學、校)ニ於テモ此ノ旨趣ニ則リ右ニ準據シテ適當ニ御措置相成樣致度依命此段通牒ス

追テ御參考ノ爲ニ官立實業專門學校入學者選拔方法要項ヲ添附ス

昭和三年一月二十日勅令第八號を以て左の如く專門學校令中に改正が行はれた。

專門學校令中左ノ通改正ス

第一條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

專門學校ニ於テハ人格ノ陶冶及國體觀念ノ養成ニ留意スヘキモノトス

第二條但書ヲ削ル

第十條　公立又ハ私立ノ專門學校ハ文部大臣ノ監督ニ屬ス

文部大臣ハ公立又ハ私立ノ專門學校ニ對シ報告ヲ徵シ檢閲ヲ行ヒ其ノ他監督上必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第一條の改正に關しては先年學制改革の際特に精神陶冶、人格教育に重きを置くの意味を明にするが爲に、新大學令新高等學校令中學校令高等女學校令に於ては何れも同趣旨の規定を設けたが、專門學校令には學制改革の結果として別に規定の改正を要する點がなかつたので、精神教育に關する規定のことも他日の機會を待つ意味に於て其儘になつて居たので、今回之が實行を見るに至つたのである。蓋し近時憂慮すべき危險思想が學生の間に傳播しつつあつた事情の如きは殊に精神教育高調の必要を認めしめたものであらう。

第二條の改正は「北海道府縣又ハ市ハ土地ノ情況ニ依リ必要アル場合ニ限リ專門學校ヲ設置スルコトヲ得但シ沖繩縣ハ此ノ限ニ在ラス」といふ從來の規定から但書を削除したのである。元來此規定は沖繩縣がまだ自治體に非ざる時代に作られたものであり、同縣が自治體となつた今日但書の削除は當然のことである。

次に第十條は「公立專門學校ノ職員ノ旅費及給與ニ關スル規程ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム」といふ規定であつたのを前記の如くに改めたのである。第十條の改正に關しては從來專門學校令中には公立又は私立の專門學校に關する箇々の事項に就ては文部大臣の認可を要する等の規定はあれども、全體的に何人の監督に屬するものなるやに就ては何等の規定なく、殊に私立專門學校に關しては私立學校令第一條に「私立學校ハ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外地方長官ノ監督ニ屬ス」との規定あるが爲に或は全體的の監督權は地方長官に在るに非ずやとの解釋を容るる餘地あり、其邊頗る不明瞭にして屢々疑義を生ずるので、今回は公立私立專門學校は文部大臣の監督に屬することと規定して監督權の所在を明にしたのである。

昭和三年八月二十八日左記文部省告示第三百五十五號が發せられた。

專門學校入學者檢定規程ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

實業學校卒業程度檢定規程ニ依ル檢定ニ合格シクル者

但シ昭和三年度以後ノ合格者ニ限ル

實業學校卒業程度檢定規程は大正十四年五月二十八日文部省令第三十號を以て定められたもので（教育上の機會均等の款參照）實業學校卒業者にあらずして卒業程度の檢定に合格したる者は、之を實業學校卒業者と同一と看做すことを趣旨としたるものであるが、當初は實業學校卒業者と同一と看做すといふ意味は、業務に就く上等に於て實業學校卒業者と同一に取扱ふといふに過ぎずして、專門學校入學の關係に於て實業學校卒業者と等しく一般指定を與ふるといふまでの趣旨ではなかつたのであるが、今回の告示に依て實業學校卒業程度檢定合格者は、專門學校入學の關係に於ても全然實業學校卒業者と同一に取扱はるることとなつたのである。

昭和四年一月九日文部省令第一號を以て左の如く專門學校入學者檢定規程中に改正が行はれた。

專門學校入學者檢定規程中左ノ通改正ス

第六條中「金七圓」ヲ「金五圓」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右は試驗手數料の輕減である。

昭和四年四月十七日文部省令第二十一號を以て左の如く明治三十八年文部省令第十八號中に改正が行はれた。これは專門學校にのみ限ることではないが便宜此處に之を述べる。

明治三十八年文部省令第十八號中左ノ通改正ス

「文部省直轄諸學校」ヲ「高等師範學校及文部省直轄諸學校」ニ改ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年文部省令第十八號は文部省直轄諸學校の生徒にして、豫め學校長の許可を受けず他の文部省直轄諸學校の入學試驗を受けたるときは其入學試驗は之を無效とする旨を規定したものである。高等師範學校は勿論文部省直轄諸學校の中に包含せられたのであるが、昭和四年文理科大學官制の制定と同時に高等師範學校は文理科大學の附置となり獨立の文部省直轄諸學校ではなくなつたが爲に、右の如き改正を必要とするに至つたのである。

昭和四年五月二十三日文部省告示第二百五十八號を以て左の如く大正十三年文部省告示第三百七十四號專門學校入學者檢定規程第八條に依る試驗免除の學科目中に改正が行はれた。

大正十三年文部省告示第三百七十四號專門學校入學者檢定規程第八條ニ依ル試驗免除ノ學科目中左ノ通改正ス

「國語、漢文、歷史、地理、數學、物理、化學」ヲ「國語及漢文、歷史、地理、數學、物理及化學」ニ改ム

右は昭和四年の改正高等試驗令に依る試驗科目の改正に其歩調を合せたものである。

昭和四年五月二十八日左記文部省告示第二百六十六號が發せられた。

專門學校入學者檢定規程ニ依リ左記ノ者ヲ專門學校入學ニ關シ中學校若ハ修業年限四年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト指定ス

外國ノ學校ヲ卒業シタル者ニシテ文部大臣ノ認定シタル者

昭和四年七月二十四日文部省告示第三百十號を以て左の如く昭和四年文部省告示第二百六十六號に依る認定の件が定められた。

昭和四年文部省告示第二百六十六號ニ依ル認定ニ關スル件左ノ通定ム

一　認定ヲ受ケントスル者ハ願書（第一號書式）ニ履歷書（第二號書式）、戸籍抄本、當該學校ノ卒業證明書竝ニ學則ヲ添ヘ文部大臣ニ出願スヘシ

二　前項ノ證明書ハ入學資格、修業年限、履修學科目ヲ記載スルヲ要ス

三　認定ニ合格シタル者ニ對シテハ證書（第三號書式）ヲ交付ス

（書式）略

中學校に類する各種學校卒業者の專門學校入學者檢定規程に依る指定に關しては、從來晝間授業を行ふ學校の卒業者に限つて居たが、今回は夜間授業學校の卒業者にも此の特典を及ぼし、一般指定を爲し得ることに文部省の議が決したので、「夜間授業ヲ行フ中學校ニ類スル各種學校卒業者ノ專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定內規」が定められ、昭和七年五月十八日左の如く各地方長官に對し發普五十六號普通學務局長通牒が發せられた。

夜間授業ヲ行フ中學校ニ類スル各種學校（所謂夜間中學）卒業者ノ專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關スル件依命通牒

中學校ニ類スル各種學校卒業者ノ專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關シテハ從來晝間ニ於テ授業ヲ受クル者ニ限ル取扱ノ處今般夜間ニ於テ授業ヲ受クル者ニモ之ヲ及ホスコトニ省議決定致シタルニ付御了知相成度

右ハ現ニ所謂夜間中學ニ學フ青少年ハ概ネ晝間業務ニ從事シ夜間ニ於テ授業ヲ受クルノ已ムヲ得サル實情ナルヲ以テ玆ニ社會政策的見地ヨリ教育ノ機會均等ヲ與ヘ以テ中學校卒業者ト同樣ノ資格ヲ認メ斯種教育ノ改善ヲ圖ラントスルモノニ有之就テハ爾今貴管下當該學校ヨリ右指定方申請有之タル場合ハ專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定ニ關スル規則所定ノ外特ニ左記事項ヲ整備セシメ其ノ實情詳査ノ上意見ヲ附シ御進達相成度依命此段通牒ス

記

夜間授業ヲ行フ中學校ニ類スル各種學校卒業者ノ專門學校入學者檢定規程第十一條ニ依ル指定內規

一、指定ハ省令ニ定ムル事項ノ外左ノ各項ニ該當スルヲ要スルコト

（一）入學資格及修業年限

（イ）尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル場合ハ修業年限ヲ五年以上トスルコト

（ロ）高等小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル場合ハ修業年限ヲ四年トスルコト

（ハ）入學者ハ晝間業務ニ從事スル者ヲ主トスルコト

（二）學科課程

學科課程ハ中學校ニ準スルコト　但シ作業科ハ之ヲ缺キ體操ノ教授時數ハ之ヲ減少スルヲ得ルコト

（三）教授日數

（イ）尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル場合ハ全學年ヲ通シテ千百七十日以上、四千六百八十時以上トスルコト

（ロ）高等小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル場合ハ四箇年ヲ通シテ七百八十日以上、三千百二十時以上トスルコト

（四）教授時間

教授ノ終了時刻ハ午後九時三十分ヲ超エルヲ得サルコト

（五）生徒定員及學級編制

（イ）生徒定員ハ二學級併進ヲ以テ限度トスルコト

(ロ)學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ編成シ一學級五十人以下トスルコト

(ハ)第二學年以上ニ入學ヲ許スヘキ者ハ相當年齡ニ達シ前各學年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等ノ學力ヲ有スルモノトシ當該學年ノ生徒數ハ入學當初ノ生徒數ヲ超過スルヲ得サルコト

(ニ)最高學年ニハ中學校若ハ專門學校入學者檢定規程ニ依リ指定ヲ受ケタル學校ヨリノ轉學又ハ當該學年ニ於テ退學シタル者ノ再入學ヲ除クノ外新ニ生徒ノ入學ヲ許ササルコト

(六)教員組織

(イ)教員定數ハ中學校ニ準スルコト

(ロ)專任教員（他ヨリ兼ネサル者）ハ教員全數ノ三分ノ一以上トスルコト

(ハ)教員免許狀ヲ有セサル者ノ數ハ教員免許狀ヲ有スル者ノ二分ノ一ヲ超エサルコト

(七)照明設備

夜間ノ照明設備ハ特ニ教授上及保健上適當ナルモノナルコト

(八)教科書

教科書ハ文部省檢定中學校教科書ヲ用フルコト

(九)授業料及基本金

(イ)授業料入學料其ノ他生徒ノ負擔ハ中學校ニ比シ相當低廉ナルヲ要スルコト

(ロ)設立者ハ私立ニアリテハ財團法人トシ基本金ヲ三萬圓以上トスルコト

一、左ノ事項ニ付實地調査ヲ行フコト

(一)教授訓練ノ狀況

(二)職員勤務ノ狀況

(三)生徒ノ學習狀況及成績

(四)生徒ノ出席狀況

(五)設備ノ狀況

(六)其ノ他必要ナル事項

第二項　法律經濟等に關する專門學校

專門學校令に依る專門學校たる法律經濟等を授くる私立學校に就て述べると、早稻田大學附屬早稻田專門學校（東京市）が大正十三年四月に、日本大學專門學校（大阪府）が大正十四年三月に、女子經濟專門學校（東京市）が昭和三年三月に、橫濱專門學校（橫濱市）が昭和四年四月に何れも設立を認可せられた。

第三項　醫藥に關する專門學校

寺內內閣の時に富山縣立藥學專門學校の設備を充實して之を官立に引直すの計畫を定め、之を豫算に計上したのであつたが其創立準備が整つたので、大正九年十一月勅令第五百五十一號を以てする文部省直轄諸學校官制中の改正に依り富山藥學專門學校が設立せられ、平山松治が校長に任ぜられた。授業開始は大正十年四月からであつた。尙ほ富山縣立藥學專門學校は大正十年三月三十一日限り廢止せられた。

依て大正九年十二月一日文部省令第二十九號を以て左の如く富山藥學專門學校の修業年限、學科目及其の程度竝研究生に關する規程が定められた。

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで　　三七三

富山藥學專門學校ノ修業年限、學科目及其ノ程度竝研究生ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

富山藥學專門學校規程

第一條　富山藥學專門學校ノ修業年限ハ三年トス

第二條　富山藥學專門學校ノ學科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

學科課程表

學科目 ＼ 學年	第一學年			第二學年			第三學年		
	每週教授時間數			每週教授時間數			每週教授時間數		
	前學期	後學期		前學期	後學期		前學期	後學期	
修身	一	一	一						
獨逸語	八	八	八	五	五	五	四	四	四
鑛物學	一	一	一						
機械學	二	二	二						
電氣及磁氣學	二	二	二						
無機化學	三	三	三						
有機化學	四	四	四						
藥用植物學	三	三	三						
同實習	二	二	二						

學科目 ＼ 學年	第一學年			第二學年			第三學年		
	每週教授時間數			每週教授時間數			每週教授時間數		
	前學期	後學期		前學期	後學期		前學期	後學期	
分析化學	二	三	三	三	三	三	四	四	四
同實習	六	六	六	三	三	三	三	三	三
製圖	四	四	四						
無機藥化學				三	三	三	三	三	三
同實習				三	三	三	三	三	三
有機藥化學				三	三	三	三	三	三
同實習				三	三	三	三	三	三
生藥學及和漢藥論				二	二	二	二	二	二
同實習				三	三	三	三	三	三
衞生化學				二	二	二	二	二	二
同實習				三	三	三	三	三	三
製藥機械學				一	一	一	一	一	一
日本藥局方外國藥局方				二	二	二	二	二	二
藥品鑑定				一	一	一	一	一	一
調劑學				二	二	二	二	二	二
同實習				二	二	二	二	二	二
無機藥品製造學							四	四	四
有機藥品製造學							三	三	三

藥品製造學實習						九	一〇
電氣化學						一	一
同實習						二	二
裁判化學						二	二
同實習						二	二
細菌學大意						一	
醱酵學大意						二	
同實習							
植物分析法							二
有機藥品構造研究法及合成法新藥論						二	二
藥理學大意						二	二
製劑學及製劑包裝法						二	二
製藥用機械設計及製藥工場設計						二	二
藥事法令飲食物制度						一	
藥業經濟							一
體操	二	二					
合計	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇

教授上特別ノ必要アルトキハ學科目又ハ其ノ教授時間數ノ配當ヲ變更シ或ハ教授定時間外若ハ休業期間ニ於テ臨時講演ヲ聽カシメ又ハ實習ヲ課スルコトヲ得

第三條　卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ就キ更ニ研究セントスル者アルトキハ學校長ハ必要ト認メタル場合ニ限リ二年以內學校ニ於テ研究ニ從事スルコトヲ許可スルコトヲ得

原內閣の時高等教育機關擴張計畫の一部として新潟、岡山、千葉、金澤、長崎の五醫學專門學校の設備を利用し之を擴充して五箇の醫科大學を創立することが決定せられ、大正十年度に於て新潟醫科大學及岡山醫科大學が設立せらるることとなつたので、大正十一年三月勅令第百四十二號を以てする文部省直轄諸學校官制中の改正に依り、新潟醫學專門學校及岡山醫學專門學校が廢止せられた。尙ほ此二校に於ける現在生徒の爲に經過的に新潟醫科大學及岡山醫科大學に各醫學專門部が附屬せられたことは後に大學教育の款に於て述べる通である。

尙ほ殘つた千葉、金澤、長崎の三醫科大學は大正十二年度に於て設立せらるることとなつたので、大正十二年三月勅令第九十四號文部省直轄諸學校官制中の改正に依り千葉、金澤、長崎の三醫學專門學校は廢止せられた。而して此三校の醫學科に於ける現在生徒の爲に經過的に千葉醫科大學、金澤醫科大學及長崎醫科大學に各醫學專門部が附屬せらるることとなつた。然るに此三校には前年廢止せられた新潟及岡山の醫學專門學校と異なり醫學科の外に藥學科があり、然も新設の三醫科大學には藥學科を置かざることとなつて居る爲、藥學に關しては將來引續き專門學校程度の教育機關を必要とする關係あるを以て、三醫科大學に恒久的の藥學專門部（專門學校令に依るもの）を置くこととし、三校藥學科の現在生徒を此藥學專門部に移すこととしたのであつた。此ことも後に大學教育の款に於て述べる通である。

此の如くにして官立の醫學專門學校は自然其存在を失ふに至つたのである。

大正十二年十月十三日文部省令第四十號を以て左の如く富山藥學專門學校規程が改正せられた。

富山藥學專門學校規程左ノ通改正ス

富山藥學專門學校規程

第一條　富山藥學專門學校ノ修業年限ハ三年トス

第二條　富山藥學專門學校ノ學科目及其ノ程度左ノ如シ

學科目 ＼ 學年	第一學年			第二學年			第三學年		
	每週教授時間數			每週教授時間數			每週教授時間數		
學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期	第一學期	第二學期	第三學期
修身	一	一		一	一		一	一	
獨逸語	一〇	六		四	四		三	三	
英語	一	一		一	一		一	一	
鑛物學	一	一		一	一		一	一	
機械學	一	一		一	一		一	一	
物理學	二	二		二	二		二	二	
無機化學	三	三		三	三		三	三	
有機化學	四	四		四	四		四	四	
藥用植物學	三	三		三	三		三	三	
同實習	二	二		二	二		二	二	
分析化學	五	四		四	四		四	四	
同實習	二	七		八	八		八	八	
製圖	二	二		二	二		二	二	
無機藥化學									
有機藥化學									
藥化學實習									
生藥學及和漢藥論									
同實習									
衞生化學									
同實習									
製藥機械學									
藥局方									
藥品鑑定									
調劑學									
同實習									
無機藥品製造學									
有機藥品製造學									
同實習									

藥品製造學實習							六	八	九
電氣化學							二	二	二
同實習							二	二	三
裁判化學							三	二	二
同實習							二	四	四
微生物學							二	一	一
同實習							二	二	二
植物分析法							一	一	一
藥理學							二	二	二
製劑學							二	二	二
藥事法令、飲食物制度							一		
法制經濟							一	一	
體操	二	二	一						
合計	三九	三九	三九	三八	三九	三九	三八	三九	三九

教授上特別ノ必要アルトキハ學科目又ハ其ノ教授時間數ノ配當ヲ變更シ或ハ教授定時間外若ハ休業期間ニ於テ臨時講演ヲ聽カシメ又ハ實習ヲ課スルコトヲ得

第三條　卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ就キ更ニ研究セントスル者アルトキハ學校長ハ必要ト認メタル場合ニ限リ二年以內學校ニ於テ研究ニ從事スルコトヲ許可スルコトヲ得

附則

本令ハ大正十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正九年文部省令第二十九號富山藥學專門學校規程ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

原內閣の時の高等教育機關大擴張の一部として、熊本市に在つた私立九州藥學專門學校の設備を充實して之を官立に引直すことが計畫せられ其創立準備が整つたので、大正十四年二月勅令第六號を以てする文部省直轄諸學校官制中の改正に依り熊本藥學專門學校が設立せられ、安香堯行が校長に任ぜられた。授業開始は大正十四年四月からであつた。

依て大正十四年三月三日文部省令第五號を以て左の如く熊本藥學專門學校規程が定められた。

熊本藥學專門學校規程

第一條　熊本藥學專門學校ノ修業年限ハ三年トス

第二條　熊本藥學專門學校ノ學科目及其ノ程度左ノ如シ

學年	學科目	學期	修身
每週教授時間數	第一學年	第一學期	一
		第二學期	一
		第三學期	一
每週教授時間數	第二學年	第一學期	一
		第二學期	一
		第三學期	一
每週教授時間數	第三學年	第一學期	一
		第二學期	一
		第三學期	一

獨逸語	英語	鑛物學	物理學	機械學	製圖	無機化學	有機化學	藥用植物學	同實習	定性分析學	定量分析學	同實習	無機藥化學	有機藥化學	同實習	生藥學及和漢藥論
八	一	一	一	一	二	四	八	三	二	五		二				
五	一	一	一	一	二	三	七	三	三	二		九				
五	一		一	一	二	二	六	三	三		三				一〇	
三	一															
三	一															
三	一															
三	一															
三	一															
三	一															

同實習	製藥機械學	藥局方	藥事法令	飲食物制度	藥品鑑定	藥理學	理論化學	電氣化學	同實習	動植物分析法	同實習	同實習	無機藥品製造學	有機藥品製造學	同實習	衞生化學	同實習	裁判化學	同實習
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二
三	二	二	三	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二

微生物學											
同實習											
調劑學											
同實習											
製劑學											
法制經濟											
體操	二	二	二								
合計	四一	四一	四一	四〇	四一	四一	四一	四〇	四一	四一	

教授上特別ノ必要アルトキハ學科目又ハ其ノ教授時數ノ配當ヲ變更シ或ハ教授定時間外若ハ休業期間ニ於テ臨時講演ヲ聽カシメ又ハ實習ヲ課スルコトヲ得

第三條　卒業者ニシテ既修ノ學科目ニ付更ニ研究セントスル者アルトキハ學校長ハ必要ト認メタルトキニ限リ二年以內學校ニ於テ研究ニ從事スルコトヲ許可スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正十四年四月十一日左記文部省告示第二百十九號が發せられた。

九州藥學專門學校ヲ大正十四年三月三十一日限リ廢止スルノ件認可セリ

大正十四年五月二日文部省令第十五號を以て左の如く富山藥學專門學校規程中左ノ通改正ス

第二條第一項ノ表中體操及合計ノ項ヲ左ノ如ク改ム

體操	三	三	三	二	二	二	二	二	二	二	
合計	四〇	四〇	四一	四〇	四一	四一	四〇	四一	四一	四一	

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和三年一月二十六日文部省令第一號を以て左の如く熊本藥學專門學校規程中左ノ通改正ス

第二條中學科目及其ノ程度ノ表ヲ左ノ如ク改ム

學年	學期	修身	每週教授時間數 第一學年 第一學期	第一學年 第二學期	第一學年 第三學期	第二學年 第一學期	第二學年 第二學期	第二學年 第三學期	第三學年 第一學期	第三學年 第二學期	第三學年 第三學期
時間數											
		一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

第七章　大正九年世界大戰直後より昭和七年末に至るまで

獨逸語	六	六	六	三	三	三	三	三	三	三
英語	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
鑛物學	二	一								
物理學	一	一	一							
機械學及製圖										
無機化學	四	四	二		二					
有機化學	五	五	五	二						
理論化學	二	二	二							
藥用植物學	二	二	二							
同實習			八							
定性分析	一	一	一							
同實習	一五	一五								
定量分析			三							
同實習										
有機分析										
同實習										
藥化學			二	五						
同實習										

生藥學及和漢藥學	六	六	六	三	三	三	三	三	三	三
同實習										
藥局方及藥品鑑定										
同實習										
藥理學										
微生物學										
同實習										
應用電氣化學										
同實習										
動植物化學										
同實習										
衞生化學及飲食物化學										
同實習										
藥品製造學										
同實習										
經濟製藥學										
同實習										
裁判化學										

學科目									
同實習								四	四
藥效學	一						二	二	二
調劑學							二	二	二
同實習								二	二
製劑學							二	二	二
同實習								五	五
法制經濟							一	一	一
藥事法令及飲食物制度							一	一	一
體操	二	二	二	二	二	二	二	二	二
特別講義							不定時		
同實習									
合計	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一

附則

本令ハ昭和三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和三年十月文部省直轄諸學校官制中の改正に依り東京高等齒科醫學校が設立せられ、島峰徹が校長に任ぜられた。授業開始は昭和四年四月からであつた。

從來齒科醫學を授くる學校は私立のもののみで官立のものは一校もなかつたが、是に於て初めて官立の齒科醫學專門學校の存在を見るに至つた。

右は高橋（是淸）內閣の文相たる中橋德五郎の時に所謂高等敎育機關擴張整備計畫の一部として齒科醫學を授くる專門學校を設立するの計畫を定め、之に關する豫算は大正十二年加藤（友三郎）內閣の時に議會の協贊を得たに拘らず、其後關東地方大震災の爲豫算繰延べ等のことがあつて、今回漸く之が實施を見るに至つたのである。（學制改革問題及高等敎育機關擴張整備計畫の款參照）

昭和三年十二月二十九日文部省令第十九號を以て左の如く東京高等齒科醫學校規程が定められた。

東京高等齒科醫學校規程左ノ通定ム

東京高等齒科醫學校規程

第一條　東京高等齒科醫學校ノ修業年限ハ四年トス

第二條　東京高等齒科醫學校ノ學科目及其ノ程度左ノ如シ

學科目＼學年・學期	第一學年 前期	第一學年 後期	第二學年 前期	第二學年 後期	第三學年 前期	第三學年 後期	第四學年 前期	第四學年 後期
修身	一	一	一	一	一	一	一	一
獨逸語	(2)八	(2)八	(2)六	(2)六	(2)四	(2)四	(2)二	(2)二
英語	(2)二	(2)二	(2)二	(2)二	(2)二	(2)二	(2)二	(2)二